
マチ子さん、見えない。

Masa Kumagai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マチ子さん、見えない。

【Nコード】

N9345P

【作者名】

M a s a K u m a g a i

【あらすじ】

町田マチ子さん15歳、ふつうの高校一年生になりました。幸せいっぱい胸少し。唯一の悩みは「人よりちょっと見えない」能力があることだった。どきどきの初登校　しかし二十世紀が丘高校は生徒も先生もヘンテコな連中ばかりだった。よかった、頭がおかしいのは自分だけじゃないんだ　よね？　はず。たぶん。

01話 初登校からマイナス五分後（前書き）

一日一話更新を目標としたハイパーナンセンス学園ストーリー（予定）。この小説は舞台、キャラクター、ストーリーなど、すべて即興で書かれています。もちろん今後どういった展開になるのかはわたしにもわかっていません。作者の綱渡りっぷりも含めて楽しんでいただければと思います。

01話 初登校からマイナス五分後

頭がおかしいのはわたしだけじゃない　そう気づいたのは登校初日、校舎に到着してからマイナス五分ばかりだったときだった。つまり、わたしは敷地に足を踏み入れてもいない。

自宅から高校まではチャリンコで十五分。特別に改造を施した愛用のママチャリ　ブレーキがなかなか効かない　号にまたがり、わたしは県道をすいすい走る。正門へつづく並木通りが遠目に見えるころになると、すれちがう生徒も多くなった。おお、同じ制服の女の子。ひとりぼっちでぎくしゃくしていて、背中に「わたしは新入生です。とても緊張しています」と張り紙でもしているような歩き方だ。男の子が数人、体を折り曲げなにやら爆笑しながら完全に歩道をふさいでいる。あちらさんも新入生なんだろうかと思いながら、いったん車道に出てすいーと追い抜く。

いつもの感覚を頼りに、並木通りの交差点十メートルくらい手前からブレーキをかける。キキーツ、キュイキュイキュイキュイ音だけは激しい。だがチャリンコも初登校で緊張しているのか、わたしの知らないうちに　ブレーキがぜんぜん効かない　号にレベルアップしていたようだった。

「わわわわわわ　」

周囲の生徒がいつせいに顔を向け、わたしと暴走自転車に注目する。「あわわわ　」

あわあわ言いつつもわたしは冷静だった。慌てず騒がず、くいつと下半身をひねり、後輪を横滑りさせてセルフブレーキをかける。

仰天して体を固まらせている女の子集団の手前十五センチのところ
でストップした。みんなぽかんと口を開け、なんだこいつはという
目で同時にわたしを見上げた。

図らずもお友達距離に侵入してしまったので、わたしはひきつる
顔に無理やり笑みを乗せ、ひよこつと会釈した。

「どうも。おはよう、です　？」「これだけでは足りないような気
がして、往年のいかりや長介的においつすと右手を挙げた。「そし
て　あの、はじめまして　？」

ヘルメットみたいなボブヘアの子が挨拶を返してくれた。「あい、
おはよう、です　？」

なんでお互い疑問系になったのかはよくわからない。急いでチャ
リンコを飛び降りると、愛車　痴漢　号のサドルにスカートの端が
ひっかかった。わたわたしながらスカートを救出し、整え、振り返
らないようにしながら駆け足で正門へ向かった。くすくすと笑う声
が聞こえてくる。わたしは適当なところで立ち止まり、朝のエクサ
サイズでときどきする心臓の音を聞きながら顔を上げ、桜満開の並
木道を見渡した。そして眉をひそめた。

並木道は枯れ木道だった。ねじくれた桜の枝はどれも、花びら一
枚くつつけていない。冬の寒々しさのままだ。

なんだかがっくりきて、首がつま先方面に引き寄せられていく。
みんな気にしていない様子だった。振り返ると、角のローソンがな
くなっていった。入試のときはあったはずなのに。あのときは帰りに
脱力しながらピノを買って帰った。どうでもいいか。

そしてわたしはどうか正門をぐり、初登校マイナス五分から五分後、県立二十二世紀が丘高校の生徒としてはじめて校舎に足を踏み入れた。

ところで、二十二世紀が丘とはなんなのか。ずっと疑問に思っていた。この高校の名前をつけた人は、たぶんわたしより頭がおかしかったんだと思う。親しみを覚えたから受験したわけではないし、実際正反対だろうと思う。この名前はちょっと行き過ぎてる、みたいなところがあるけど、わたしは後ろ向きに歩きたいタイプだった。

そういえば 三分かけて下駄箱を探し、バッグから上履きを取り出し、人もまばらなホールを見まわす。緑色の掲示板が目にとまる。なんの掲示もなかった。

わたしの教室はどこだ？

くるりと一回転する。馬のしっぽが遅れて顔をぴしゃっと打ちつけた。だれが教えてくれるんだろう？ オネエは？ 初登校はいっしょに、って言ってたのに、三日前から連絡が取れないでいる。

白衣を着た先生がおりかかった。そこでわたしは眉尻を下げて唇をとがらせ、困ってるんですオーラをめいっばい出しながら上目遣いに見つめた。先生は気づきもしない。つま先をにらみつけながら早足でとおりすぎる。わたしは驚きのあまり思わずふつう顔に戻り、振り返った。かわいそう系の表情が通じなかったのは十六年生きてきてこれで二度目だ。一度目は十四歳の夏で、相手はたしかだれだか忘れてしまった。

そんなことはどうでもいい。

「すみません」白衣の背中に声をかける。「クラスがどこかわからないんですけど」

先生はスリッパをキュツと鳴らして立ち止まり、サツと振り向いた。七三分けの頭に、うつすらと色の入ったメガネをかけている。

そして「はあ？」という顔をした。「自分の家を忘れてしまったんですが」とたずねられたときみたいに。

「クラスがわからない？」

「そうなんです」掲示板を指す。「ふつう、こういったところに張り出されたり」

「ふつうは言われなくてもわかるはずなんだけどね」

わかるわけないだろう。

先生は気が滅入りそうになるようなため息をつき、スリッパをキュッキュツと鳴らしてサツサツと二歩近づいてきた。次の瞬間中指を立てた右手が顔のまえに来てメガネをずり上げ、仕事が終わるといつのまにか手は白衣のポケットに収まっていた。なんでも動作をショートカットせずにはいられないタイプのようだ。

「じゃ、何組がいい？」動作と同じくらい早口でめんどくさそうに言った。「どこがいい？好きにすればいいじゃないか」

「はい？」あまりに理不尽な回答に、思わず友達用の返事を

してしまった。「ええ？」

「はやくしてくれ。急いでるんだ」もう歩き出しそうな勢いだった。
「あと三秒」

「三秒？」

「二、一、ハイおしまい」速攻でカウントダウンが終わった。メガネが勝手にずり上がる。腕の動きが速すぎて見えないのだ。「じゃ」

「待つて待つて待つて」なれなれしく腕をつかみかけ、思い直してひっこめる。だがそうでもない我突然ワープしてしまいそうだ。なんでもいいから答えよう。「一組がいいです」

「いちくみー？」眉をメガネのフレームから離陸させ、なぜか小バカにしたように言った。「どうして一組なの？」

「なんでも一番が好きだからです」嘘をつく。

「そんなバカな話はいままで聞いたことが」

と、先生は急に通信が入ったようにサッサと左右に顔を向けた
と思ったらまっすぐこちらを見下ろしていた。

「もうダメだ。間に合わない。じゃ」

わたしの予想は的中した。先生はポンという音と親父コロン混じりのそよ風を残し、ワープしてどこかへ行ってしまった。瞬間移動できる人間に出会ったのはじめてだった。

呆然と立ち尽くす。いつのまにかホールにはだれもいなくなっていた。時計を見る。あと二、三分でホームルームの時間だ。わたしは階段を駆け上がった。そしてできる限りの瞬間移動で校舎じゅうを駆けずりまわり、ようやく一年一組のクラスを発見した。

01話 初登校からマイナス五分後（後書き）

というわけで、前書きにも申し上げましたが今後のことはまったく考えていません。その場のひらめきでいちばん笑えるものを選んで書いています。どんどん矛盾していくんだろぅな……。とりあえずはじまったばかりではありますが、コイツはおもしろくなりそうだぜ！ と思われましてらご意見ご感想などお気軽にどうぞ。泣いて喜びます（予定）。

02話 一年一組、四次元先生

すでにホームルームがはじまっていた。音を立てないようにそつと引き戸のドアを開ける。

「ガラガラガラ！」ドアが言った。「ガラガラ ガツーン！」

言うだけじゃなくドアは途中からわたしの手を離れ、勝手にものすごい勢いで開けっ放した。「あつ」と言っただけになにか悲鳴を上げたほうがいいんじゃないかと考えているうちにドアは反対側の留め具へ全力でぶつかった。

口で言ったんじゃない本物の効果音がとんでもない音を響かせた。一年一組のクラスメイト全員が、チンピラのように登場したわたしへ一斉に振り返った。先生も言葉を止めてわたしに顔を向けた。老朽化したドラえもんみたいな顔で、髪の毛はとても少なかった。

「あの」「体が勝手に会釈した。」「どうも」

だれも反応しなかった。

「えーと」

視線から逃れたくてなんとなく黒板の上を見ると、まるい時計があった。長針が八時十五分と十六分のあいだを行ったり来たりしている。どっちにしようか迷っているみたいだった。

ついに先生が口を開いた。アホの坂田へ進化する途中と言ったほうが正確かもしれない。

「遅刻」

と勢い込んで言いかけ、急にサツと振り向いて時計を見上げた。
なにごとかとわたしも顔を上げた。

長針はなぜか八時十一分に戻っていた。

「じゃないのか」

先生は頭頂部をこちらに向けたまま固まっている。

「そうですよ」よくわからないが時計に助けられた。どさくさ紛れに教室へ侵入し、席のほうへすすすと蟹歩きで進んだ。「まだ四分もあるじゃないですか」

「ですよね？」いちおう確かめる。

「まあ、たぶん」先生は首をひねりながらゆっくりと前へ向いた。
「時計がそう言うんだから、まちがいないだろう。時は幻想だという者もいるが、わたしはそんなことは」

わたしはぎょつとした。髪の毛がとても少ない頭の上で、時計が小バカにするように三つの針ぜんぶをぐるぐる動かしたりびつと十四時二十三分で止まったりだらしない感じで5と7のあいだをぶらぶら揺れ動いたりしている。先生はだるまさんが転んだ的なアクションでふたたびサツと振り向いた。時計はすばやく反応して針を元に戻した。

納得いかなそうな表情で向き直る。わたしはとりあえず空いてい

る席へ腰かけた。並びからいつても町田の「ま」のあたりなので、たぶんまちがいないだろう。クラスメイトの視線をびりびり感じつつ、カバンを机に置いてなんとなく黒板を見た。先生は富田という名前らしい。白チョークを横に使って、これ以上は不可能なほどめいっぱい大きく書かれている。ルビまで振ってある。

富田先生は気を取り直したように教卓へ手を突き、教室を見まわした。

「というわけで、約一名遅れて来たのもう一度自己紹介をします。富田と言います。豊かな富に田んぼの田」「ご丁寧にひと文字ずつ指さして説明する。」「ですが、下の名前は教えません。まだ友情が芽生えていませんから」

二、三ため息が聞こえてきた。あの黒板の様子だと、もう百回くらい自己紹介をしている様子だった。

「みなさん、時間は守りましょう」

はあーっ。

「えー、そしてみなさんはこれから三年か四年、高校生活を送ることになるわけですが、まあその」

渋い表情で言葉を詰まらせる。んーとうなり、急になにかにとり憑かれたように表情を変え、パツと顔を上げた。

「みなさん、時間は守りましょう」はじめに戻った。「時間だけはきっちりと守ってください。ルーズな人は嫌いです。日本をダメにします。ちなみにわたしは富田と言います。豊かな富に田んぼの田。」

そしてみなさんはこれから三年か四年、高校生活を送ることになるわけですが――

先生の時間のほうが壊れているみたいだった。無限ループの予感に教室がざわつき出す。壁掛けの時計は「ご愁傷様」といった感じで長針をぐるりと一回転させた。

わたしの華々しい登場はすでに過去のものになったようなので、少しリラックスして教室を見まわしてみた。わたしの中学は合併話もち上がるほど小さな学校だ。ひととおり顔を眺め、クラスのみんなどは別の意味でため息をついた。お友達どころか知った顔もない。なんとかするしかないんだろ。友達って、どうやってつくればいいんだっけ？

中学一年のころを思い出していると、二軒となりの男の子と目があつた。にやにや笑いながら前の席の子を突つつき、わたしのほうへ顎をしゃくる。突つつかれたほうはぎよろつとした目をさらに広げ、実にうれしそうにしっしつと笑い、急に真顔になって前に向き直った。にやにやのほうはずっと無遠慮な視線を向けつつける。

と、急にお尻が持ち上がり、イスがぐにやりと生物的な柔らかさに変化した。つづいて二の腕を両方ぐつと捕まれる。わたしはぞわぞわして「ひえっ」と言った。自分の腕を見る。だれもなにもつかんでいなかった。スカートをたくしてイスをのぞきこむ。座面とわたしのあいだに空気があつた。というか、わたしは浮かんでいた。

そんなバカな。パニックを押さえつつ、お尻の感触に神経を集中させる。そして背もたれのふにやふにやした感触。これってなんとなく覚えがある。これはちょうど。

「ちょっとー？」イスが女の子の声で言った。「いいかげんどいて
ったら！　いつまであたしの脚にすわってるつもり？」

02話 一年一組、四次元先生（後書き）

時間が厳しかった……。二話目でこんな調子じゃ先が思いやられま
す。

03話 みんな知ってる体重三十九キロ

見えない手がわたしの脇腹をむんずとつかんだ。手はちょうど肋骨のあいだに指先らしきものを突き立て、わたしを持ち上げた。脇は弱いので普段は触られるだけで身もだえしてしまふところだけど、すでに客観的に見てイスにすわった体勢で空中浮遊しているので友達につんつんされたときみたいになうへうへ笑うのはどうかと思った。友達でもないし。

というか、だれなんだ。

「あんた、体重三十九キロだからって人の膝にすわってもいいっていうの？」

口調は厳しかったが、透明の女の子はわたしを机のわきの床に優しく着陸させてくれた。わたしは急いで振り返る。やっぱりなにもなかった。けどどこにかを感じる。電車で急いで駆け込んだ拍子に知らない人のお友達距離へ近づいてしまったときに発せられるオーラだ。スプレーすれば怒りに満ちた赤いもやもやが浮かび上がりそうだった。

天板の上のカバンがすーっとスライドし、わたしの足もとに落ちた。

「三十九キロ？」 富田先生が口をはさんできた。「ちゃんとご飯食べてるのか？」

「三十九キロっていうと」

だれかが言った。わたしは振り向き、声の主を見た。遅れて馬のしっぽが鼻先を打つ。いつもどおり下ろしてくるんだった。二軒となりのつんつん頭のにやにや男がぽかんと口を開けてわたしを見上げ、脳の中でなにやら計算を行っている。

「 名前は町田だ！」

実にうれしそうに頭を持ち上げ、にーっと笑った。この子は体重から人の名字が判別できるらしい。

「ちょっと待って」人の体重をぴたりと当てられる見えない女の子が言った。「いま三十八・八キロになった。緊張で発汗したから」

「ご飯食べてる？」先生がふたたび言った。

「下の名前も当てられるよ。ヒップは何センチ？」体重を当てられる子が言った。「スリーサイズで幼稚園ののあだ名まで」

「ねえ、ごはんはー!？」

先生が駄々っ子のように繰り返した。わたしは急いで先生へ向き「食べてます」と言い、姓名判断男がスリーサイズを測ろうと立ち上がりかけたのを見て思わずあとじさり、体重透明女に背中をぶつけた。「ちょっと!」

だんだんわけがわからなくなってきた。右も左も定かではなくなり、わたしは必死で自分の席を探し、教室を見まわした。壁掛けの時計が生徒たちをもてあそぶように下校の時刻になってみたりしている。黒板には巨大な「富田」の文字。なんだかあれがいちばんまともなような気がしてきた。

「ガラガラガラ！」教壇側のドアが言った。そして開いた。「実時間ですでに入学式がはじまつてるんだが」

と言つて顔を突き出してきたのは、ホールで遭遇した白衣メガネの先生だった。正視できないほど恐ろしい勢いで頭を振りまわして教室を見やり、わたしのほうを向くと首のギアに異物がはさまったみたいなぎぎつという音を立てて制止した。

しばらく見つめ合う。先生が口を開いた。

「ご飯食べてる？」

03話 みんな知ってる体重三十九キロ（後書き）

話が進んでないぞ！

04話 アヤたん、わからない。

いま何時だかわからないがとにかく入学式がはじまっているように、みんなでめいめいに立ち上がった。富田先生はまだなにか言い足りないのか納得いかない表情で教卓にしがみついていたが、やる気のない牧羊犬のようにしぶしぶ生徒を廊下に追い立てはじめた。

わたしは床に落とされたカバンを拾い、いじめられっ子みたいな気分になりつつ廊下へ向かうみんなをかきわけ、教室の後ろのロッカーへ向かった。どうでもいいけどご飯は三食きちんと食べている。これからは食べ過ぎに注意しないといけない。

さっきのハプニングで、わたしはすっかり自信をなくしていた。落ち込むとかそういう意味ではなく、自分の感覚が信じられなくなっていた。生まれ落ちたときから自分がふつうとちがうのはわかっていて。理由はわからないけど、わたしにはなにかが見えない。なにが見えないのかはわからない。なんせ見えていないのだから。なにかが見えなくて困ったこともなかった。なかったと思う。たぶんもしかしたら困ったことを起こしていたのかもしれない。自分が気づいていないだけで。でも見えていないのだから、やっぱりわたしが気づけるはずはないのだった。

わたしは目を皿のように開いて前方を凝視し、ウサギのように両手を突き出してひよこひよこ歩いた。みんなはあらかた廊下に出たので（たぶん）、さいわいだれとも激突してひっくり返るようなことはなかった。ロッカーはあった。わたしのロッカー！こんなうれしいと思ったことはない。しかも扉もなんなく開いた。しゃべりもしなかった。すごい。ありえない。感動のあまりほおずりしそうになった。

二十四時間テレビより意味不明な感動の嵐に巻き込まれているうち、今度はむしろ時間に時間をたしかめたくなった。カバンをひっかきまわして携帯電話を取り出す（ウィルコム）。うさが餅つきしている壁紙の左上に、八時四十五分のデジタル表示があった。現実時間を知ることができ、わたしはほっとした。メールの着信は三百四十七件あったけど。

「富田先生のせいなの」

いきなり話しかけられ、わたしはロッカーの扉に指をはさみかけた。慎重に閉じてもっと慎重に振り向く。声はころころした女の子のものだったが、実際は緑色の肌をしたトカゲ人間かもしれない。

「つまり、ホームルームが入学式より先にはじまっているってことがね」

わたしより頭半分くらい小さかったが、ふつうの女の子だった。お餅のような真っ白い肌にかわいらしい丸顔、ヘルメットみたいなボブヘアだった。

「富田先生の実力のひとつね。周囲の時間をぐだぐだにしてしまう能力。自分も含めてつてところが、まああの人らしいんだけど」

とりあえずわたしは答えた。「へえ」

それにしても、初対面なのにものすごい親しさのこもった口調。あ。そういえばこの子、見覚えがある。それともデジャブーだろうか。

「行かないの？ 教室を出たら現実時間に戻るから、急いだほうがいいよ」

思い出した。チャリンコで激突しそうな子だ。お互いにドリフ的な挨拶を交わした。

女の子はわたしの手を握り、「行こ」と言って背中を向け、廊下に二、三步駆け出した。

「わわわわ」「わたしはよろめいた。「待つて待つて。カバンカバン」

「二度言わなくてもわかるよ」立ち止まって振り向いた。にっこり笑ってつづける。「マチ子さん」

「どうして知ってるの？」

「あたしはアヤ」

「もしかしてスリーサイズを測った？」

「アヤたんって呼んでちょ」

お互い噛み合わない会話がひととおり済むと、わたしはカバンをロッカーに入れてアヤさんと廊下に出た。当然というか、ほかのみんなはとくに消えていた（たぶん）。わたしたちのほかにはだれもおらず、しんと静まりかえっている。

廊下を進みながら話す。アヤさんはニクネームの示すキャラクターどおり、ぴよんぴよん飛び跳ねるようにわたしの右側を歩いた。

わたしをのぞきこんでたずねてくる。「町田マチ子さんってヘンな名前。フィクションにしてももうちょっと考えてもいいんじゃないのかな」

名前のことは触れてほしくない。わたしは遮るように言った。「中学はどこなの？」

「さあ」

予想外の答えが返ってきた。「じゃあ、名字は？ 教えてよ」

「さあ」

「さあ？」

「なんでもいいよ。あたし、名字は決めてないんだ」

わたしはかぶりを振った。追求してもこっちが混乱するだけだと思っ

「でも、ほかのことならなんでも聞いて。なんでも知ってるからうなずく。「あの名字を当てた男の子、田澤っていうの」

「そう」

「あの子はまったく関連性のないふたつの事柄を結びつける能力を持ってるの。体重と名前ってふつつぜんぜん結びつかないでしょ？ ゆえにあの子にはわかったってわけ」

理解できない。

「田澤は生まれてこのかた女の子と付き合ったことがない」

「そう」「どうでもいいけど。」「どうしてそんなに詳しいの?」

「どうしてって?」

「だって初日なのに、知り合って何年も経ったみたいないかたで」
「

「そう、それがあたしの能力」うん、と力強くうなづく。「あたしは対象をひと目見ただけで、何年も付き合っていたことにできる。簡単に言つと、生まれながらの情報通ね」

たしかにそういう噂ばかり詳しい子はクラスにひとりはいる。だがアヤたんの場合はそんじょそこらの情報通とは次元がちがいきるようだった。

階段に差し掛かり、ふと思い出した。

「そつえば、わたしが誤ってすわってしまった子」

「あの子? あれは」

めずらしく口ごもった。「わからない」

「わからない?」

「体重をぴたりと当てられるってこと以外はね」

そしてアヤたんは階段を下りるあたしの側面にいきなりがばつと抱きついてきた。ふにやりとした胸が二の腕にからみつく。さっきの話じゃないけど、スリーサイズは少なくともわたしよりダイナミックなようだった。

「いっしょにやらない？」

「なにを？」

「解明よ。あたし、不安なの。他人のことがわからない？ 頭がおかしくなっちゃったのかも。だから入学式が終わったあとで、あの子の秘密を探るの。授業そっちのけで。それにはマチ子さんの能力が必要なの」

アヤたんはむーんとうなって情けない顔で眉を下げ、下唇を突き出してわたしを見上げた。

「お願いお願いおねがい」

04話 アヤたん、わからない。(後書き)

学式とホームルーム、たぶん入学式のほうが先なんじゃないかと後で気づき、強引に理由をこじつけました。まさに綱渡り。

05話 校長先生、届かない。

「ずいぶん和風な家に住んでるんだね」とアヤたん。もちろんわたしはなにも言っていない。「おかあさんは茶道の先生？」

「まあ」階段の踊り場から六段ほど下ったあたりでわたしはうなずいた。「まあその」

「すごいおてんば。茶道がイヤになって着物姿で家を飛び出すなんて。だけと思ったほど和服が似合わないんだね。剣道少女っぽい風体のわりには」

「もうちょつと離れてくれる？」

「高校二年で巫女さんのバイトをはじめる？へえ、いいチョイスと思うよ。すごい似合ってる。で、そこにふらりとあらわれたある男の子がマチ子さんを見て」

「いい」一年後の未来なんて聞きたくもない。「もういい」

「じゃああたしに協力して！」

「わかったわかった」

アヤたんにとりくつつかれ、ブラ紐の感触を腕に感じながら講堂に入る。道中だれにも遭遇しなかったのである程度予想はついていただけ、やっぱりわたしたちが最後の入場者だった。しかも並んで腕を組んで。

「校長、式辞」

やけに渋い司会者の声がスピーカーから飛び出してくる。新郎新婦は約六百人の新入生から注目を浴びつつ、小走りで自分の席に向かった。

「アボカドだと思えばいいのよ。そうすれば緊張しないから」アヤたんが言った。

「アボカド？ カボチャじゃなくて？」

「ダメ。おいしいから。アボカドはこう 腐ったら異臭を放つでしょう？ だからアボカドなの」

「なるほど」

わたしは緊張のあまり納得した。「ほんじゃ」と言ってアヤたんがわたしの手を離し、自分のパイプイスに向かった。いちばん後ろの最後の席。たぶん名字がないからだろう。それではわたしもと、すでに着席して校長先生の式辞を待ち侘びるクラスメイトのあいだに体をねじこませ、自分の席に到着した。

空のパイプイスに腰を下ろしかけ、ふと気づいて立ち上がり、イスを眺めまわした。空に見えるだけでだれかがすでにすわっているかもしれない。わたしはそっと座面に指先を触れ、透明人間の頭や肩や胸がありそうなあたりをおそるおそるまさぐった。

「だれかいますか」わたしはこっそりささやいた。「すわりますよ」

後ろの子がヘンな目でわたしを見た。

「はやくすわるように」

渋い司会者にいらいらと注意され、わたしは首をへこへこさせて誤りつつ思い切って空のイスにすわった。よかった。ぽよぽよしていない。冷たくて綿がぺったんこのふつうのパイプイスだ。なんてありがたいんだろう。

「それではあらためまして」 見せ場とばかりに思いっきりタメをつくる。「校長、式辞！」

ひんやりしたパイプの足を握り締めながら、ステージへ顔を向ける。校長先生らしき人が席を立ち、マイクの乗った壇へゆっくりと向かう。

わたしはようやくみんなと同じ立場になれたという安堵でほっとため息をつき、学校でのナントカ式の礼儀に則り顔をうつむかせて放課後どこに出かけようかと考えを巡らした。妙な光景がまぶたに焼きついている。顔を上げ、壇上を二度見する。

校長先生は燕尾服を着ていて、胸をピンと張ってさっそうと歩いている。そしてものすごくちっちゃかった。

壇の向こう側に消えた。

「見えなくなつた」

わたしが思わずつぶやくと、後ろからアヤたんが声をかけてきた。「ちっちゃすぎて隠れたただだよ」

たしかに。この場合はわたしの能力がどうこうではなく、校長先生の身長が一メートル二十センチくらいしかないのが原因のようだった。

「えー」校長先生の肉声。マイクすら声を拾えない。「みなさんおい、きみ、ちょっとマイクを」

黒縁メガネにパンツスーツのちょっとカッコいい女の先生が、いそいそと壇上に向かった。たどり着くと思いつきり下を向いてうなずき、マイクスタンドを調整して先っぽを上に向けた。

「下だ、下に」校長先生の肉声。ジャンプしたらしく、一瞬間の先が見えた。「それじゃ上だろ」

「上、とおっしゃいますと?」

「下にしてほしいんだよ」

「あら、どうしてです?」

すつとぼけた調子で女教師が言う。「どうして下にマイクを?」

「それはぼくが」

「ぼくが?」

「その しんちょうがね」

「はい?」

女性教師は明らかにわざと意地悪をしている。その証拠にさつきから口もとが笑い出したくてひくひくうごめいている。

「しんちょう、とおっしゃいますと?」

「届かないんだよ!」金切り声。「背が低いの! 見ればわかるでしょ!」

「校長先生の能力は」突然アヤたんが言った。「背が極端に低いこと」

わたしは周囲を気にしつつ、さりげなく振り向く。

「そう、ほぼマチ子さんの見立てどおり。身長百二十四センチね。八歳で成長が止まったの」

「それは能力とは言わないんじゃない?」

「能力だよ。身長が低いというコンプレックスを持つことで人生についてより考えを巡らし、深い洞察を得て人間的に成長できる能力」

「なるほど」

壇上に目を向ける。DSの女教師はもはやニヤニヤを隠そうともせず、「ほら、もう少して届くでしょ? がんばんなさい」という感じでスタンドから外したマイクを校長先生の頭上でぶらぶらさせている。校長は怒り狂ってぴよんぴよん飛び跳ねている。「やめろよー」

そんなこんなで入学式は終わった。一瞬のことでもなにも覚えていない。きつとだれかが時を操作したんだろう。決してわたしが式の最中ずつと寝こけていたからではない、のだ。たぶん。

「あー、一年一組の町田マチ子」

そろそろとみんなが退場するなか、いきなりスピーカーからわたしの名前が飛び出してきた。寝ていたわけでは決していないわたしはハッと目を覚まし、顔を上げた。

「あー、至急保健室へ行くように」

保健室？

05話 校長先生、届かない。(後書き)

保健室……なんで保健室なのか。

06話 ため息エクトプラズム

保健室のドアをガラガラと開け、のぞきこんだ。「町田でーす

」

だれもいない。

中に入ってもう一度見まわす。棚の隙間やピンクのカーテンの向こう側やベッドの下などを確認し、ほんとうにだれもいないことを確認すると、わたしはベッドにそろそろと腰を下ろした。

なんでいないんだ　と、わたしはふと気づいた。もしかしてまだ見えてないのかも　。

アヤたんが廊下から半分顔をのぞかせていた。待っているのだろう。

「待ってないよ」わたしの脳みそを読んで答える。「あたしの問題はもう解決した」

「　いつ？」

「いつって、未来に決まってる。いつしよに解決したんだよ。三回くらいすったもんだしてね。生命の危機もあったかな。けどこうして無事乗り切り、長年の疑問が氷解したってわけ」

「覚えがないんだけど」

「まあね。解決に至る道はこれからはじまるから。時間が逆行して

るみたいで」「おっきな目を危なっかしい感じでぎよるぎよる動かす。
「あー、時間が。ぐだぐだしてるよ」

そうか。わたしだっていつまでも「えっ？」とか「どうして？」と驚いてばかりじゃない。ようやく冷静に返答できると少しうれしくなった。「そうか、富田先生が近くに来てるんだね」

「うんにゃ。先生はこれから来るの。なぜかというと、解決したのは時間的にずっと先のことでしょ？　ひと悶着あるのはこれからよ。だから先生はあとから入ってくる予定になってるってわけ。じゃなきゃおかしいでしょ？　時間的に。おわかり？」

わからない。また自信を失った。

それにしても　だれかいるならいるで声をかけるくらいしてほしい。

「あーあ」

急にため息が聞こえた。「そうかそうか。わたしなんかどうでもいいんだ」

発信源は事務机のあたりだった。やっぱりだれかがいた。わたしは立ち上がり、停電のときみたいなしぐさでゆっくりと机のほうへ進んだ。保健の先生も見えない。一日でふたりとは。わたしの能力は年々ひどくなっているような気がする。

「すみません。気づかなくて」

「そうでしょうよ。どうせわたしなんか生きてる価値もないんだか

ら」

「そこまでは言ってますんけど」

「すわって」

どこに？ とは会話の流れ上たずねづらかったので、とりあえず机の前のスツールに腰を下ろした。にっこり愛想笑いもしてみた。保健の先生らしきおばさん（たぶん）は、わたしが腰かける少しのあいだにもため息をつきつづけた。聞いてるだけで気が滅入ってくる。

もうそろそろわたしのキャパも限界に近づきつつあった。お願いだからひとりでいまともな人間と出会いたい。そしてふつうの話がしたい。なんでもいいのだ。「アイス食べたー」とか「がキモー」とか「あいつ強烈な体臭を発してない？」とか、そういう当たり障りがなくて頭で考える必要がなくていちいち驚かずに済むような会話がしたいのだ。

てかてかの革張りイスがぐるりと回転し、こちらへ向かった。

「それで、このヤブ医者になんの用？」ため息をついた。「あなたも仮病で寝に来たんだ？ どうぞどうぞ。ベッドは予約制だけど、いまのところ空いてるから。好きなのを使って。どうせあなたも病気じゃないんだ。健康体なんだ。ちょっと便秘気味くらいで」

「呼ばれてきたんですよ」

「はいはい、どうせわたしは場所取りのごく潰しの役立たずですよ。みんな健康でありがたいことですねー。若いつていいなー。うーら

やーましーい。あーあ」

どうしてここまで悲觀的になりながら生きていけるのだろう。つま先からわき出るようなため息とともに、口があるとおぼしきところから青白いエクトプラズムがにゅるっとあらわれ、気の抜けたヘリウム風船みたいにふらふらと天井へ昇っていった。

ふとエクトプラズムが動きを止めた。「呼ばれたって言った？」

ようやく気づいた。「はいそうです。一年一組の」

「新入生？」

「はい」

「町田さん？」

「そうです」

「マチ子さん？」

「まあ」

保健の先生は「やりい」とつぶやいた。なにがやりいなのか。

「やっと病人があらわれた」

「わたしが？」

「だってなにかが見えないんでしょ？　びょーきびょーき。すごい

びょーき。やーい、びょーにーん」

とてつもなくイヤな気分になり、わたしはなんとなく後ろを振り返った。アヤたんがにんまり唇の端を持ち上げ、なぜかうれしそうに手を振っている。

「そんなの絶対ありえないことでしょ？ キチガイ沙汰よ。狂ってるとしか思えない」

あなたに言われたくないという気がする。というか、この高校に生息するすべての人間になにはなくともそんなことは言われたくないのだった。

「で、あなたとしてはどうなの？」

「なにがです？」

「治したいんじゃないかなーと思ってさー」

期待のこもった声。明らかに自らの手で治したがつているようだった。治すにしても医者を選びたかったけど、ほんとに治るならと思ひ、わたしはほんの少しうなずいてみた。

「じゃ、ブレザー脱いで」

漠然とした抵抗があったが上着ぐらいいかと肩をねじり、緑色のブレザーを脱ぐ。二十世紀が丘高校は制服だけはかわいい。だからよけいにだまされたという気分になる。

白ワイシャツ姿になるとなんとなく不安な気持ちがわき起こって

きた。ブレザーを膝の上に置いてぎゅっと握りしめる。

「じゃ、シャツも脱いで」

「はい？」 mais かもしれない意味なく後ろを振り向く。アヤたんは消えていた。不安二倍増しで先生にサツと向き直る。^{のいるあたり}「はい？」

「だから、その若々しい肉体をまとうまばゆいばかりの白いワイシャツを脱いでって言うてるのよ。まったく、若いくせに耳も遠いの？ ま、治し甲斐がある患者があらわれたってことかな。あー楽しい。人生充実してるって感じ。さあ、脱いで脱いで。脱がなきゃ治せないんだからね。あーあ」

いまやわたしの眉毛は寄せるとか下げるとかそういう段階をとり越し、一回転してこんがらがって目の上にくっついていてるような状況だった。

「治したいんでしょー？ ふつうの女の子に戻りたいんでしょー？」

わたしはボタンに手をかける。

06話 ため息エクトプラズム（後書き）

だんだん混沌としてきました。

07話 わたしかわいい、わたしかわいい

「あー、いいの。さっきの冗談だから」

先生が言った。わたしは「え、え？」という感じで都合四回ほど二度見した。ついではずしたボタンは二度見た回数と同じ四個だった。だからどうというわけでもない。

Tシャツをさらけ出し、切腹の最中でストップがかかったみたい
な格好でわたしは言った。「いいんですか？」

「べつにぜんぶ脱いでもいいけどね。いまのところだれも喜ばない
と思うよ。あなた人気ないし」そして突然話題を変えた。「視力は
？」

わたしはいつこずつボタンかけ直しながら、あることに気づいて
驚いた。とてもまともな質問をされたような気がする。

「目ですか？ 目はいいんです。両方一・二で」

「へえ、大きく出たねー。じゃあこれは何本に見える？」

「見えません」

「悪いじゃないの、目」

「手自体が見えないんですよ」

「失明してるわけじゃないよね？ 座頭市の子孫とか」

「ほかのは見えてます。たとえば」「この状況で見るとしたらこれ以上見るものはないという検査用の視力表を指さした。」「この距離でもばっちり見えますよ。上、下、左、右、下、上、右、左、左、右、下、上、右、左、上」

「それは裏ドルアーガのコマンド?」

「いえ、隙間の位置を」

「なるほど、視力は問題ないってことか」

先生はため息をついた。

「その顔」

「なんですか?」思わず顔に手をやる。

「かわいいじゃないの。前髪パツツンになんかしちゃったりして。ラフなヘアスタイルでがんばってないところを醸し出してるあたりが自信たっぷりに見えたり」

「あの」「へこつと頭を下げる。」「ありがとうございます」

「そうか。自分でもかわいいと思ってるんだ。へーえ」とたんにハメられた感のある空気が漂う。「まあいいや。髪を下ろしてくれる?」

「どうしてです?」

「下ろせって言ってるのよ」

かなり不機嫌な声。わたしは思わず「はい」と言い、頭の後ろに手を伸ばし、ゴム紐をほどいて馬のしっぽを解放した。ふあさつと肩にかかる。

というか、授業は受けなくていいんだろうか。

「どう？」

「なにがです？」

「これで見えた」

自信たっぷりと言う。わたしにはなにも見えてない。

「ほんと？ おかしいな」見えていれば首をひねっていそうな声音で言った。「なんかめんどくさくなってきたな」

「それでもいいですよ。授業があるんで、これで」

「いや、ダメ。ダメよ。ダメったら」そして自分に言い聞かせるようにつぶやく。「返しちゃダメ。捕獲するのよ。ゲットするの。この子は貴重な実験台なんだから」

「実験台？」

「なんでもない。んじゃ、ツインテールにしてみてる？ 往年のIZAMみたいな感じで」

「IZAM？」

わたしは過去SHAZNAというバンドが一風堂のカバー『すみれ September Love』でヒットし人気が出たことやボーカルが吉川ひなのと結婚したが同年九月に離婚したことなどを延々と聞かされた。そして先生はいまも昔も吉川ひなのを憎んでいるのだと付け加えた。かなりファンだったらしい。先生はそれから一時間半ほど切れ目なく当時の思い出を語った。二千六年に吉岡美穂とできちゃった婚をしたという話になったあたりからわたしはどうしても我慢ができなくなり、ついでおなかもちよっぴり空いてきたのでいうことをきいてツインテールとやらにさせていただくことにした。

「こんな感じですか？」両手で髪を握り、ご要望どおりの髪型を披露する。理由などどうでもよかった。

「そうそう。いや、もうちょっと結び目を耳のほうに　そう、そのへん」

そのへんに調整した。

「あーいいね」ため息をつく。「とってもかわいい。ほら」

手鏡が机の上から持ち上がり、ふわふわとわたしのほうへ漂ってきた。自分を見る。こういうヘアスタイルにしたのはじめてだったが、正直ちよっといういかも、と思った。明日以降検討してみよう。

十五秒ほど間を置いたあと、先生が言った。「かわいいと思ってる？」

「いいえ、まったく思いません」

二度目のトラップが飛んできたので、わたしは反射的に答えた。そして猫背で自信なさげで中学校二年のころから原因不明のいじめを六ヶ月間受けた経験のある生徒を装った。実際は、いじめられたことはない。いじめたこともない。わたしはなんの取り柄もないけど、人をいじめておもしろがるようなことだけはしたくないのだ。

先生はもう何度目かわからないため息をつき、イスがくるつと横を向いた。

「よし」

両手を持ち上げてツインテールとやらを維持していると、ふと、白衣を着てイスにふんぞり返る先生の姿が見えた。だがまだ二十パーセントほどで、お風呂に入っているとおとうさんが急に磨りガラスの扉の向こうにあらわれて「タオル忘れてったぞ。ここに置いてくからな」と言い、その数分後に弟があらわれて「タオル忘れてるよ。ここに置いとくから」と言われたときくらいに垣間見えたのと同じくらいの鮮明度だった。

「あなたの目を見えなくしている原因は、自分を知ろうとしないあなた自身にあるの」「うすらぼんやりした先生が言った。」「なんの取り柄もない？ 実際は『客観的に見てもみんなよりかわいくない？ わたし』みたいに思ってるくせに。そんなふうに思ってるんでしょ？ 自惚れ屋で自信過剰な自分を認めようとしなない。出そうとしない。それがあなたの能力を発現させたきっかけなの。あなただけじゃない。みんなそう。あなたたち十代は、自信のない、なんの取り柄もないふりを演じてるのよ、いい子ちゃんぶって。実際は自信あるんでしょ？ だけどそれを表に出すとつまはじきにされるか

ら、必死で押し隠してごく平凡な高校生を装ってる。だからみんなあちこちおかしくなってるのよ。『個性』？ 隠しすぎてどこに個性があるんだかもわからなくなってるでしょ？ 最近の子ってみんなそう。いい？ あなたもみんなも、二年後には大学受験のために本格的な勉強をはじめなきゃならない。大学に行ったら？ 次は就職よ。世間に出てみなさい、個性がどんなものかわかるから。不安なんでしょ？ 自分は将来どうなるのか。なぜ人は生きていくのかって だからほんとうの個性が見えていないあなたたちは やってまーすよろしくねー みたいな妙な得意技を拾ってきては必死で不安を押し隠し、自分を取り戻そうとしてる。もうそこに自分はいるのに。だけどそんな特技、社会に出たらハイおしまいね。それはほんとうのあなたじゃないんだから。そんな特技なんてなんの役にも立たないんだから。ほんとうの自分は押し殺しすぎて見えないくらい。七年後、リクルートスーツを着て就職面接会に出て周りを見まわし、あなたはきっとこう思うはずよ。『なんかみんな同じに見えるなあ』って

ー

二時間あまり語られつづけたが、わたしはまったく聞いていなかった。そして先生の顔は少し秋元康に似ていた。メガネをはずした秋元康に。

07話 わたしかわいい、わたしかわいい（後書き）

焦りすぎたせいかIZAMが出てきました。頭の中はどうなっているのか。筒井康隆ばりに語っていますが中身はゼロです。

08話 お弁当争奪戦、そして

授業も交流もないままお昼休みになってしまった。とりあえず保健の先生からは解放されたが、原因の究明にはもう少し時間がかかるということ、お昼休みが終わったらずぐに来るようにと何度も何度も念を押された。

「名前を教えてくださいませんか？」ブレザーを羽織りながらわたしはたずねた。

「まだダメ。決まってるから。それよりそのスカート、長すぎない？」

「規定とおりですけど」

「またまたいい子ちゃんぶって。若いのが規則に従ってどうするの。そのくせアッチのほうはもう経験済みなんですよ。中学のころからぶいぶい言わせちゃって」

「言わせてないんですけど」

「とにかく」透過度二十パーセントの先生が言った。「もう少し短くして。わたしが寸法直してあげるから。ババアは裁縫できんよ。すごいでしょ。あとそれから髪の毛だけど、ちようどつむじのあたりで結わえるのがいいみたい。ま、一時しのぎだけどね。それでもだいぶ見えなかった者が見えてくるようになるはずよ。スカート脱いで」

そんなわけで、わたしは超ミニの改造スカートに頭頂部で髪房をゆさゆささせるという意味不明としか言いようのない格好で教室に戻った。面倒見がいいというよりも、なんだかごく個人的なライフワークに付き合わされているような気がする。言われたとおりにするほうもどうか思っただけで途中で髪をほどこうとしたけど、下駄箱の前をとおりがかってふと緑色の掲示板に目をやり、あつと驚いた。ちやんとクラス表が貼り出されている。しかもわたしの割り当ては四組だった。

いまさら四組に顔を出すわけにもいかないので、一組に戻った。ロッカーを開けてカバンの中からお弁当を取り出す。ロッカーはちやんと開いて閉まって、しかも中身を食い散らかしてゲップを吐いたりもしなかった。ほんとにいい子。わたしの名前も書いてある。やっぱりわたしのいるべき場所はここなのだ。机はないけど。いまのところ。

教室はガラガラだった。たぶんみんな屋上に行っているんだろう。お昼といえば屋上。わたしはてきとうな席にすわり、黄色い縦長のお弁当箱を開け、水筒から母特製の杜仲茶を一杯カップに注いだ。便秘対策だ。

言い忘れたけど、目の前三十センチのところでイスに後ろすわりしたアヤたんが口をもぐもぐ動かしている。

「先に戻ってごめん。だって授業あるじゃん。ふつう高校では授業を受けるものでしょ？」

「薄情」

「あたしは心配してないよ。このくらいであたしたちの友情は壊れ

たりしないみたいだから。少なくとも二年の夏休みまではね。そのころなにがあるかというところ

わたしはわーわー言っただけ。アヤさんの未来予測をさげすんだ。アヤさんはにんまりと笑い、前回のご飯が残っている状況でおくちをあんまりと開けてさらに唐揚げをいっただけ追加した。半ペースト状のご飯がちりちりとぞくぞく。

「れ、おうあつは」どうだった？　と言った。「あひははんほあどはわはつは」

わたしは制した。「お願い、飲み込んで」なんて言ったのかはなかった。この場合は以心伝心といっていいのだろうか。

そして話題はわたしの能力の謎に及ぶ。わたしは事の顛末を説明する。

アヤさんは感想を言った。「ヘンな髪型」

忘れてた。ゴム紐をはずそうとするとアヤさんは米粒のついた箸の先でわたしの手を制した。

「いいよ。痩せすぎの Troll 人形みたいで。かわいい」

「それってかわいいってどういうの？」

頭を下げて足もとをのぞきこんでくる。「スカート短い。中身見えそう。でもまあ、いいんじゃない。子鹿みたいな細い足が強調されてさ。いつでもおっけーって感じを醸し出してるけど、おっけーしなきゃいい話だもんね。ふーん、そうなんだー」

お股がもぞもぞしてきたのでわたしは内ももをこすり合わせ、脚を組んだ。もちろんいつでもおっけーではないけれど、とりあえずこの子がレズじゃないことを祈る。二年の夏休みに告白されるのもごめんだった。

「で」アヤさんはパツと顔を上げ、ペットボトルのお茶をぐびぐびあおった。「はあ。なんだっけ？」

「知らないよ。そっちから切り出したんでしょ」

「そうそう。で、これから数日、すでに解決したあたしの抱える悩みを調査するわけだけど」

「解決したならいいんじゃないの？」

「答えには問いがなきゃ。なんで答えが出たのかわからなくなるでしょ？ マチ子さんはすったもんだがあっていまトロール人形になっているわけだけど、その応急処置を施したまま午後の授業に臨んでほしいの。いまなら透明なあの子を見ることができる。見えたら話すこともできるでしょ？ そして聞き出してほしいの。どうしてあたしも知り得ない秘密を隠し持っているのかって」

「自分で聞けば？」わたしは卵焼きを半分かじってお弁当箱に戻した。

「イヤ」その卵焼きを横取りしながらアヤたんが言った。「だって恐ろしいんだもん」

「なにが？」

「顔が。というか全体的に。自然界の法則を無視してる感じっていうか。まあ、見ればわかるよ。じゃあお願いね」

そんな高校生がいるんだろうか。いるだろう。とくにこの高校なら。わたしは午後保健室に行かなければならないので午後の授業は出られませんと言って断ろうとしたが、よく考えるとどっちも同じくらいやりたくないことだった。退くも地獄進むも地獄。高校生活ってそんなものなのかもしれない。

「よかった。ありがとう」アヤたんは勝手にお礼を言い、ついでにわたしのサフランライスをこそっと箸で奪い取っていった。「あっち見て。よく目を凝らして」

窓のほうを指さす。わたしは昼食を手で守りつつ、言われたとおり顔を向けた。窓越しにいいお天気とはいえないどんよりした曇り空がのぞいていた。

だれもいないと思っていたが、ひとり席にすわっているのが見えた。幽霊みたいに透きとおっているわけではなくて、ちゃんと見えている。たんに気づかなかっただけだ。男の子が机にかぶりつき、頭をかきながら焦った様子でペンを動かしている。

頭つつん。思い出した。体重からわたしの名前を当てた子だ。名前は忘れたけど。

「今日テストがあつてね、田澤のやつ」

アヤたんに振り返る。「テスト？ 初日なのに？」

「初日の定義にもよるけど」静かにわたしのお弁当を凝視する。「で、二時間目の社会のテストだったんだけど、あいつ答案用紙に英語の答えを書いたの」

「
どうして」

「つまり、社会の問いに対して英語の回答が思い浮かんだのよ。あいつ、そういうヤツだから。それで先生が『ふざけるな』ってめっちゃ怒り出して、まともな答えが書けるまで回答させられてるってわけ。ついでにキュウリの輪切りも一皿置いてった。あいつキュウリが嫌いだから。たんに嫌がらせとしてね」

あらためて田澤を見やる。だいぶズレてはいたが威勢のよかったあのとときの面影はなく、いまでは眉尻を下げて泣きそうな顔をしていた。たぶん、いくら考えても出てこないのだろう。そういう能力を持ち合わせているから。

「給食を食べ残した小学生ね」わたしは感想を漏らした。

「そう。だからキュウリなのよ。比喩的な意味を込めて」

初日からちよつとかawaiiそうだ。わたしはめずらしく、声をかけようかと思った。自分よりかわいそうな子がいることにほっとして余裕が出たからかもしれない。よく見ると横顔がちよつとかawaiiかったりもしたが、それはたぶん思い過ごし。

「ねえ、だいじょうぶ？」

ハッと顔を上げ、振り向いた。実に情けない顔をしながらわたしをまじまじと見て、そして言った。

「十二歳のときまでおとうさんとお風呂に入ってたの?」

08話 お弁当争奪戦、そして（後書き）

なんとなくつかんできたような気がします。あくまで気がするだけかもしれませんが。

09話 おれの得意をやらせろ、もしくはおれのオカズを返せ。

できることなら消し去りたい過去を赤の他人に暴かれた場合、当然の反応として「えっ？　なんで知ってるの？」とか「だれから聞いたの？」とか「はあ？　おとうさんとお風呂になんか入ってないんですけど？」なんて感じてうるたえまくるはずなんだけど、わたしの言ったセリフは「どんなふうに見えたの？」だった。わたしはこの半日で学びつつあった。この高校は当然の反応を許してくれるほど当然ではないのだ。

「ああー」

田澤は相変わらずの鼻水でも垂らしそうなしよっぱい顔をわたしに向け、うなつた。なにをそんなに眉毛を八の字にする必要があるのか。わたしは短すぎるプリーツスカートの裾を押さえ、中身が見えないよう下にひっぱりながら田澤に近づき、腰を折っておそろおそろ顔をのぞきこんだ。実際鼻水を垂らしていた。

「テストに集中できない　きつとこのまま一生家に帰れないんだ、おまえのせいで」

「わたし？」

あまりに忍びない顔だったのでわたしは思わず目をそらし、机の端っこにある小鉢を見た。キュウリとワカメの酢の物だった。酸っぱいカブトムシみたいなおいが漂ってくる。机は消しカスだらけ。そして中央には、問題のテスト用紙が横たわっていた。テストだけに。問題。どうでもいいか。

テスト用紙を見てわたしは少なからずぎよつとした。流暢な筆記体の英語がびつしりと書かれている。意味不明の迫力に圧倒されたが、まったく問題の解答になっていないのはひと目でわかった。病気なんじゃなかるうか。

「ああ、見える　すごい　」　田澤はふと顔を上げて遠くを見やり、うつとりと夢見るような表情になった。「せまい浴槽におとうさんとふたり　」

「見えてるの？　どうして　」

「あつ！　いきなり叫んだ。

「なに？」

「浴槽から上がった。ざばーって。あーすごい。もろ見え。十二歳の　」　　「が　もうダメ」

田澤は危険なほどの勢いで頭をのけぞらせた。「辛抱たまらん鼻血が出そう」という感じの古くさい仕草で鼻をつまみ、「んがー」とうなり、いきなりパツと手を下ろして不審者のようにきよろきよろと周囲を見まわし、そしてズボンのベルトに手をかけてかちゃかちやとゆるめはじめた。

「テストはいいや。おれ大学行く気ないし。作家になるんだ。だから勉強しないでいいんだよね。おれ才能あつから　」

自分に言い聞かせるようにぶつぶつぶつばやきながらチャックを下ろす。十五年のあいだに仕入れた知識のおかげでなにをするつもりなのかなんとなくわかったわたしはとりあえず田澤にかぶりついて

をやめさせビンタの一発でも食らわして人前でそんなこと
してはいけませんと説教しようとしたが、実際は田澤の周辺で触ろ
うか触るまいか手をあわあわ動かしながら「やめて。ね、やめて。
お願い」と耳もとでささやくことしかできなかった。

急に田澤が「はっ」と言って顔を上げ、わたしを見つめた。よか
った、なんだか知らないが目が正気に戻っている。そしてふたたび
情けない表情で「あー」と言った。

「苦しい 見るだけだなんてそんなご無体な」

わたしとしてはその現場にいないので胸を押さえて「きゃー!？」
と叫ぶこともできない。なんとか田澤の幻視を止める手立てはない
ものかとアヤたんに振り返った。

アヤたんはこそーっと手を伸ばし、わたしのお弁当箱に手を伸ば
している最中だった。声をかけるとハッと顔を向けて手をひっこめ、
ごめんちゃいという感じで笑みを向けてきた。

「あたしも食べよっかなーと思ってさ。オカズ」

下品。

そして結局わたしの杜仲茶をカップに注いだ。わざわざわたしが
飲んだ方角にカップまわして口をつけながら言った。

「そう。たしかにこいつには十二歳のマチ子さんの裸体が見えてい
る。あたしの場合には知るだけだけど、こいつは幻視ができるのよ。
いまもジト目で見てるんでしょ。いつも言ってた。『おれ白飯だけ
で三杯はいけるぜ』って。とにかくこいつ、オカズがいらないんだ

つて。たぶん両方の意味だと思っけど、だからキュウリが食べられないのかもね」

チーズハンバーグにでもなった気分だ。「やめさせて。お願い」

「無理だよ。憲法上ね。人の思想は取り締まれないもん」

わたしは勝手にお茶をぐびぐびするアヤたんを眺め、だらりと立ち尽くした。がんがんとという机を殴る音がし、かなりイヤだったが田澤のほうへ振り返った。田澤は鬼のように顔をゆがめ、額を何度も何度も机に叩きつけていた。消しカスが飛び、小鉢が地震のときみたいにカタカタ震えながら横歩きしている。ちゃんとズボンをはいているのがなによりだった。男の子にそれ以上求めるのは酷だ。

「だいじょうぶ？」声をかける。「テストは」

「おれ、どうすればいいんだ」なぜかしくしく泣き出した。「一刻もはやく家に帰ってひとりになりたい。そして」

ピー。

「したい。したいんだよ！なににできないんだ。ぜんぶそうだ。やりたいのにいつも止められる。『ダメダメ』って。『しちゃいけません、あなたには無理よ』って。『どうせできっこないんだから。ありもしない幻を追いかけるのは止めて、だまって勉強なさい』って」

「それは夢や希望の話を言ってるんだよね？」

わたしの問いかけを無視し、田澤は英語だか社会だかわからないテスト用紙を見つめつつ勝手に語り出した。

「おれ、ずっとサッカーが好きだったんだよ。中学じゃサッカー部でさ。自信あったよ。だけど試合になるといつも手を使っちゃうんだ。キックオフと同時に。そしてドリブルをはじめなんだよ。バスケの。それがめっちゃ華麗でさ。バックロールターンにレッグスルーにクロスオーバーに　だれもおれを止められないんだよ。でも当然だよ。サッカーなんだから。で、一ヶ月で退部させられてさ。バスケがうまくできるって気づいたから、すぐバスケ部に転部したんだよ。まわりもおれの噂を聞いて、期待してた。ところが試合になるとおれ、いきなり相手にボールをぶつけはじめたんだよ。しかも百発百中、だれもキャッチできないの。そしてまた退部になった。また部活を探した。おれに合う部活。でもドッジボール部ってなかったんだよ。そりゃそうだよな。くにおくんじゃあるまいし。近いかからハンドボール部に入ったんだけど、今度はおれ、気づいたら試合中にクリケットのバットを持ってセンターサークルに仁王立ちしてたんだ。なにをしようとしたのかわからないけど、恐ろしくなって逃げた。そのときだよ、おれが自分の能力に気づいたのは――」

多少気づく時期が遅すぎるような気もしたが、あまりに弱っているので黙っておいた。

田澤は鼻をすすり、手の甲で目をぬぐった。そしてぼつりと言った。

「おれ、なにをやってもダメなんだ」

妙に心にしみる台詞だった。ちよつともらい泣きしそうになる。

語った内容はアホだけど。

とりあえず惨めな過去に浸ってくれているおかげで、わたしに関する妄想は脳裏から消え去ったようだった。よかった。

「こいつ、役に立つかも」

いきなりアヤたんが言った。「使える能力」

「どこが」わたしはつま先走りで田澤から離れ、机にすわってほととひと息つき、アヤたんの顔をのぞきこんだ。「ただの哀れな子だよ。近づきたくもないし」とささやく。

「いんや、使える。あたしの問いを巡る冒険に加えるべきだよ。パーティーのひとりとして」

「どういう理屈で？」

「あ、部活で思い出した。あたしたちの部活、つくろっか？ あたしの問いを追い求めるのが目的の団体で、名前は」

どこかで聞いたことのある話だったのでやんわりと否定しておいた。

「まいっか。つまり、あいつはなにをやるにもうまくできるってところが魅力的なのよ。全部ズレてるけどね。まったく関連性のない事柄をあいつに与えれば、おそらくこれから何度もおとずれるであろう窮地を脱する際にきつと使えるんじゃないかなと思って」

「そう」

「『バカとナントカは使いよう』っていうでしょ?」

「いちおう聞くけど、その事柄はどうやって見つけるつもり?」

「わかんない。そのときになったら考えよう。一瞬のひらめきに身を任せて」

いつの間にかクラスメイトがぞろぞろとあらわれ、席に着きはじめた。わたしはお弁当をカバンにつっこみ、立ち上がって無駄に広がるスカートを押さえ、自分の席へ戻ろうとして一歩踏み出し、そんなものはもとからなかったことに気づいて引き返し、その場でくるりと一回転したちょうどそのとき、キンコンカンとお昼休み終了のチャイムが鳴った。速攻で先生が入ってくる。わたしは才能なんかなくても構わない。せめて自分の机がほしかった。

09話 おれの得意をやらせろ、もしくはおれのオカズを返せ。(後書き)

シモネタから急転直下、シリアスな話に軌道修正しました(どこが)。これをダイナミックと言っているのか。やっぱりただの行き当たりばったりですね。そして今日、内面的にはじめてのクライシスがおとずれました。迷いというやつです。

「オカズ」というまことに下品なダブルミーニングをなんとかまとめられたのはわれながら奇跡的でした。前回の最後のセリフも条件反射みたいに出てきたものでしたから。こんな感じで今後もドラドラつづけてまいります。

10話 連立非線形なめなめ方程式

自分の机を探してきよろきよろしていると　あ、いた。というか、見えた。例の透明で人の体重を当てられて見た目が全体的に自然界の法則に反しているという女の子。かつてわたしが誤って腰掛けてしまった席に、うすらぼんやりとした人の姿がある。この角度から判断する限りはきちんとした生態系の一員に見えた。ただし格好はものすごくだらしない。横ずわりして脚を机の脇で組み、退屈そうに頬杖をつき、残ったほうの手で毛先をいじくっている。

三秒ほど横顔を眺めていると、突然解像度が向上して彩度も増した。わたしはちよつと驚いた。動画のビットレートにじやなく、そこに映るものに。わーお、超美人。色彩に自信はないけど髪の毛は明るいブラウンで、いかにも愛され系ゆるふわパーマでございという感じで波打ち、ちょうど胸と肩胛骨の上あたりに流れ落ちている。半開きの目は物憂げに窓の外を見やり、長いまつげが物憂げ度をいっそう物憂げに演出している。青白い肌に赤い唇、目の下の泣きぼくろまで見えた。ハーフか外国の方かと思った。もしかしたらほんとはそうなのかもしれない。態度もすわりかたも映画で見るアメリカのティーンエイジャーって感じだし。

と、ここまで観察したところで急激に鮮明度が落ち、ひと昔前の動画サイト並みになった。

女の子はわたしの熱視線に気づく素振りも見せない。窓際の席のアヤたんが半ば腰を浮かせながら女の子のほうを何度も指さし、「行け、行け」という感じで口を動かした。もちろんわたしはやるべきことをやるつもりだった。見えたのなら、面と向かって話しかけることもできる。この子がどんな謎を隠し持っているのか、なぜア

ヤたんも知り得ない秘密を握っているのか　それらを聞き出さなければならぬ。それがわたしに課せられた使命なのだから。

ウソだけど。

「おい、なんじゃおまえ。はやく席にすわれ」

教壇の先生が顎をしゃくるような仕草でわたしに言った（たぶん）。チンピラみたいな巻き舌だった。おそろおそろ目を向ける。灰色がかつたくしゃくしゃの髪に、顎にはゴマみたいなヒゲが浮き上がっている。ガリガリに痩せているが、なにか切っ先の鈍い刃物のような危なっかしさを醸し出していた。

こつん、と頭になにかが当たった。足下を見る。ちぎつてまるめたノートの切れ端が落ちていた。わたしはスカートを押さえて膝を折り、急いで紙を拾った。

「そう、行川先生は元ヤンキーの元プロボクサーなの。担当科目は数学で、三年二組の担任でもある」なぜかアヤたんの声が直接脳に響いてきた。「生徒には『なめなめ』ってあだ名で呼ばれてる。たぶんエロいからじゃないかな。いろいろ問題発言も多いみたいだし」

アヤたんがにこにこして手を振っている。「あなたがこれを？」と目でたずねると、アヤたんは手のひらを唇に当て、ちゅつと投げキッスを送ってきた。なんて便利な子　なのはいいんだけど、とにかくはやく彼氏をこしらえてわたしをいろんな意味で安心させてほしいと思った。

エロくてなめなめと陰で呼ばれている行川先生は、タカのような目でわたしをにらみつつけている。と、鼻でせせら笑い、それから

教室中を見まわし教卓をバンと叩いた。

「よし、じゃあ今日は連立偏微分非線形方程式をやるぞ。宿題出せ」

カツアゲみたいな仕草でくいくいと手を動かす。「後ろからよこせ。はやくせえ」

みんなは中学生に襲われた小学生のように慌てふためき、宿題のプリントを後ろから前へ送りはじめた。なぜみんな疑いもなく連立ナント力微分ナント力方程式の宿題に取りかかったのかはこの際気にしないことにした。

なのにわたしはまだ基本のキの段階だ。焦りすぎてお漏らししそうな感じで足踏みし、机を探して教室を見まわす。やっぱり席はないうだった。もう一週間くらい机を探しているような気分になり、そろそろ腹をくるる段階に来ているのかもしれないと思った。これがわたしなのだ、という。みんな机にすわっているからって自分もすわる必要があるのか。いや、ない。なぜかって、わたしはわたしなのだから。世間に迎合することはない。浜崎あゆみも歌ってたじゃないか、「あなたらしく」とかなんとか。

いい感じで悟りながら立ち尽くしていると、ふたたび行川先生と目があった。

「なんなんだおまえ、さっきから」

「あの」「思わずへこつと頭を下げる。」「ちよつと机が」「

「机がちよつとどうなるってんだ、あ?」ほんとうにチンピラだっ

た。「はよすわれ。なくてもすわれ。その前に宿題寄せ」

「えーと やってないんですけど」

「なんだ。微分幾何学は苦手か。おまえ、中学ちゃんと出てきたのか」

と、行川先生はあらためてわたしを頭のとっぺんからつま先までじろじろとねめつけはじめた。

「きゅーとな顔と髪型だから許されると思ってんのか？ あ？ ほかにかに和の香りを漂わせやがって。ひとりなでしこジャパンか。なんだそのスカート。もう少しでパンツ見えんぞ。放課後見てやる。だから今度一発やらせろ」

言うだけ言っただけ先生は宿題を集め、なにをやるかと思っただけポケットからライターを取り出し、火をつけてまると燃やした。めらめらする炎でいつの間にかくわえていたタバコに火をつける。

無造作に火のついたプリントをゴミ箱に放る。ぷあーとタバコの煙を吐き出して言った。

「じゃあ好きにしろ。そこに立ってろ。授業進めるからな。おまえを目で犯しながら」

ゴミ箱が燃えている。めらつと炎が立ち上った。

「今日はリーマンとアインシュタインについて」

チョークをブチ折りそうな勢いで黒板にふたりの似顔絵を描いた。

「いいか。アインシュタインは頭がでかい。ベルンハルト・リーマンはハゲ親父。ここテストに出るぞ。似顔絵付きだからな。できなかったら殺すぞ」

カーテンに火が燃え移っている。

「もう一度言うぞ。『リーマンはコ汚いヒゲのハゲ親父』」

炎が窓際の壁をなめなめし、天井を焼き焦がしている。黒煙が漂ってきた。

10話 連立非線形なめなめ方程式（後書き）

この先生にはモデルがいます。それはともかく、女性の皆様申し訳ありません。これから純愛路線になりますんで（ウソ）。

11話 なめなめ先生の想い

カーテンはほぼ黒こげの状態になっている。全員そのことに気づいているようだったが、避難しようとする子はだれもいなかった。理由はなんとなくわかる。かなり悪意のこもった感のあるアインシユタインの似顔絵を手のひらでしばし叩いているあの行川先生のせいだ。いくら先生が恐ろしくつたって焼け死にそうな状況だったらせめてよそ見したり席を立て奪取したりしてもよさそうなのに。いや、全員ではなかった。アヤたんは気づいていた。といつても恐れている様子は微塵もなく、お友達の家にお呼ばれたらチョコレートケーキが出ましたーみたいな笑顔を満面に浮かべている。楽しいんだろう。

前後のドアが「ガラガラッ」と音を立て、ぴしやりと閉まった。ロックがかかる。これについては、わたしはべつだん驚きもしなかった。あのドアのことだ。いつか必ず裏切ると思っていた。だいたいはじめて会ったときから様子がおかしかった。わたしははじめからあいつを信用していなかった。

それはともかくとして、ロックのかちやりという音がした瞬間、例のアメリカちっくなうすらぼんやりした女の子がハッと顔を上げ、立ち上がった。どうでもいいけどすごい長身。そしてカッコよかった。

ゆるふわ髪をふわっとさせ、鋭くこちらへ振り向いた。

「わたしは玲乃」

唐突に自己紹介する。

「ハーフでもなんでもなく、ただの熊本出身の日本人よ」

「そう」

「じつは経歴詐称してるんだけど」

「あっそう」

「この名前も偽名ね」

偽名だろうが経歴詐称だろうがこの際どうでもいいような気がする。なめなめ先生は「エウクレイデスはただのキャラだからな。実在しねえんだ。おまえらいつまでも二次元に熱中してんじゃねえぞ」とか言いながら黒板のお絵かきをやめて振り向き、生徒ひとりひとりを刺し殺すような勢いでにらみつけた。横顔が炎で赤く照らされていたが、こっちのほうはとくに気にしていないようだった。

カーテンにいちばん近い子が、まさにいま炎に巻き込まれようとしている。歯を食いしばり、なにごとかをつぶやきながらじっと耐えている。まるでティック・クアン・ドックだ。

「あなたの助けがいるの」玲乃が言った。「あなたに見えていないものはなに？」

「はい？」思わず聞き返す。玲乃様はいらいらと繰り返した。

「だから、見えていないものよ。この状況で見えていないものと言えば？」

「その前に火を消さないと」

「そうね。で、消すにはなにが必要？」

「消火器とか」

とつぶやいた瞬間、アヤたんが机の上によじ登って指さし、叫んだ。「あれ！」

あれ、の先にはなにもなかった。玲乃お嬢様はスカートを翻らせ、女騎士のように颯爽と書け出した。黒板のとなり、ちょうど時間割が貼ってある壁のあたりを手でまさぐり、なにかをつかんだ。重そうに抱きかかえ、先生の背後を駆け抜け炎に近づく。

なにをやってるんだろう。わたしには上手なパントマイムにしか見えなかった。

玲乃は人差し指で鉤をつくり、ピンをひっこ抜く真似をした。そしてなにかをつかんではずす動作をし、はずしたほうの手を消火器のノズルのように火もとへ向けた。

というか、まんま消火器と同じ動作だった。架空の消火器で火を消そうとしている。

レバーを握るふりをする、ノズルを握っているふりをしているほうの手もことからものすごい勢いで白煙が立ち上ったふりをした。いや、煙のほうはふりじゃない。消化剤がぶしゅーっと吹き出してゴミ箱に直撃し、白い粉が炎にうつすらとまとわりついた。ベトナムの僧侶がもろに消化剤を食らい、さすがに耐えきれずげぼげぼ

せた。

火が消えた。カーテンは裾が黒ずんでほぼボロ切れと化していた。天井も煤だらけ。

玲乃様は教壇に消火器をごとりと置く真似をし、涼しい顔でぱんぱんと手を払った。先生の後ろをとおって席に戻り、なにこともなかったかのように脚を組んだ。行川先生はすでに授業を中断していて、地元の指定暴力団も裸足で逃げ出すような鋭い視線で玲乃の背中を追いつ、なにか言いたげに顎を上げた。

玲乃様はまったく動じるそぶりを見せない。ちらっとわたしを見、薄く笑った。

「なぜ火を消したんじゃ」

「火事だったから」

毅然とした調子で答える。内容はごく当たり前なのになにかすごい勇気めいたものを感じた。

「だれのおかげじゃ」

わたしを指さす。「町田マチ子さん、十五歳。体重三十八・二キロ。友達にお昼ご飯をたかられたせいでまた少し体重が落ちたみたい」

全員がわたしを向いた。先生も見る。

「またおまえか」顎をしゃくる。「なぜ消火器のありかがわかった」

「わかってません。わたしはただ」

「この状況で、見えていないものを探したわけか」

「あの　「明らかに狂っているのは先生のほうなのでたまには毅然としてみようと思い、できる限り力強く答えた。」「そうです」

「そうか」人殺しの目がふつと和らいだ。「ようやくヒントをつかんだようだな」

別人のように穏やかな声。表情にはうつすらと笑みさえ浮かんでいる。

「どうしておれが火をつけたかわかるか？」弟子に言い聞かせる師匠のように神妙にうなずく。「おれは、あえてつけたんだ。おまえに大事なことを知ってほしかった。大事なことはなにか。それはユークリッド幾何学でもテンソル解析でもない。織田信長が何年に死のうが知ったこっちゃない。ほんとうに価値あるものは、頭の中にあるんじゃない。ここにあるんだ」

握り拳で自分の胸を叩いた。

「つまり、おのれ自身の心だ。勉強はだれにでも教えられる、だがここんところは　おのれが何者であるか、いかに生きるべきかということは、口じゃ教えられない。教わるもんじゃないんだ。自分で経験し、気づくもの。だからおれは、まちがっていると知りながら火をつけた。生徒のため　おまえのためだ。わかるか？　おまえはなぜなにかが見えないのかわかっていなかった。なにが見えないのかもわかっていなかった。おれはそれを知っているが、自分で

気づいてほしかった。だからヒントをやった。火をつけたんだ。涙をのみながら。そしておまえは知った」

教室じゅうが静まりかえっている。

「なあ。教師つてのは、勉強を教えるだけじゃなくて、生徒に自尊心をもって生きていくためのヒントを与える存在であるべきなんじゃないかな。そうだろ？　それが真の教育だ。真の教師の務めだ。おれはまちがったことをしたかもしれん。だが教育者として、おれは自分のしたことに満足している」

三十分後、行川先生は警察に連行されていった。

11話 なめなめ先生の想い（後書き）

ようやく次の展開に進めそうです。

12話 助けて！ マチ子さん

ようやく初日の授業が終わり、わたしは家に帰った。部屋に戻るなり呪われた制服を脱ぎ捨て、スウェットとパーカーに着替えた。ヘンテコな髪も速攻でほどいた。

携帯電話がカバンの中で震えた。反射的に手をつつこんで携帯電話を取り出す。

帰り際わたしは、せっかくお知り合いになれたということでアヤさんと玲乃様に電話番号&メアドその他もろを交換しようとして持ちかけた。が、どっちにも断られた。アヤさんは「もう知っているからいい」と言い、玲乃様はひとこと「イヤ」と言った。ふつうならちよつとヘコむところだけど、わたしは気にしないことにした。二十二世紀が丘高校で生き延びるには、気にしないことがなによりも重要なのだ。わたしは初日からすでに悟っていた。

生き延びたくないけど。

携帯電話の画面を見る。メールの着信が千八十四件に増えていた。こつちも気にしないことにしよう。どうせ開いた瞬間に口クでもないことがばよーんと飛び出してくるに決まっている。もうたくさんだ。わたしはカバンに放り込んだ。

ところで、家はふつうだった。今日は当たり前の日常に感謝してばかりだ。そのうちお母さん産んでくれてありがとうなどと感謝の気持ちをリリックに込めさわやかなピアノの調べに乗ってラップをかますようになるかもしれない。それでも目標がはっきりしてるだけいまの自分よりはマシかもしれないけど。

母もふつうだった。父もふつうに仕事から帰ってきたし、弟はふつうにバカなままだった。

夕方、キッチンのテーブルで家族四人、ふつうの夕飯を囲む。母（悠子）が話を切り出した。

「高校初日はどうでした？」

ゆっくりと目を動かし、わたしを見る。そして数秒見たあと、自分の茶碗に視線を戻した。目の動かしかたにまで作法があるみたいな感じた。母はとにかく一片の隙もない。ほっそりとした首を伸ばして姿勢よくイスに腰掛け、海原雄三も青ざめる箸使いでご飯を口に運ぶ。茶道の先生だからかもわからないけど、プライベートの時間にまで道を極めようとするのはやめてほしい。緊張するのだ。わたしも母の指導でかなり姿勢がいい。よく褒められるし悪いことではないと思うけど、代わりにになにか大事なものを失ってきたような気がしてならないのだった。

学校どう？ と聞かれればあれこれ考えるものだけど、わたしの場合これしかないという感じだった。

「完全に狂ってる」

母はさっきとまったく同じ動作でわたしを見た。言葉遣いをたしなめるように目を細め、それから「わたしの予想どおりでしょう」といった感じでわずかに眉を上げた。

「わたしの茶道教室でお客様にたずねれば、みなさん一様にこう答えたものです。『あそこだけは受けさせちゃダメよ。頭のおかしな

教師ばかりだから。子供に人生踏み外してほしくないでしょ？」と

「

「そう。まさにそれ」

わたしは唐揚げをもぐもぐしながら、思わず箸の先で母を指した。母は「あなたにはいつも失望させられます」といった感じのまなざしでわたしを見つめた。

ゆっくり箸を下ろす。

「あの高校の評判は前々から知っていました」

「だったらそもそも受けさせなきゃよかったじゃない」

「まさかあなたが私立に落ちるなんて」おひたしを口に運ぶ。よく噛んでしっかり飲み込んだあと、つづきを口にした。「想像すらしていませんでした。成績優秀、品行方正なあなたが」

品行方正が聞いてあきれ。ところでわたしが私立を落ちた理由は、簡単だった。試験会場となる高校の校舎がまるごと見えなかったのだ。同じ受験生のあとをついていくと、みな同じように正門をくぐり、広大な更地（わたしにはそう見えた）を横切り、ある時点でふっといなくなった。異次元に転送されるレミングスの行列みたいでかなり不気味だった。そのうちだれもいなくなり、わたしはぽつんと校庭（らしき場所）に立ち尽くしていた。あ那时的無常感にはつきりと心に刻まれている。

「なあ、姉」正面の弟が言った。

「なんだ、弟」

弟は町田マチ之進といって、おもに名前方面でわたしと同じ不幸な生い立ちを背負っている。いつこ下の中学三年生で、来年受験を控えている。いろいろ大変なのはわかるけど、その痛々しいビジュアル系のヘアスタイルだけはいかげんやめたほうがいい。

「二十二世紀が丘って合格点どんくらい？」

カラオケ帰りのガラガラ声で言う。

「三百点満点で二百二十点」

「それなりじゃん。それなりってところが逆に不気味だよな」家族を見まわす。「おれ、ぜったいそこには入らんよ。ランク落としてもほかんとこにする。進路指導にも言われたもん。『死んでも行くな』どうしても受験したいなら、まずおれを殺してからにしろ」って「

「言わずもがな」

母が箸の先一・五センチほど使って味噌汁を含んだ。父に言う。
「でしょう、あなた」

父は酒で完全に目がすわっていた。

「まあ、あれだ」ろれつがまわっていない。「済んだことはしょうがない、ってな。マチ子はあきらめよう。で、前を見据える」

という本人はまったく見据えられずにいた。霊体を探して食卓をさまよう。

「人生、失敗はつきもんだからな。はやめに失敗してよかったんじゃないの。逆に言う。長い目で見たとき。むしろ失敗すべきなんだ。失敗すれば、人間性が　　こう　　」

顔をぎゅつとしかめ、酒浸かりの脳で必死に考えている。と、あきらめたように眉間のしわを解いてわたしに顔を向けた。

「　　どうだ、学校楽しいか？」

わたしは無視し、箸をがじがじ噛んだ。楽しいかどうかは「言わずもがな」だ。ではみぞおちがどよんとするような不安を抱えているのかというと、そうでもなかった。わたしが感じているのは漠然とした不安などではなかった。はつきりと具体的に目の前につきつけられた、いまそこにある危機だった。

やるべきことも明確だ。

「ねえ、編入って難しいのかな」

「高校一年の初日でいきなりか」

父が答える。母は答える価値もないといった感じた。

「調べてみないとな。いんたーねつとかでな」いんたーねつとがツボに入っただのか、へっへつと笑い出した。「　　頭がおかしい高校だから、おまえは脱出したいんだろ？　でもあれだ、四月にいきなりほかに編入するってのも、だいぶ頭がおかしな行動だと思うぞ。どうだ？」

たしかに。酔っ払いにしては冴えている。

「どっちにしても頭がおかしいんだ、おまえは。っていつか」

父はスイッチが切れたようにがくと仰向けた。寝た。

手から焼酎の入ったグラスがこぼれ落ちる。母は顔も向けずにサツと手を伸ばし、グラスの中身を一滴もこぼさずに空中キャッチした。さすが夫婦。

「受験めんどくせー」弟が言った。「あー死にてー」

こいつはいつもツイッター並みに本音をつぶやく。勝手に死ねといつも思うけど、母はどうしてわたしにだけ厳しく、こいつはいつこうに馴けようとしなのか。夫にも寛容だし。疑問だった。

そんなこんなで夕飯が終わり、わたしは足をひきずりながら階段を上がり、自室へ戻った。ベッドにダイビングし、うつ伏せの状態で枕を抱えた。溜に溜めたため息をぷあーっと枕カバー越しに注入する。

本日学校で起きた様々なできごとが脳裏によみがえった。フラッシュバックと言ったほうが適切かもしれない。わたしはうめいた。意識を失っていたはずの入学式の様子まで鮮明によみがえってきた。とても背の低い校長先生の式辞が

「みなさん、まずは入学おめでとうございます。えー、新しい環境で高校生活を送るにあたり、みなさんは大きな希望と期待に胸躍らせ、いまわたしの退屈な式辞に耳を傾けていることと思います」

カバンの中の携帯電話がういんういん震えている。部屋に入ったときからずっとだ。わたしは枕を顔にぐりぐり押しつける。

「新たな経験、新たな出会い、勉学に部活動、文化祭 高校三年間は、重要です。将来社会人として羽ばたくにあたり、高校生活を精一杯過ごし、充実したものにしたい。もちろん不安もことあるでしょう」

まだ震えつつづけている。だんだん神経に障ってきた。

「あー、もう」

わたしはひとりごとを言ってベッドを這い進み、前足から絨毯に下り、四つ足のままカバンに向かった。単なる思いつきで口を使って蓋を開け、ペロを差し込んで携帯電話のストラップをひっかけ、外に出した。ちょっと頭のおかしいことをしなければバランスが取れないような気がしたからだ。

校長先生はまだ式辞をつづけている。

「二十二世紀が丘の特色、それは多くの変人を育成するカリキュラムにあります」

携帯電話を見る。着信は五千七百四十九件に増えていた。だれなんだ。わたしになんの用があるというのか。そして五千件以上のメールを保存できるわが携帯電話の性能にも少し驚いた。

「みなさん、歴史を振り返ってみてください。どの分野においても、偉業を成した人物はみな変人ではありませんか。変人は世界を大きく変える。なぜか。それは頭がおかしいからです。偉大な発想は凡

人からは生まれません。いまの日本がもつとも必要としているもの、それは変人なのです。変人が必要なのです！ 突拍子もない行動、頭が狂ったとしかいいようのないアイデア 二十二世紀が丘はあなたたちを立派な変人へ成長させます！ 若きヘンテコから完全無欠な変人に！ あなたがたは社会に出たあと、だれにも理解されない変人として世間に後ろ指をさされながら数多くの偉業を成し、後世に名を残すことになるでしょう！ みんな有名になりたい！ 愛されたい！ 尊敬されたい！ だったらここで学べ！ そして羽ばたけ！ 変人として人生をまっとうしてください！ 入学おめでとう！」

後半プロパガンダ臭を漂わせつつ、校長先生の式辞が終わった。わたしは携帯電話のメーラーを開いた。一覧が表示される。

「助けて！」

どの件名にもそう書かれていた。

12話 助けて！ マチ子さん（後書き）

ようやく学校の目的が判明しました。「学校側と生徒側の対立」という構図が生まれ、ストーリーが流れ出しそうな感じです。なんとなく。

14話 いいかげん助ける！ マチ子さん

翌日の放課後、わたしはナベさんを誘ってショッピングに繰り出した。お買い物せずにはいられなかったからだ。学校は次の日も普段どおりだった。つまり、いろいろと乱れ飛んだ。それ以上は思い出したくもない。今後正気を保っていくには、少なくともいまの四倍はお小遣いが必要になりそうだった。

ナベさんは本名を渡辺美加という。とってもふつうだが、中身はふつうじゃなかった。といってもわたしや高校のみんなみたいにヘンテコな能力があるわけじゃない。中学時代の友達は、ナベさんにしつくりきそうな呼び名をあれこれ提案しては実践したが、結局どれも定着しなかった。ミカ、ミカリん、ミカミカ、メガネ だけどナベさんはナベさんのままだった。「はあ？ なにそれ」で、ぜんぶ却下。ほんとうにいい性格をしている。愛想はないしぶっきらぼうだし、メガネの奥にきらりと光るまなざしはいつもだるそうだったが、なぜかいつしよにしていると安心する。中学二年で知り合ってからこれまで「わたしたちって似てない？」と五十四回くらいずねかけたんだけど、実際に聞いたらやっぱり「はあ？」と言うはずだ。

わたしたちはお買い物有一段落させ、カフェのオープンテラスで休んでいた。といっても、一段落させたのはおもにわたし。ナベさんが買ったのはチャールズ・ディケンズの短編集だけだった。

「ケータイ、鳴ってるよ」

ほとんど口を動かさずに言い、ナベさんはわたしのバッグを指した。

「いいのいいの。気にしないで」

「チェックしないの？ 新しい友達からかもよ」

そうじゃない。しないほうがいいのだ。

「ただの迷惑メール」わたしは軌道修正したくてどうでもいい質問をした。「で、どう、高校？」

ナベさんは頭がいい。県でいちばんの進学校にも余裕で合格できるはずだったんだけど、なぜかナベさんは二番目をえらんだ。理由は知らないけど、とてもこの人らしい。

「んー？ まあまあ」

相変わらず冴えない返事。こそつとコーヒーのストローを加え、音を立てずにひとくち含んだ。「あんたは？」

「最悪。　　って、会ってから三百二十回くらい繰り返してるんだけど」

「メールあつたよ。オネエから」

どこからともなく携帯電話を取りだし、器用に片手で開いた。わたしに画面を向け、メガネの奥をきらりとさせた。

「マチ子が無視しつづけるのー、ってさ。新しい友達ができたらとたんに知らん顔かよ、って書いてる」

「はあ？」

携帯電話を奪い取り、メールを読む。たしかにそう書いてあった。

ちなみにオネエは、唯一わたしと同じ中学から二十一世紀が丘高校へ入学した子だ。大親友というほど付き合いはなかったけど、まあ小親友くらいだ。でも親友には変わらない。

「無視って 一度も会ってないんだけど」

「知らんよ、あたしに言われても」

たしかに中三のときとちがって、クラスがちがうと遭遇する確率も減る。だけど無視した覚えなんてない。この二日間、一度も見かけていないのだ。

もしかして。

ういーん、ういーん。

「あーもう、イライラする」ナベさんがわたしのバッグに手を伸ばした。「ピンクローターでも仕込んでんの？ よこして。あたしが見る」

わたしは背中側にバッグを隠した。チャイをずっとすすって時間を稼ぎ、なんすかそれという顔をナベさんに向けた。「ローターって？」

「は。ふつうはローターって訳さないんだけど そうだね。知らないんだからしょうがないっか。そうかそうか」

それはともかく。わたしはさらに話題を軌道修正し、結局高校の話をすることになった。

「それはいいね」

話し終わると、ナベさんが感想を漏らした。話をしたせいで、わたしの脳裏には一連の凶行が鮮やかによみがえっていた。

「いい？　なにが？」わたしが言った。

「楽しそうじゃん。いかにも新天地って感じで」

「どーこーがー？」わたしはぐつと首をもたげ、つばを飛ばしそうな勢いで反論した。話が盛り上がったたり興奮したりするいつも出る癖だ。「あれは高校生活とは言わないよ。アトラクションだよ。TBSでやってるやつみたい。担任の先生は時間をぐだぐだにするわ、ドアはしゃべるわ、女の子にいきなり体重を当てられるわ、保健の先生にスカートの寸法直しをさせられるわで」

「はーあ？」ナベさんはテレビドラマで見る会社の重役のようにイスにふんぞり返った。「なんだね、それは。白昼夢かいね」

思わず口ごもる。ところでナベさんはわたしのヘンテコ能力に気づいているのかという問題があるんだけど、結論から言うと、わからなかった。鋭いナベさんのことだから気づいているのかもしれないし、ただの変った子だとは思っていないかもしれない。気づいていようとあえて言わないというのもまた、ナベ流だといえる。わたしもあえて相談しようとは思わなかった。これまでは。

「まー、こっちも多いよ、ヘンなやつ。どこにでもいるよね。」

さっきあんたが言ったことは、真に受けてないよ。あんた大げなところがあるから。あたしはあんたが慣れない環境を拡大解釈し伝えてるんだって解釈してるわけなんだけど」

ういーん、ういーん。

「よこせ」サツと立ち上がる。今度はバッグをひったくられた。「んー、なににな」

わたしはカップに口をつけつつ、上目遣いでナベさんの反応をうかがった。

「助けて、助けて、助けて、助けて、掛ける七千六百九十一件」

親指でくるくるスクロールしながらつぶやく。そして顔を上げ、わたしを見た。

「助けないの？」

14話 いいかげん助ける！ マチ子さん（後書き）

13話は縁起が悪いので飛ばしました。で、今日はとてもふつつ。ふつつの人も出さないとゲップが出るよなあ、変人ばかりじゃと気づいたので。

15話 そこまでロッカーが言っならば

昨日いちばんのグッドアイデアは、携帯電話のバイブ機能をオフにすることだった。これでもう微振動に悩まされずに済む。今日登校して朝までに起こったことは、並木通り前のローソンが突如復活していたことと、一年一組の教室の位置が若干変わっていたことくらいだった。

あと、ロッカーに話しかけられた。

お買い物のとナベさんに言われたこと。

「オネエが見つからないんじゃないやなくて、気づいてないだけなんだよ。あんた、いつもぼんやりしてるから。見逃してんの。聞き逃してんの。いろいろとね」

というわけで、わたしは校舎に入るなりイヤホンをはずして周囲の音に耳を傾け、なるべく目を大きく開き、対象をひとつひとつ確かめるようにものを見ながら教室へ向かった。あまりにもわたしの目が皿すぎたのか、何人かにぎょつとして振り向かれた。それでもオネエと国交断絶してしまうよりはマシだ。それにこれで、見えないなにかが見えるようになれば。

いいない。それともいらないように見えるだけなのか。わたしは二歩ごとに後ろを振り返りながら教室に入ろうとして、意地悪なドアに側頭部をぶん殴られた。

頭を振る。というか、単によそ見してただけかもしれない。

というわけでロッカーを開けてカバンを入れると、ロッカーに話しかけられた。

「助けてあげてください」

閉じようすると反対側にぐつと力がこもった。ゆっくりと手を離す。ロッカーはかすかに扉をぱくぱくさせ、陰気な声でつぶけた。

「現実から逃げないで。メールを見てください」

ロッカーは口を閉じ、ガシャガシャ音を立てて縦横斜めにゆがんだ。梅干しの種を出そうとしているみたいだ。

ペツと吐き出した。慌ててキャッチする。

携帯電話だ。バッテリー部分が異常に熱くなっている。三日かそこら休みなく働かされ、もう過労死寸前といった感じだった。

「あなたの力が必要なのです。それにあなたは、ばくに借りがある」

「借り？」

思わずロッカーに答える。まわりを見まわしたが、学校の備品と会話するわたしにヘンな顔を向ける子はいなかった。当然か わたしは思い直した。みんなのほうがよっぽどヘンだから。わたしなんかかわいいもの。

「借りってなにが？」わたしはふたたびたずねた。

「荷物を預かってあげています」

「当然でしょ、ロッカーなんだから」

「ぼくをロッカーだと思っていらっしやるんですか？」

「もちろん」

くつついた両隣のロッカーを巻き込んでガシャガシャとかぶりを振った。

「あなたには失望しました」

わたしのカバンを勢いよく吐き出した。胸にどすんと当たる。

「いいですか、当たり前を当たり前と思ってはいけません。ぼくらロッカーがどれほど重要な役割を担っているかを思い出してみてください」

「カバンなら机の横にひっかけるからべつに」

「ぼくらは荷物を預かる。保管する　あなた以外のだれにも触れさせないように、そして荷物はたいてい、本人自身よりも重要な場合が多いのです。とくに高校生の場合は」

中身がカラッポだと言いたいのだろうか。

「そうです。あなたはとくにそう。だからぼくが選ばれた。ぼくはマサチューセッツロッカー大学（MLT）を首席で卒業している。建築学の博士号とハーバード・ロースクール卒業後は弁護士資格を取得し」

「はよー」

正反対の底抜け樂觀声に話しかけられた。アヤたんがするすると背中をとり抜け、ついでにわたしのお尻にぴとつと手を触れていった。「席すわんなよ。今日は玲乃お嬢様はいらっさらないから」

「どうして？」

「転校してくるの」

「はあ？」

ロッカーが「失礼ですがよろしいでしょうか」という感じでわたしの肩に触れた。わたしは振り向いた。

「あなたに質問してよろしいでしょうか？」

開始のチャイムが鳴った。

「もう授業はじまるんだけど」 時計を指さす。

「ひとつのロッカーは真実のみを答える」ロッカーは完全に無視してつづけた。「ひとつのロッカーは虚偽のみを答える。問いは一度だけです。答えるのはひとつのロッカーだけです。答えはイエスカノーのみ。さあ、問いかけなさい。いずれが正しきロッカーなのかを」

隣のロッカーが軽くうなずいた。なんのこっちゃ。

「答えはこうです」わたしが考えようとしないうちにロッカーが言った。「いずれかのロッカーを指さし、『こちらが正しいロッカーかとたずねたとき、おまえはイエスと答えるか?』と問うのです。真実のみを答えるロッカーならば、正しければイエス、まちがっていればノーと答えるでしょう。嘘つきロッカーならば「隣のがニヤリとした。「正しければウソを言うのだからノーと言うはずだがイエスと答えるかとたずねられているので答えはやはりノーとなる」

ロッカーは言葉を切った。しゃべりすぎたのか若干息切れしている。

「正しいロッカーってなに?」わたしはとりあえずたずねた。

「ぼくの賢さを知ってほしかったです。それだけ」パカッと扉を開ける。わたしはそろそろとカバンを入れた。ボタン。ガシャツ。鍵がかかった。「賢いぼくはもう一度忠告する。携帯電話を見なさい。そして助けてあげてください」

それっきりだんまりになった。わたしはインフルエンザ並みに熱を持つ携帯電話を眺めながら、玲乃様の席に着いた。転校してくる? よくわからないが考えないに超したことはない。

いちばん新しいメールを開く。件名はやはり「助けて!」だった。先生が来ていないことを確認し、本文を読んだ。

「わたしの名前は佐藤洋。といっても、宮城県出身の元プロ野球選手とはなんの関係もありません」

スクロール。

「わたしは二十二世紀が丘高校二〇〇八年度の卒業生です。そしてわたしは『飲酒運転をなかつたことにできる』能力を持っています。専門的な話になるので割愛しますが、ようは検問でひっかかりたらアルコール検査を拒否し、『ああわかつたよ、飲んだよ、飲みましたよ』と逆ギレし、あらかじめ用意しておいた酒瓶をぐいぐい煽るのです。そうやってなかったことにするのです。とはいっても、あなたにはなんのことかさっぱり理解できないでしょうね」

それでもたぶん捕まるような気がした。

「いまではわたしは完全無欠の変人です。みなそうです。そう教育されたのです。あなたがいまかよっている二十二世紀が丘高校に。校長の式辞を聞きましたか。洗脳はそこからすではじまっている。わたしはいま、働いていません。いわゆるニートというやつでしょうか。変人すぎてだれも雇ってくれないのです。それに近々、自己破産の手続きを行う予定です。働いていないのに酒を飲み過ぎたのです。いま鼻で笑いましたね？　しかしわたしは、酒を飲まなければいけないのです。検問があつたとき素面だつたらどうします？　どうやって検問で、警官に飲酒運転を疑わせることができるのです？　粕漬けは嫌いです。そしてわたしの人生は崩壊しました。床に落とした一升瓶のように」

ガラガラガラ。富田先生が入ってきた。携帯電話をサツと机にしまいこむ。

「マチ子さん、助けてください。わたしをこの地獄から救い出してください。みんなを救い出してください。そして　　気をつけて！　変人が偉業を成すなど、嘘っぱちもいいところです。変人は変人

でしかないのです。変人になったが最後、つらく厳しい残りの人生が待ち受けています。助けて！そしてどうか卒業しないで！」

最後の文面が脳みそにこびりついている。「卒業しないで！」先生は教卓に立ち、いつものだるまさんが転んだ方式でいきなり時計を見上げる。

「えー」向き直って言う。「転校生が来ました。みなさん仲良くしてあげてください。少なくともわたしがいるところでは」

全員がドアに注目する。髪をサツと手で払い、ナイスボディの女の子が胸を張って登場した。アヤたんの言うとおり、たしかに玲乃様は転校してきた。

「転校できる能力だよーん。玲乃様は好きなときに転校しつつけることができるの。といっても、在籍している高校に限るんだけどねー」

というメモがアヤたんから飛んできた。同じ高校に転校しつつけてなんの意味があるのか。

「楔玲乃。よろしく」

フツと笑みを浮かべる。三日前にすでに会っているのに、みんなは（とくに男の子は）興味津々といった感じで玲乃様を見上げている。なるほど、このためか。

15話　そこまでロッカーが言っならば　（後書き）

だんだん形式が似通ってきた。まあひっぱりすぎもひっぱりすぎなので、先へ進みます。

16話 いっしょにイこ？

平然と席にすわる玲乃様の周囲に、妙な地場が形成されている。転校生が来ると（しかも美人の女の子だと）たいてい探り合いみたいな空気になる。休み時間になると女の子はこれまで以上の結束力で仲良しグループとひつつき固まり、気にしていませんよと言わんばかりに転校生とはまったく関係のない話題で大盛り上がりした。ただどみんな神経の七十パーセントほどが玲乃様のほうに向かっているのは見え見えだった。

男の子はもつとわかりやすい。トイレに入ったとたん表情も口調も言ってる内容も豹変する女の子とちがって、ちよつと離れたところからひそひそ話し、ときおり羨ましそうにチラ見している。たまに我慢できなくなったらしい子数人が席を立ち、話しかける。玲乃様は常に超然としている。自信たっぷりな笑みを口元に浮かべ、おもしろがるように男の子を見まわしながらアホな質問を余裕でいながらしている。するといつの間にか、他の子も引き寄せられるように続々と集まってくる。人ばかりで主役の姿が見えなくなり、相対的に脇役にされた女の子はなるべく離れたところから意地悪っぽい視線を送っては「あーやだやだ」とため息をついた。

というのが毎日つづいた。

あのお嬢が転校しまくっているのは、たぶんああいうのが好きなんだからだと思う。それはいいとして、まわりが毎日おんなじように新鮮な反応をするのが理解できない。お嬢のボケに乗っかってあげているのか、それとも周囲に転校生として認識させることもできる能力なのか。わたしでさえお嬢が転校生ではないことに気づいている。アヤたんも気づいている（例によってかなり不気味がっ

いるけど）。

もしかしたらわたし、以外と見えているのかも。

身勝手な転校生の話は置いて。お昼休み、わたしはアヤさんと図書室にいた。

「こっち来て」

わたしはそつと言ってアヤたんの手を引き、戦前からあるんじゃないかと思えるような汚らしい本が並ぶほこりっぱい本棚をとおり抜け、隅の暗がりには落ち着いた。アヤたんはなんでか知らないけど異常に興奮していた。顔を真っ赤にし、目をきらきらさせてわたしを見上げ、わんこみたいにハアハアいつている。この子だいじょうぶだろうか。

「じつは」

望まないなにかがはじまるまえにわたしは話を切り出した。携帯電話をいじくって二〇〇八年度卒業のOB佐藤なんとかさんのメールを表示し、アヤたんに渡した。

アヤたんはつまらなそうにむつつりし、受け取った。まっげの下の眼球をわずかに動かしつつメールを読み進める。

「『　　』
どうか卒業しないで』」

一通読んでも百通読んでもいっしょだと思ったので、あれからわたしはざつとほかのメールを眺めてみた。どれもだいたい同じ内容だった。物心ついたころからヘンテコな能力を持ち、二十二世紀が

丘高校に入学し、完全無欠の変人として世に送り出され、偉人になるどころか社会不適合者として悲惨な人生を送っている。学校の方針はまちがっている。卒業してはいけない　　ぜんぶ真に受けければの話だけど。そしてどれもこれもわたしに助けを求めている。

「どう思う?。」

「どっちが?　助けるほう?　それとも卒業のほう?。」

「えーと　　」アヤたんは怒ったようなへの字口でわたしを見つめている。かびくさい空気を吸い込み、鼻がむずむずしてきた。「卒業の　　」

クシッ!　クシッ!

「　　いまのくしゃみ?。」わたしにたずねる。

「そう」鼻をすする。

「あたしに聞いているの?　どう思ってた?。」

へッ!

「おっさんみたい」アヤたんはぼそりと言った。「どっちでもいいよ。あたし、自分の意見持っていないんだ。頭の中は他人の情報でいっぱいだから。自分が入り込む余地がないの。だから正直、どうでもいい。どうでもいいって考えたんじゃないの。考えられないからどうでもいいの」

「変人として教育されるんだよ?　なんとかしないでいいの?。」

「なんとかかって？」

わからない。

「助けてあげるの？」

それもわからない。

「どうしてマチ子さんに助けを求めてくるんだろっ」

「そう、それ。不気味でしょ？　なんでわたしなの？　そう思わない？　わたしなんてなんの取り柄もないし、それどころかふつうの人が見えるものまで見えないし、それに」

アヤたんがじつと見上げてくる。わたしの言葉はいつの間にかフエードアウトしていた。

「不気味といえば、あの転校生が言ってたよね、マチ子さんの能力について。『その状況で見えてほしいものが見えない』って」

正直覚えていない。「そうだったっけ？」

「なんであいつのほうがあたしよりマチ子さんに詳しいわけ？」怒り出した。「あつたまくる。転校生のくせに。マチ子さんはあたしがいちばん詳しくなきゃいけないのに」

「ほんとかどうかはわからないよ。てきとうに言ったのかも」

アヤたんは相変わらずむーんと怒っていたけど、わたしがそう言

うと少し悲しそうにふつと目もとが変化した。わたしとしては、ほんとうにどうしていいのかわからない。この高校にも、能力がうんぬんといったことにもぜんぜん慣れていない。この高校は、疑う余地なくヘンテコだ。たしかに三年もいたら頭がおかしくなるはず。でもほかの高校に編入はできないし、先生に「おたくらの教育方針はまちがっています」とも言えない。言ったところで聞いてくれるとはとても思えない。もっと賢かったら、テレビドラマみたいに謀略を張り巡らせ、学校と対決し、そして勝利を手中にできるのに。

卒業したらどんな変人になってしまふのだろうか。と、わたしは突然ひらめいた。

「話、聞きに行ってみない？」わたしは言った。

「ん？」

「この佐藤なんとかさんに。というか、だれでもよさそうだけど。ほんとかどうかわからないけど確かめないと不安だし、ほんとだったとしたらどのくらい悲惨な人生になってるのか気になるし」

アヤたんのまぶたが食虫植物みたいにパカッと開き、大きな瞳がグリッと上方向に動いた。若干疑わしげなまなざしでわたしを見る。

「『行ってみない？』とはつまり、あたしといっしょにつてこと？」

「もちろん」細かく十二回くらいうなづく。「行かない？」

「つまりあたしを誘ってるんだ？」

「もちろん」

「つまり今日、授業が終わったらふたりでお出かけするんだ？ ふたりっきりで」

「話を聞きにね」やんわりと訂正する。「だからわたしと付き合ってくれる？ あ、付き合っつていつのはそういう意味じゃなくて」

「付き合っ！」

それがNGワードだと気づいたときにはすでに遅かった。アヤたんはぴよこーんと飛び上がり、とたんにもとのアヤたん切り替わった。わたしはお昼休み終了のチャイムが鳴るまでたっぷりとアヤたん抱きつかれ、胸に顔をぐりぐりこすりつけられた。

「いくいくいく」

16話 いっしょにイこ？（後書き）

いろいろ見逃している感が。ここまでくるともうすでにインプロではなくなっけてきます。頭の中に計画ができあがってくるんですね。修正点もはっきり見えているし。

17話 愛犬にフルネームを与える男

放課後、わたしはアヤさんにひきずられるようにして校舎を出た。駐輪場に入り、愛車のママチャリ ブレーキがぜんぜん効かない号をひっぱり出し、外へのろのろと押した。アヤさんはどうしてもホッピングをやめられないようで、ボブのショートヘアをぱたぱた飛び跳ねさせながらわたしの到着を待ちわびている。八歳の女の子の頭上にブルドーザーでチロルチョコを二十万個ほど降らせたらこんな感じになると思う。男の子ならうまい棒。

この子、友達いないんだろうか。ふと考えた。そういえばわたし以外の子とつるんでいるところを見たことがない。

自転車の森から脱出し、サドルにまたがり片足立ちする。振り向いてたずねた。「チャリンコは？」

アヤさんは答える代わりににーっと笑みを浮かべ、荷台にお尻を向けてひょいと飛び乗った。お姫様すわりでわたしにしがみつく。

「さあ、いつでもいいよ」

「なにが」

「この状況だと『いつでも出発していいよ』って意味だけど」アヤたんが言った。「ほかのもどんどこい。なんならいまここで」

わたしは急いで出発した。正門を抜け、枯れ木通りを抜ける。両端にずらりと並ぶ桜の枯れ木はいつ見ても陰惨だ。

「きれいな桜。こうしていると胸の奥がほんわりしてくるね」

「どこが？ 地獄の一丁目って感じなんだけど」

「そうか。マチ子さんには見えないんだ。このきれいな満開の桜が」
ふらふらと角を曲がる。なにげなくコンビニを見てぎょっとした。
ローソンが佐藤商店に逆進化している。

「あれ、なにに見える？」わたしは指さした。手を離れたせいで前輪がかくつと横を向く。

「ファミマ」

「ファミマ？」

「だって緑色だもん。なにに見えるの？ 佐藤商店とか？」

そんなこんなでわたしたちは、二〇〇八年度卒業生、佐藤洋さんの自宅に到着した。

太ももに軽い張りを覚えつつ、わたしはチャリンコから下り、佐藤さん宅を見上げた。アヤたんは元気いっぱいだ。当然か。道中アヤたんがしたことと言えば、わたしのおなかにしがみついてぶつぶつぶやき、ときたまおなかの上とか下とかになにかの意図を持つて手を這わせただけだった。

「一軒家だね」アヤたんが見上げて言った。「小豆色のトタン屋根。築後三十七年」

佐藤さんとは事前にメールをやり取りした。携帯電話はいつこうに鳴り止まず、ひと文字打ったびにメールが着信した。どれもこれも助けて、助けて、助けて。授業をひとつまるまる使ってやつと住所を聞く。うまいこと学区内だった。学校からチャリンコ時間で十五分と離れていない。今日の放課後に行ってもいいかと言うと「とんでもない」と書かれた返信が来た。どっちなんだ。

それはいいとして。気づくとアヤたんにしがみつかれていた。体が慣れすぎているようだ、なんとかしないとこのままでは などと考えつつ、せまい庭先に足を踏み入れる。

「ワン！ ワン！ ガッ」

喉になにかがひっかかり気味なわんこの吠え声がした。びっくりとして顔を向ける。アヤたんはわたしを突き飛ばすように離れ、大きく一歩あとじさった。壁際の茂みにがさつと足を取られ、慌ててバランズをとる。顔がひきつっている。

「ワワワン！ ワワン！ ガッ」

柴わんこだった。犬小屋につながれ、わたしちに鼻先を向け、一定の間隔で吠えては喉をつまらせを繰り返す。小屋はご主人のと同じすすけた小豆色の屋根で、わんこの体で半分見えないけどプレートには「パク」と書いてあった。

「ワン！ ガッ」

「ダメダメダメ、犬はダメ。ほかの動物もしかり」アヤたんが聞いたことのないひきつった声でまくし立てた。「なぜなら動物はなにも考えてないから」

わたしは逆に柴犬大好きっ子だった。毛並みは若干荒れているが、なかなかかわいい。「パクー。いい子いい子」と呼びかける。「ガッ！ ガッ！ ハッ」「窒息死しそうな吠え声。パクはさらにテンションを上げ、ぐるぐる円を描くように暴れまわった。鎖が踊り、体に隠れていたプレートがぜんぶ見えた。

フルネームはパク・チソンだった。

犬にこういう名前をつけるのは感心しない。さすがが校の先輩だと思った。そしてべつのほうから、このまま引き返したほうがいいんじゃないかという声が聞こえてきた。

「ひーっ！」

とくに意味もなくアヤたんがお尻から茂みに沈みこんだ。手を差し出し、救出する。「だいじょうぶ、吠えるのは最初だけだよ。そういうもんなの」

「なんで犬の考えがわかるの！」声がひっくり返っている。それから怨念めいた声でぶつぶつとつぶけた。「い、犬だ、犬　犬は殺せ」

逆徳川綱吉だ。

と、玄関の引き戸がガラガラと開いた。わたしは振り返る。サンダルをずりつと鳴らし、三日は風呂に入っていなそうなジャージ上下の男性が姿をあらわした。

17話 愛犬にフルネームを与える男（後書き）

アヤたんは完全にレズキャラになってしまいました。潜在意識に秘められた欲望ですね。あとさわやかレズなら女主人公でもいけるんじゃない？ と思ったり。どうなんでしょうね実際。

18話 敬語も使えないようなやつは社会人失格だ！

「メールの人？」

愛犬に韓国人サッカー選手の名前をつける男が言った。寝癖がつきすぎてテカった鉄腕アトムみたいになっている髪をがしがしく。半透明の粉が舞い、夕日を受けてきらきらと輝いた。そして肩に降り注いだ。

わたしは顔をしかめないように注意しつつ、よそゆきの声で答えた。「はい、メールの人です。こんばんは」

「あたしはメールの人を愛してる」アヤたんが言った。「片思いなの」

佐藤洋さんらしき人はまったく表情を変えず、目だけを動かしてアヤたんを見た。

「町田マチ子さん」

「そうです。メールの件でいらっしゃいました」

やぶにらみの目がわたしを捕らえた。メールによると無職のひきこもりということなので、たぶん一日じゅう部屋でパソコンの前にすわってゲームでもやっているにちがいない。いつだったかNHKのニュースでそういうのを見たことがある。

「ふつう自分にいらっしゃったって言わないよ」ぼそつと言った。

「あ すみません」

たっぷり二十五秒ほどわたしをにらみつけ、それからくるりと背を向けた。「入って」

奥に消える。わたしはアヤさんと顔を見合わせた。

「どう思う？」ささやく。

アヤさんは答える代わりに例のチロルチョコスマイルでにんまりした。「えっ？」

そんなわけでわたしたちは佐藤洋さん宅にお邪魔した。靴を脱ぎ、そろそろと進む。中は薄暗く、板の廊下は歩くたびにぎしぎしと音を立てた。家じゅうにまとわりつく怨霊が取り憑いたような雰囲気はいいとして、わたしとしては佐藤さんらしき人が自己紹介もせず裸足で二階に消えたのがかなり気になっていた。お客にスリッパも用意しなかった。母ならこういうもてなしはぜったいに許さない。たぶん佐藤さんは二歳児向けのピアノ教室からやり直させられるだろう。

「二階に上がっていいのかな」

たずねているそばからアヤさんはほとんど二階に上がり、姿を消した。あれ、なんかスカート短くなってない？

一階は物音ひとつせず、廃屋のようだった。台所も居間も真っ暗。二階はさらに陰惨だった。一歩進むごとに、なにか見えないものに押し戻されているような感覚を覚えた。わたしのことだからほんとうに見えていないだけかもしれないけど。

そして佐藤さんの部屋は、さしずめ伏魔殿といったところだった。

「入って」陰気に言う。「好きにすわってよ」

すわれる場所がなかった。洗濯物と食べ散らかしたコンビニの容器と紙コップの山だ。床さえ見えない。ソファはあったが、鼻をかみまくったのかまるめたティッシュがいくつも転がっていて、おまけに脱ぎっぱなしたよれのトランクスが背もたれにひっかかっていたのでとてもすわる気にはなれなかった。洗いすぎなのか洗わなすぎなのか、パンツは白と水色のストライプが融合していてまったく新しい色に進化していた。

アヤたんでさえ判断に困っている様子だった。あんぐりと口を開けて見まわし、洗濯物の海に膝下まで埋もれながら立ち尽くしている。

「あの、外で話しません？」

わたしは反射的に提案した。声がひきつっている。佐藤さんはじろりとにらみ、おそろしく背もたれの長いメカニカルなイスに腰掛け、慣れたしぐさでゆったりともたれた。パソコンのデスクにはモニターがふたつとキーボード、携帯電話がみつくと、NHKの番組で見たようなフィギュアが数え切れないほど置かれていた。

「助けてほしい、このぼくを」

事務的な声。そうだろう　わたしは素直に思った。同じ立場ならわたしでも助けてメールのひとつも送るはずだ。

脚を組んでつづける。ジャージの裾はジッパーが壊れてツマミの部分がぶらぶらしていた。

「助けてほしい」また言った。「助けてほしいんだ」

「どう　「わたしは口ごもった。そういえばなんのために来たんだっけ？　アヤたんを見る。アヤたんはおっきな目玉をぐるっとまわした。「そうだ。あの　助けるっていうか、わたしたちはまずお話をお聞きになりたくて　」

「お話をうかがう、だろ」また敬語を指摘された。「なんでわからないのかな。『お聞きになる』は尊敬語だろ。目上の人に対するときは謙譲語を使うのが正しいんじゃないかな。もしくはただ『聞きたくて』でもいいんだ。へたに敬語を使おうとするから『アイスカフェラテでよろしかったですか？』なんてヘンテコ敬語が幅を利かせるようになるんだよ、まったく。世の中腐り切ってるよな？　失望だよ。　ところでなにか飲む？」

いまさただけど帰りたくなった。世の中より佐藤さんと部屋のほうが真っ先に腐るんじゃないのかと思っただけでもちろん口には出さなかった。

進められたなにかの飲み物は丁重に辞退し、さっそく佐藤さんの話をおうかがいすることにした（立ったまま）。

「　そう、ぼくはきみたちのかよう二十世紀高校の卒業生だ。飲酒問題を抱えてる」

非常に汚いマグカップを煽った。非常に長いゲップをかます。

「で？」と佐藤さん。

「で？」とわたし。

「で？」ついでにアヤたん。

「話を聞きたいんだろ」

「ああ　そう、そうです」やっぱりなにを聞き出すか忘れてしまったのでアヤたんを見る。アヤたんはふたたび目をぐるりとし、ひとことでは言い表せない複雑な動作でわたしに伝えてきた。それで思い出したわたしもすごい。「つまりですね、どうして卒業してはいけないのか　ていうか、高校の三年間でどういう教育をされてその、ていうか、佐藤さんがそんなふうに　あの、人生が狂ってしまったのか、お聞きしたいんです。その、ていうか　」

「あのその言い過ぎだろ」佐藤さんはぴしゃりと言った。「何回『ていうか』を使うんだよ。ひとことで要約できないの？　まったく　」

わたしは思わず天を仰いだ。板が腐っているのか長方形の穴ぼこが開いている。そして失礼と知りつつも「あー」となった。もう帰ろう。ほかにも候補は一万件近く溜まっているんだから、もう少しマシな変人に当たったほうがいい。

と、アヤたんが洗濯物をじゃぶつとさせ、一歩進んで言った。

「なんで犬に『パク・チソン』なんて名前をつけたの？」

18話 敬語も使えないようなやつは社会人失格だ！（後書き）

さあ、どうしてなんでしょう。答えは明日出る。はず。たぶん。
それにしても進まないぞ。

19話 今晚のオカズはひよこクラブ

「なんだって？」佐藤さんが言った。

「だから、なんでパク・チソンなの？」アヤたんが言った。「あたしとしてはそれ以前に犬を飼っていること自体が疑問なんだけど。あんな、言葉も話せないバカな生物を身近に置くなんて」

話がよけいややこしくなってきた。そしてわたしはまたまたなにを質問しようとしていたのか忘れてしまった。

「飼ってはいない」佐藤さんが早口で反論した。

「じゃあおもての柴は？」

「パクはぼくのパートナーだ。対等なんだよ。犬じゃない。仲間なんだ。だから」

佐藤さんは無精ヒゲの生えた顎をこちらに向けてマグカップを煽り、中身を飲み干した。「かー」と熱い息を吐き、長大なゲップをかます。たぶん予想は外れていないと思うけど、中身はお酒だ。佐藤さんは真っ赤な顔をしていて脂ぎった髪が額にべったり張り付いている。そしていま気づいたんだけど、部屋はなんとなくすえたにおいがしていた。

「対等なんだ。だから名字をつけた。名字がなければ出生がわからないじゃないか。あまりにもかわいそうだ」

「佐藤にすればいいじゃん」

「あー」

佐藤さんはうなつて、モニターの横にあるウイスキーかなにかの瓶をつかみ、マグにどぼどぼ注いだ。乱暴に戻すと、フィギュアにぶつかつてもつれ合うように洗濯物の海に落下した。

グビツ、グビツ。一気飲みした。

「ああ　いい。いい感じた。もう少しで致死量に達する」その言葉に偽りはなさそうだった。目は半ば白目を向き、阿呆のように口を開けながらぐらぐら揺れている。「いいぞ。血中アルコール濃度がいい具合だ。そろそろ運転したくなってきた」

「あの一」わたしは口を開いた。「それよりわたしの話を　できれば高校在学中にどのような教育を受けたのかを教えて　」

みなまで言えなかった。佐藤さんはいきなりびくつと上半身を痙攣させ、きよろきよろした。

「そうだ。検問。ねずみ取りはどこだ？」

イスをくるつと半回転させ、かがんだ。段ボールから平べったい銀色の機械を取り出す。イヤホンを耳に押し込み、つまみをいじくつた。

「いいぞ。近くだ」猫背で顔を近づけ、熱心にのぞきこむ。「警察よ、おれを捕まえてみる。検挙してみる。腰抜けの能なしどもが。おれは逃げも隠れもしないぞ。酒は飲むけど　」

「警察無線の傍受ね」とアヤたん。

わたしはかぶりを振って、部屋に一步踏み込んだ。なんだか腹が立ってきた。なんでわたしに助けを求めてきたのかもどうやったらわたしが助けてあげられるのかもまったくわからなかったけど、この際そんなことはどうでもいいという気がする。仮に他の人は助けてあげるにしても、こいつだけはごめんこうむる。二〇〇八年卒業だから、佐藤さんはたぶん二十一歳くらいだろう。いい年して自分のことしか考えてない。ほかにできることがないから、唯一の得意にしがみついているのだ。悩みがあるのはみんな同じなのに。

「質問に答えてください」わたしはぴしゃりと言った。「なんのために呼んだんです？　せつかく来てあげたのに、いきなり酔っ払って」

「そんなこと、だって？」無線機に顔を向けながら言った。「きみたちにそんなことをそんなことと言う権利があるのか。敬語もできないくせに。どうすりやいいんだ。じゃあぼくはどうすりやいいんだよ？　あ？　いったいどうすれば」

うつろな無表情でぼそぼそしゃべっていたが、次第に意識が警察無線から離れていくのがわかった。天井付近を漂い、やがてふつと現在から消えた。なぜかわからないが、見えた。

佐藤さんの下まぶたに涙がにじんできた。

「みんなそうだ。飲酒運転は悪だと決めつける。ぼくはなにもしてないのに」

「悪だよ」アヤたんが口をはさんだ。「悪いことしてるよ」

佐藤さんは無視する。「ぼくから飲酒運転を奪ったら、もうなにも残らないんだ。なんとかしろって？　は！　いまさらどうすればいい？　どうやって生きていけばいい？　生活のことじゃない。ぼくの自尊心のことさ。できることをせず、みなと同じ人生を生きる。そこに人間として生きる意味はあるのか？　ただ生きるだけなら簡単だ。だけどそれじゃ動物と　犬と同じじゃないか。だからだよ。だから犬にパク・チソンとつけたんだ。ぼくの人生は犬並みだっていう意思表示さ。ぼくにはできることがある。世界を変えられるんだ　おもに飲酒運転業界で。だけど天才は世に理解されない。そしてはやく気づきすぎたのがまちがいったんだ。ぼくは神童だったんだ。なのにいまはこんな　ああ　」

ガラガラガラ。顔を押さえて悲嘆に暮れている佐藤さんをなんとなく眺めていると、玄関の戸が開いてだれかが入ってきた。楽しそうに談笑している。弾けっぷりからすると年の近い男の子だ。

二階に上がってくる。どこかで聞いたような声。

「おまえ、ちゃんと見てるって言ったろ？　いつどの段階でエロ本がひよこクラブにすり替わったのか　」

田澤だった。もうひとり、真っ黒顔の丸坊主がついてきた。

ふたりはわたしを見てぎょっとし、立ち尽くした。

「町田さん？」　田澤がかなりおびえた様子で言った。

「町田って？」

丸坊主が言った。田澤の脇をすり抜けて近づいてくる。いかにも野球漬けですという雰囲気漂っている。わたしは一步あとじさった。

わたしにチラツと目を向けたが、田澤の幻視と正反対でまったく興味なしといった感じだった。部屋をのぞきこみ、佐藤さんに声を掛ける。

「兄ちゃん、酒買ってきた」

わたしはアヤさんと顔を見合わせた。すっかり忘れていたけどアヤさんは立ちっぱなしの洗濯物に埋まりっぱなしだった。なにかの病気に感染するのも時間の問題だと思った。

佐藤さんはうなだれたままだった。と、顔から片手を離し、よこせという感じで手を振った。

「酒？」わたしは丸坊主にたずねた。あ、思い出した。田澤の前の席の子だ。「ていうか、兄弟なの？　じゃあ名前は佐藤？　だっけ？」

「『ていうか』って言うな」佐藤兄たけふがつぶやいた。「それに佐藤は名字だ。名前じゃない」

「おれ、佐藤じゃないよ。兄貴だけ」

「兄弟なのにな？」

「あー、しまじろっだ」アヤたんがざぶりと洗濯物から抜け出し、舌を出しながら這い進んできた。廊下に出るとわたしを見てつづけ

た。「これ、島。この一家は親兄弟ペット全員名字がちがうの。能力ってわけじゃないけど。情報伝えるの忘れてた。犬のせいで頭がぶっ飛んじやって」

島は伏魔殿に侵入し、パソコンデスクにマツコリと書かれたボルトを置き、元気づけるように兄の肩をぽんと叩いた。

「ちなみにしまじろうの能力はバカなこと。とてつもないバカになれるの」

神妙な顔で戻ってきた。ふたたびわたしをチラ見するが、バカには見えなかった。運動部特有のかなりエロパワーが有り余ってそうな顔ではあったけど、男の子はだいたいみんなそうだ。

とくに奥の方でわたしを見てわなないている田澤。

「お酒 帰りに買ってきたの？」とわたし。

「ああ、田澤に頼んだ。コンビニに連れてってさ、『マックスコーヒー買ってきて』って言うんだよ。そうすると酒を買ってくる。知ってるんだ、おれら付き合い長いから」

つんつん頭がうんうんうなずいた。

「で、代わりにこいつがご所望のエロ本買うのに付き合ってるんだけど、自分のためにはなにもできないのな。いっつもたまごクラブ買ってくるんだ。定期購読したほうが安いってくらいだよ」

「代わりに買ってあげればいいのに」

「こいつのズリネタを？ ごめんだね」そしてわたしとアヤたんを交互に指した。「ところでなんでうちにいるんだ？」

となりの島の部屋に行き、理由を話した。去り際佐藤さんの部屋を振り返ると、すでにマツコリを瓶から直接煽っていた。「きみたち、ちよつと待ってよ。ドライブしたい気分じゃない？ ちよつどここに才能あふれる運転手がいるんだけど」

19話 今晚のオカズはひよこクラブ（後書き）

答えになってないし犬がパク・チソンは危険な香りがしますね。人
気ないから攻撃されることもないでしょうけど。

20話　しまじろう、異次元バカ軍師。

「なるほど」

わたしが説明すると、しまじろうは腕を組んで神妙な顔をした。何度もしつこいようだけど、しまじろうはとつてもふつうに見えた。手荒な印象があつて、相手を威圧するような雰囲気がある。かなり苦手なタイプだった。でも二十二世紀が丘の変人どもと比べれば、どっちがマシかは言うまでもない。むしろ頼りたい気分だった。

「それもいまのうちだよ」アヤたんがわたしの思考を読んで言った。ゆつくりとかぶりを振る。「見てて。突然バカに豹変するから。ビツクリするよ。一度見たら忘れられないよ。あたしでさえ圧倒される。予想がつかなくて」

しまじろうはアヤたんを牽制するように見た。おれの秘密をばらすな、というよりも、たんにやかましい子にいらついているだけのように見える。

「このままだと、おれらは全員三年で変人になるわけだ」

私に目を戻して言った。すごい。わたしが一日かかって説明した内容をあっさり要約してくれた。

「そうそう」

「三年で兄ちゃんみたいになるのか」

うなずきがたく、わたしは首をねじつてごまかし、窓の外を見た。

すでに日が暮れかけている。また問題がひとつ。といっても個人的な問題だけど。毎日午後七時きっかりにはじまる夕飯に間に合わない。なければならない。

「どうすればいいか」

と、しまじろうは振り向いて田澤を見た。田澤はハッと顔を上げた。「なに？」

アヤたんはいじわるっぽい笑顔を浮かべながら、かかとで田澤の太もをうりうりしていた。たぶん意味はないと思う。

「つまり、解決するためには以下のいずれかを実行しなければならぬ。べつの高校へ編入する、学校を変える」

「無理だよ。考えたけど」わたしは口をはさんだ。

「もしくは世間に訴える」

「んん？」

「だって、どう考えても学校の方針はまちがってるだろ。『変人を育てます!』なんてさ。そりゃ中には偉大な人物も生まれるだろうけど、あまりにも乱暴すぎる。マグロを地引き網で取るようなものだよ。てっとりばやいけど傷物になったら値が落ちる」

だんだんしまじろうが漁師に見えてきた。

「どうやって世間に広めるの？」

「いろいろある。たとえば」

うつりうつりされている田澤は、相変わらず情けない顔でアヤたんに目を向けている。抵抗しないところを見るともしかして喜んでるんじゃないだろうか。

どうでもいいけど。

「たとえばネットで実情をバラすとか」

「退学になるんじゃない？」

「もちろん匿名でだよ。世論を動かすんだ。NHKが取り上げるまで」

「ほかには？」

「近隣住民にも訴える。頭のおかしい高校だつてのはみんな知つてと思うけど、たぶん実情は知らないはずだ。とくにこれから高校受験が控えてる子を持つ親。関心が高いはずだよ」

すごい。バカどころか立派な軍師だ。もしかしたら、ほんとうにどうにかできるかもしれない。世論を動かし、NHKの特集で取り上げられ、高校は方針を変えざるを得なくなる。

どうしてこんな子が二十世紀が丘高校にいるんだろ。やっぱどこか狂っていて、それが表に出ていないだけなんだろうか。

「じゃあ、さっそくはじめるか。『明日にしよう』なんて言うてる

と一気に三十歳になっちまうしな。世の中そういうもんだ。異論はないか？」

「もちろん。お任せする」とわたし。

「マチ子さんといっしょに？ やるやる！」とアヤたん。「男どもがうっとおしいけど、隙を突いてふたりで抜け出せば」

全員の視線が田澤に突き刺さっている。田澤は顔を上げた。「なんでおれを見てるんだよ？」

「おまえの力が必要なんだ」話をまったく聞いていなそうな友人だったが、しまじろうは辛抱強く語りかける。「その狂った能力が必要なんだ。おまえはなんでもできる。やりたいと思ったこと以外は」

「しまじろうだって狂ってるだろ」

「おれが助けてやる。つまり、コンビニでエロ本を買うのと同じ要領だ。友達は助け合ってこそ友達だ。だろ？ 他人の行為を無駄にするな。他人にすぎるのは弱い行為じゃない。わかったか？」

やっぱりわかっていなさそうだったが、田澤はうんとうなずいた。顔はそこそこかわいいんだから、もうちょっと堂々としていれば彼女のひとりやふたりすぐに見つかるのに。もちろんわたしはごめんだだけ。

そんなこんなで、わたしたち四人は双六でもするみたいに膝を寄せ合い、作戦を練った。

「まずは？」わたしが言った。ちよつと楽しい。

「ソーシャルメディアを活用するんだ」

そーしやるめでいあー？　しまじろう以外のバカ三人が同時に首をひねった。

「ツイなんとかとか、あるだろ。さっそくアカウントを作成しよう。おまえは　」と田澤に言う。「辺境の個人サイトをつくれ。言っておくが人気のないサイトだぞ。そうすればたぶんアカウントを取れるはずだ。しかも十五万個くらい」

さすが親友。よくわかつてる。

「小説載せてもいい？」恥ずかしながらという感じで田澤が言った。
「中二のころから書きためてる自信作が　」

「おもしろくないやつ？　ならいいぞ」

「おもしろいよ。というか熱い」

と言ったが全員に無視された。

「そして？」とアヤたん。

「ひとりごとをつぶやきまくる。『二十二世紀が丘高校は変人の巣窟』とか。誹謗中傷するんだ。そして二の矢として　」

当の本人が二の矢をつげなくなった。突然口ごもり、かすかに顔を震わせている。目は正面をカッと見据え、焦点を失い、遙か過去

をさまよっているように見えた。

「そ　二の矢　ガッ！」

なんだか聞き覚えのある擬音を鳴らした。喉がびくびくと動き出す。エイリアンかなんかが出てきそうだ。

「ガッ！　ガッ！　ワン！　ワンワン！」

パクそつくりで鳴き出した。わたしはスカートを押さえながら畳の部屋をずりずりとあとじさった。ふすまが背中にぶつかる。

「さーあ、はじまるよー」アヤたんが目をきらきらさせて言った。

「しまじろうの異次元バカ劇場！　よってらっしゃい見てらっしゃ

い　」

20話　しまじろう、異次元バカ軍師。（後書き）

犬のパクとの人格交代とか？　もつとんでもない狂いつぷりにしたいものです。

21話 ほんとうのカレー部に入ろう！！

われらが軍師しまじろうは、四つん這いになって本格的に犬になった。

「ワン！ ワン！ ガッ」

うろつろと六畳間を巡回する。アヤたんは「うひょー」という悲鳴だか歓喜だかわからない叫び声を上げてしまじろうを飛び越え、わたしに向かってダイビングしてきた。あつと気づいたときにはもう遅く、非常に楽しそうなドアップの顔が目の前に迫り、逃げようかどうか迷う間もなく次の瞬間にはふにやっと抱きつかれていた。

うーん。だんだんこの感触に慣れてきたような気がする。これってまずい。

くだんのしまじろうは大きな犬小屋を三週ほどしたあと、学習机の脚に鼻先をこすりつけはじめた。しばらくクンクンにおいを嗅いだあと、方向転換して後ろ足を上げた。

どう見てもおしっこの体勢だった。

「やめさせないの」アヤたんの縦四方固めを受けながら、わたしは田澤にいった。「友達でしょ？ やめさせる方法を」

田澤はたまごクラブを読んでいた。ふつと顔を上げる。

「むりむり。こいつがバカになったら最後、だれにも止められないんだ。ていうか、べつにいいじゃん。干渉するなよ。だれにも迷惑

かけてないんだし」

しまじろうが動きを止め、わたしに顔を向けた。その目はもはや人間のものではなかった。八割がた犬のものだった。すごみのある笑みを浮かべたので、襲いかかられるんじゃないかとわたしはアヤタンを半ば引きずるように部屋の隅にあとじさった。

襲いはしなかったが、代わりにズボンのチャックを下ろしはじめた。

その後のことはわからない。というか、わからなくした。わたしは顔を背け、ぎゅっと目を閉じ、現実を閉め出した。そして逃避行動を取った。お花畑一面に咲き乱れる芳香剤を思い浮かべる。じょーっという音とほのかな刺激臭がした。するとなぜかコップ一杯のレモンジュースと栄養ドリンクが思い浮かんだ。わたしは耳をふさぎ、べつのことを考えた。そうだ、家に帰らないと。今日の夕飯はカレーだったんだ。弟のリクエストで。わたしもカレーは大好き。母のつくるカレーは絶品だ。隠し味にはヨーグルトと。

ぶりぶりぶり。

「ああ！」しまじろうは歓喜の絶叫を上げた。「すっきりした！すっきりしたぞ！」

わたしは思わず自らを閉ざしてしまいそうになった。

「というわけで、作戦を開始する」いきなりふつう声で言った。「覚えているか？ ツイなんとかッターやミクなんとかシイを活用し、わが校の非常識ぶりを暴くんだ。若者らしくな。そして同時にご近所へ突撃訪問だ。だが、失礼のないようにしろ。これは遊びじゃない」

い。まじめに訴えかけるんだ。少なくともおれは真剣だ。なぜならおれたちだけじゃなくみんなの将来が　おい、おれの顔を見る。なんでみんな目を閉じてるんだ？　緊張してるのか。　まあいいや。とにかく世論を味方につけるんだ。そしてNHKの特番に出る。わかったか？」

だれも答えない。アヤたんがわたしの耳たぶに唇をつけ「牛並みだよ」とささやいた。

気づくとわたしは自分の部屋にぼーっと突っ立っていた。携帯電話を握り締めている。制服姿で、すでに午前十一時を過ぎていた。

たぶんカレーは食べてないだろう。それだけは確信できた。

ういーん、ういーん。アヤたんから着信。

「だいじょうぶ？」

わたしは呆然と答えた。「だいじょうぶかどうかすら覚えてない」

「いや、だいじょうぶなはずだよ。マチ子さんが気を失ってから決死の看護をしたから」

「アヤたんが？」

「いんや、みんなで」

それはだいじょうぶじゃない。と、足もとから首筋にかけて鳥肌のビッグウェーブが駆け上がってきた。あわてて全身をチエックする。ブレザーを脱ぎ、たくしたシャツの裾をひっぱり出し、指をも

つれさせながらボタンをはずし、スカートを脱ぐ。表を見たり裏を見たりひっくり返したりしてチェックしたが、制服にカレーのシミらしきものはついていなかった。よかった、今晚はどっちのカレーは食べていないようだった。

「もーす」

携帯電話のスピーカーからアヤたんのきんきん声が聞こえた。「もーす！ 聞いているー？」

「ちょっと着替えるから」それにお風呂も、だ。バスオイル三倍にボディーソープを使い切って とにかく一刻もはやくリセツトしたい。将来なんか知ったことか。「話はまた明日ということだ」

「明日はないかも。マチ子さんには」陰鬱な声。「ツイなんとかッター、見てないんでしょ」

「んん？」

「おーい、姉！」弟の声。「先に風呂入るぞ。髪の毛いっぱい落とすぞ。いいんかー」

「待つて！」わたしは叫んだ。下着姿のままその場で無意味な一回転をし、ベッドに脱ぎっぱなしたスウェットを慌てて着込む。

「もーす」

なんなんだ、もう。

「もーす！」

「えっ？ マチ子さんも岩手県出身？ ちがうよね。鳥取県だっ
知ってるもん。まあ岩手でも『もーす』なんて言わないんだ
ど」

「さっきの話は？」

「ああ、ツイなんとかッター？ あれからあたしらアカウント取っ
て、学校の教育方針について鋭い指摘を繰り返したじゃん？」

「言うまでもなく、まったく覚えていなかった。『そうなの？』」

「で、ものすごい勢いでフォロワー増やして。あ、そうそう、
田澤の小説読んだ？ 痛すぎだよ。ある意味名作っていうか」

「かなりどうでもいい」

「で、匿名をいいことに『おれも二十世紀が丘』『わたしもじつ
は』って感じで大盛り上がり大会になった。ほんとに覚えてな
い？ マチ子さんもけっこうえげつないことを順調にツイツイして
ただけど」

「アヤたんが口ごもった。」

「なに？」

「御御坂先生に見つかっちゃった」

「おみさか？」

アヤたんはへー、とため息をついた。「おもにマチ子さんがね」

21話 ほんとうのカレー部に入ろう!! (後書き)

やっぱりシモネタ。疲れてるんでしょうか。これが偽りなき自分、
ってことでしょうね (リライトでぜったい修正するはず)。

22話 行き遅れピッチのガチンコ個人（はあと）授業

次の日、朝のホームルームが終わるとさっそく呼び出しがかかった。言つまでもないけど、悪いことほど予想どおり事が運ぶものだ。

ひとつ言っておきたい。わたしは昨晚なにをしたのかまったく記憶になかった。思い出そうとしても思い出せない。ツイなんとかツイッターに登録した覚えもないし、わが校に対して毒を吐きまくった覚えもない。わたしは廊下をなるべくゆっくり歩き、だれに対して言い訳してるのかわからないけどまちがった方向に進んでああそういえば職員室はこつちじゃなかったよねとかつぶやいて引き返ししながら携帯電話をチェックしたりなんかしていた。

悪い予想がまたひとつ。ツイなんとかツイッターが気に入りに登録されていた。アクセスしてみると、わたしのアカウントもしっかり作成されていた。これでふたつ。

ユーザー名は「町田マチ子さん@男はいつさい興味なし」だった。これは予想外。なんでバレたんだろうね。ほかにもつつこみたいところがなくもなかったけど、それはのちほどたっぷり追求することにした。

残念ながら職員室に到着してしまった。足音を殺しながら中に忍び込む。そういえばどの先生に呼ばれたのか聞くのを忘れた。このまま十秒経つても気づかれなかったら、先生が不在でしたということとで教室に戻ろう。

カウント九・九七のところで、若い女の先生がすたすたとやって

きた。なにも言わずにわたしの腕をつかみ、隅っこにある小部屋にひきずっていった。パンプスのカツカツいう音から察するに、ノーベル物理学賞をくれるつもりではないことだけは確かなようだった。

先生は乱暴に扉を閉め、ガチャツと鍵を掛けた。やはりなにも言わず、サツとちゃぶ台を指さした。向こうにすわれということだろう。

言われたとおりにすわり、正面に腰を下ろした先生をおずおずと見上げる。色白で面長、目鼻立ちがはつきりした美人だった。肩まである髪を七三ぎみに分け、ゲゲゲのなんたらみたい片目が前髪で半ば隠れていた。そして比喻でもなんでもなく、こちらをにらみつける表情は完全に妖怪めいて見えた。

思い出した。どこかで見たことがあると思ったら、入学式で校長先生をいじめてた先生じゃないか。かなりイヤな予感がした。

「『二十二世紀が丘の御御坂は三十二歳独身、性格最悪DSの行き遅れビッチ！ かかってこんかい！』」

どこから携帯電話を取り出し、画面を見ながら静かに読み上げた。くるりと反転させ、わたしに画面を向ける。

「はじめまして。わたしが行き遅れの御御坂よ」腹痛が痛いみたいな名前の先生がイヤミたっぷりに自己紹介した。「これはあなたが書いたの？」

「書いてません」自信を持って答えた。「まったく記憶にございません」

「あなたの名前じゃないの。『町田マチ子@男はいつさい興味なし』
って」

「ヤラセです」

「じゃあこれは？ 校長こらチビ！ かかってこんかい！」

「それもヤラセ」

「男にいつさい興味が無いの？」

「それは偽りです」

「男好きなんだ？」

「そういう言い方だといかにもビ」

「え？ なに？」 トーンを一段階上げておつかぶせてきた。「ビツ
チって言おうとしたの？ 自分はわたしみたいなビツチじゃないっ
て、つまりあなたはそう言いたいんだ？」

「そういうわけではなくてですね」

「なら正確にはどういう意味？」

「とにかく、書いてません。それに」 ひらめいた。「それに、
この手のコミュニティで本名を名乗るわけじゃないじゃないですか。ふ
つうに考えて。どうしたって陰謀ですよ」

「じゃあだれの陰謀なのか答えて」

「それはア」

「ア、なに？」

「いえ、なんでも」

「じゃあチューしていい？」

いきなり言ってきた。「は？」

「かかってこられたいんでしょう？ ツイなんとかかんとかによるとかかっていくよ。お望みとあれば」

わたしはお断りしようとし、なんとか口を開いた。けど思考が停止していたので人間の言葉が出てこなかった。あうあうしたあげくにようやく出てきた言葉らしきものはこれ。

「ガッ」

「なにそれ？ 犬語で『はやくわたしを襲って。ここでわたしをめちゃめちゃにしてほしいの』って意味？」

右に右折するみたいな名前の先生は、目にかかった前髪を手の甲で色っぽく払い、ゆつくりと腰を上げた。膝立ちになり、太もをこすり合わせるようにしながらちゃぶ台をまわりこみ、わたしの側面ですとんとぺったんこずわした。

先生はわたしの髪をそつとかき上げ、耳もとに息を吹きかけた。首から上が金縛りにあったみたいに固まった。なんとか目玉を向け

ると、行き遅れのビッチは唇をゆがめてニヤリと笑みを浮かべた。

「次の段階に進んでいい？」

「ダメ」わたしは言った。

「じゃあ仲間の名前を言つて。その子もめちゃくちゃにしてあげるから。三人で。専門用語でなんていうか知ってる？ 三年で文系クラスを選考したら教えてあげる」

「ア」

「んん？ いまのはあえぎ声？ それとも名前の一部？」

すごい。まさに進むも地獄、退くも地獄だ。わたしはどんどん追い詰められていった。ちなみにこの「すごい」はなにかがすごいという意味ではなくたんに追い詰め方がすごいという意味でべつだんそうだった意味はないのだった。

「『ああん（はあと）』って言ったら許してあげる」

「ああん」わたしはてきとうに言った。「ああん」

「ダメダメ。はあとがなない。感情がこもってない。そういうこざかしい真似をしていいと思ってるの？ じゃあお望みどおり次の段階に進むね。職員室に扉一枚隔てた小部屋で生徒とこんなことをしちやったりして」

先生はぐーっと顔を近づけ、こんなことをしながらあんなことをそんなふうにはじめた。残念ながら詳細を説明することはできない。

「アヤたんです」というわけで、わたしは速攻で自白した。「一年一組。わたしの大親友。あの子がわたしを騙ってツイなんたらかったらで学校や先生がたの悪口を」

「ツイうんたらかんたらで？」

「ツイうんだかへーだかで」

五分後、アヤたんがわたしの隣に正座していた。

「御御坂先生は対象の弱点を的確に突くことができるの」わたしに非難の目を向けつつ、役割どおりしっかり解説する。「トラウマを植え付けることによって人生を破壊できるという能力ね。マチ子さんの裏切り者。あとでお仕置きしていい？ うちの両親、今日は泊まりがけで温泉に行ってるから」

わたしは完全に退路を断たれた。いつそ「男はいつさい興味なし」になったほうがいいのかもしれない ふたりの熱視線を浴びながらわたしはそんなことを考えていた。

22話 行き遅れピッチのガチンコ個人（はあと）授業（後書き）

申し開きの言葉もございませんという気分。わたしのペルソナが草葉の陰で泣いております。もちろん両親もね！ でも以外とうまく進んでない？ ないか。

23話 玲乃様、助ける。

わたしたちはようやく解放された。初犯ということで嚴重注意プラスアルファで済んだんだけど、職員室から教室へ戻る途中、わたしはまともに歩けなかった。おもにプラスアルファのダメージによるものだった。

「スゴ技だったね。あそこまで生徒にやってしまうなんて、あたし知らなかった。情報アップデートしなきゃ」

アヤさんにほとんど担がれるようにして教室に到着する。休み時間のようだった。クラスメイトのみんなは思い思いのポジションでだらだらとれてれている。わたしは席に着き、時計を見ようと力を振り絞って顔を上げた。壁掛けの時計は相変わらずふざけまくっていてまったく時計の役を成していない。目の端に黒いものが映った。顔を向ける。しまじろうが横すりして体ごとわたしに向かいむつつり顔で申し訳なさそうにうなずいた。いまのところ正気のようだ。

その後ろの田澤は、真剣な顔で携帯電話に向かい、せわしく親指を動かしている。もうやめてくれ。作戦は終わり。

「ではホームルームをはじめます」富田先生が入ってきた。「みなさん席について。ほらほら」

だらだらと席に着く。まだ一週間しか経っていないのにみんなすっかり慣れ切っている。

「まずはじめに転校生の紹介を」

みんながざわつきはじめる。教壇側のドアから玲乃様がさっそうと入ってきて以下省略。

「みんな仲良くやるように。それから町田」

名前を呼ばれた。「はい」

「ホームルームが終わったら、至急職員室に行くように」

「はあ？」思わず友達用の返事をしてしまった。「もう行きました。その帰りで」

「そうだったかな。自信がないな。でも言われてみればそんな気が

」

サツと時計に振り向く。時計は油断しすぎたのか一瞬もとに戻るのが遅れ、長針と秒針をこんがらがらせてあたふたしていた。慌てて取り繕った時間は八時四十分。わたしとしてはすでに時間が幻想であることを知っていたし、先ほどの行き遅れビッチの御御坂先生と六十分一本勝負を繰り広げてきたばかりなのだ。なにより体が覚えている。

「まあ、とにかく行ってくれ。いいじゃないか、行くだけなら。べつに行きまくっても構わないだろう。若いんだし」

なんのことだかさっぱりわからなかったけど、なんだかんだいっても先生には逆らえず、まあもう一度行くだけならいいかということとで席を立ち、職員室へ向かった。

職員室では例の女教師が待ち構えていた。まったく同じシチュエーションと表情と動作でわたしを小部屋にひきずりこみ、同じセリフと同じ詰め寄り方と同じウルテクでわたしにリターンマッチを申し込んできた。

結局わたしは十三回試合をし、ぜんぶ負けた。セコンドのアヤさんは毎回飛び入りしては毎回わたしを裏切り、背後からパイプイスで襲いかかった。

「それから町田。ホームルームが終わったら至急職員室に」

ぐだぐだもいいかげんにしてほしい。わたしは十四回戦目を申し込まれそうになり、机に突っ伏しつつ、ついに言った。「イヤです」

富田先生は老朽化したドラえもんみたいな顔を曇らせ、不思議そうに首をかしげた。

「なぜそんなに制服を乱し、息も上がっているんだ？ 寝坊してパンをくわえながら走ってきでもしたの？」

と、ドラえもんがニヤリと邪悪な笑みを浮かべた。ような気がした。もしかして富田先生もグルか。あんなすつとぼけた顔してるのに？ でも高校を批判して教師を中傷したのだから、教師全体で報復があってもおかしくない。

なんでわたしだけ？

「とにかく職員室へ。ああ、それから転校生が来たぞ。みんな仲良くしてやってくれ」

がくんと首が落ち、おでこをもろに天板にぶつけた。もうどうでもよくなり、そのまま寝た。

体がビクツとした反動で机を蹴飛ばし、自分で自分をビクリさせて目を覚ました。ハッと顔を上げ、見まわす。窓の外はオレンジ色の夕日に染まっていた。教室にはわたしを含めて五人しかいなかった。ぜんぶ知った顔なのがまた最悪だった。

「おそようございます」アヤたんが言った。「回復した？」

頭にもやがかかっている。それと長く昼寝をしすぎたときの罪悪感みたいなものも感じた。

「ああん？」わたしはなんとか目の焦点を合わせながら言った。

「ああん、じゃないぞ」しまじろうがゆっくりと近づいてきた。「作戦は失敗だ。おまえの失態のせいで」

「わたしの？」

「そうだ。だがこれくらいのこと諦めるわけにはいかない。だから軌道修正する。それを話し合っただ。貴重な放課後を使って」

「どんな作戦？」

田澤があたふたと両手を動かした。「ダメ 考えさせたら」

なにがダメなんだと思いつつなんとなくしまじろうを見上げ、一瞬でなにがダメなのかがあった。これはダメだ。しまじろうはまじめくさった顔で「作戦は」と言いつつ顎に手を持っていた

んだけど、次の瞬間にはとてつもないアホになっていた。エロ目のアホ顔で体全体をくねらせながら「おつまえっのかーちゃんシベリア生つまれー」とかわけのわからない異次元ギャグを飛ばしまくった。

「こいつの三年後が心配だよ」

田澤がぼつりと言った。三年待つ必要はないかも　しまじろうのハイパーテンションギャグを眺めながらわたしは密かに思った。

「こどもチャレンジ！　こどもチャレンジ！」一転して卑猥なポーズを取る。「おとなもチャレンジ！」

「あたしたちの三年後も、でしょ」めずらしく心配げな顔でアヤたんが言った。「変人として、だれにも顧みられず」

「大学も行けず」田澤が卒業生の言葉みたいに引き継いだ。「就職もできず」

なんなんだこれは。妙にシリアスな空気が醸し出されている（約一名を除く）。

と、窓際にひとりすわっていた万年転校生が切り裂くような声音で言った。

「もうネタ切れなの？　情けないったらありやしない」

「なに？」アヤたんが噛みついた。「あなた、関係ないでしょ？　それよりはやく帰らなくていいの？　明日も転校してくるんでしょ？」

玲乃は頬杖をついて笑みを浮かべ、おもしろがるようにこちらを眺めている。ライトブラウンの髪の毛が西日を受けて輝いていた。ちよつと後光に見えなくもない。

「言ってくれるじゃない。せつかく知恵を貸してあげようとしているのに」

「ネタはあるぞ！」しまじろうが叫んだ。「エントリーナンバー二番、しまじろうです。『元気な胎児』やりまーす」

ヘソの緒を噛み切りながら暴れまくる胎児から目をそらし、わたしはアヤたんと顔を見合わせた。ここは黙って知恵を借りたほうがいいかもしれない。

23話 玲乃様、助ける。(後書き)

ちよつと復活した感が と思っているのも自分だけ？ ともかく
これで次のステージに進めそうです。

24話 無理やり歓迎会、そして

わたしとアヤたんは頭を下げてお願いした。といっても、社長が家に来たときに父が見せた最敬礼と比較すると十分の一くらいの誠実さだったけど。

つづいて田澤も頭を下げた。この子の場合、あと三年でバカになるという現実、危機感を感じているわけではなくて、ただたんに他人に流されやすいだけのようだった。

「マチ子さん？」脈略なく玲乃様が言った。「これ、見える？」

なんのことかと面を上げる。手のひらを上に向け、なにかを持つような格好でこちらに腕を突き出している。玲乃様自体が西日を受けて輪郭がばやばやしているんだけど、少なくともわたしにはカラッポに見えた。

「そんなもん学校に持ってきていいの？」すかさずアヤたんが言った。「校則違反だよ。倫理的にもまちがってる」

「わたしはマチ子さんに聞いているの」ちびっ子はすっこんでなさいよ、とても言いたげな冷たい視線を向ける。「ちびっ子はすっこんでなさいよ」

実際に言った。アヤたんは顔を真っ赤にして口を開きかける。

「見えない」わたしは急いで言った。

「じゃあこれは？」

逆の手を向ける。

「見えない」

「なるほど」

玲乃様はうなずき、両手を後ろにひっこめた。しばらくごそごそやったあと、背筋をぴんと伸ばして向き直った。思い出したようにサツと前髪を払う。

「つまり、あなたたちはわたしの助けを求めているわけね。背に腹変えられず、恥を忍んで、転校生で立場が弱いはずのわたしに全員で頭を下げて」

約一名、下げていない者がいた。詳細は省くが某吉本ジュニアの若者だ。いまは中国人に脳を食べられているおサルスの真似をしている。言われなきやわからない程度のデキだったけど。

「あつ、やめて！　そこは海馬　ああダメ！　側頭葉はダメ！　そこ弱い。言語中枢が」

しまじろうが中国人家族に視床下部を食べられていると、玲乃様が言った。

「歓迎してよ」

「はあ？」わたしとアヤたんのハーモニー。「なにー？」

「だって転校生だもん」しれっと言う。

「あんた転校生じゃないよ」アヤたんが威嚇するようなダミ声で言った。「知ってるんだ。ちやほやされたいからという理由で毎日転校を繰り返して」

「転校初日って、不安でたまらないのよ？ みんな仲良くしてくれるのかな、意地悪されたりしないかな、友達はあるのかな、最初に友達になった子が真性レズビアンだったりしないかな、などなど」

ウソつけ。

「つまりなにが言いたいんだよ」田澤が言った。めずらしく男らしい。けど玲乃様にひとにらみされるとたんにしゅんとなった。

「ごめん」そして謝った。

「まあ、あなたたちの将来はつまり、わたしみたいに不安な転校生に対して思いやりを持って接することができるかどうかにかかっているってわけよ。ところであれ、したことないの。やってみたいなー」一同を見まわして言った。「ボウリング」

そんなわけで、わたしたちは不安におびえる転校生を元気づけるためにボウリングに繰り出した。総勢五名。レーンが空くまで三十分待った。今日も夕飯に間に合わなそうだ。そして母に怒られる。

変人高校にかよいはじめてから、わたしの株は一気に落ちてガムのように底にへばりついている状態だった。そしてわたしの汚名を返上するためには、なんとしてもわが高校を変革する必要があるのだ。

十三番レーンという西洋的には縁起の悪いところを割り当てられ、
ともかくにも無理やり新入生歓迎会がスタートした。

妙に静かなジャンケンをし、順番を決める。はじめはしまじろう
だった。

「勝ち負けにこだわんなよ、楽しもうぜ、遊びなんだから　そう
いう考えは嫌いだ。おれはいつだって、なにをするにも真剣なんだ」
いつのまにか正気に戻っている。放課後なので脳みそは働いてい
ないようだった。ご本人様と同じ真っ黒い十五ポンドのボールを軽
々と持ち、大きく腕を振り上げ、レーンド真ん中から剛速球をぶち
込んだ。

カコーン。ストライク。さすが運動部。

つづいて玲乃様。ブレザーを脱いでサツと立ち上がり、黄色いボ
ールに指をはめ、しなやかな動作で位置に着いた。首をひとふりす
るとキャラメルみたいな色の髪がシルキーに踊った。

カコーン。動作も優雅ならボールの軌道もエレガントだった。わ
ずかにカーブしながら九本倒した。端っこを一本残すあたりが人気
取りに余念のないお嬢らしいという気がした。

モデル歩きで戻ってくる。表情を見る限りは楽しいんだかどうか
判断がつかない。

「おわー、溝だー！」

アヤたんはいわゆる典型的な女の子投げで、とことこ進んでファウル直前で立ち止まり、両手でぼとつとボールを落つことし、そしてなぜか急いで戻ってきた。「溝だ溝だー!」

座席はたつぷり空いているのにわたしの膝の上にすわった。

「なにをそんなにかしこまってるんだ?」しまじろうがコーラの缶を煽ってから、わたしに言った。「背筋が打ち解けてないぞ。ぴたりと閉じた膝がよそよそしい雰囲気醸しているぞ」

「ふつうだよ」アヤたんを膝にのっけながら答える。ほんとにこれがふつうなのだ。この体勢以外にどうやってすわれというのか。文句なら母に言ってほしい。

「美しいじゃない」玲乃からフォローが入った。「まさに大和撫子ね?」

だらりと笑みを返す。よろこんでいいんだろうか。と、玲乃様は急にわたしの顔をのぞきこみ、なにかをつまんでぷらぷらするよう目の前で手を動かした。「ところでこれ、見える?」

「手しか見えない」

「なるほどね」

なんなんだ、いったい。

田澤がさりげなく九ポンドのボールを抱え、セットしている。だれにも注目されていないと言ったほうが正しいかもしれない。

ちらつと振り向く。じつに寂しげだった。

「忘れるな、おれのアドバイスを」しまじろうが倒置法で声を掛けた。「あえて敵に塩を送るぞ。まっすぐ投げるな。ピンを狙うな。あとは自分で考える」

たしかに田澤の能力なら、まっすぐ投げたらガターは確實。それどころかまちがってこっちのほうに飛んできてだれかの頭に直撃するかもしれない。さりげなくアヤさんの背後に隠れる。

田澤はどうするか決めかねていた。うーんという感じで足踏みし、またこっちへ振り向き、前を向き、よしとうなずいた。ゆっくり前進し、腕を振り上げ、そして隣のレーンに投げた。

ところで、隣のレーンには他校の男子生徒がいた。ちょっとお近づきになりたくない感じの男が六人ほど。だらしなくイスに寄りかかって、だれかが投げるたびに大げさな調子でゲラゲラ笑い合い、アメリカンなハイツタッチをしていた。なんとなくこっちを意識している様子だ。

田澤が投げるのとはほぼ同時に、チンピラ予備軍みたいな男が思いっきり振りかぶってボールを転がした。そして予想どおりというかなんというか、田澤が投げ入れたボールが横からタックルしてチンピラのボールをはじき飛ばし、そのまま溝に押し込んだ。田澤のボールは反動で自分のレーンに戻ってきてふらふらと蛇行し、スイートスポットから斜めに進入して見事なストライクを決めた。

カコーン。

「なめてんのか、おい」

さまにならないガッツポーズを決めている田澤を、チンピラが突き飛ばした。田澤は子鹿のようによろめき、あっさり床に倒れた。これも百二十パーセント予想とおり。

24話 無理やり歓迎会、そして (後書き)

なんかまとも？ まあ自分のことなので、このまままともにつづくとは思えないんですが。

25話 田澤、覚醒する

チンピラくんは田澤に一步、二歩と近づき、日陰をつくるように覆いかぶさった。

「どういづつもりなんですかー？」わざとらしい丁寧な口調で言った。そしていきなり喉の奥でうなるように威嚇する。「おまえ、殺すぞ。どこの高校よ？」

田澤の顔という顔がひきつっている。通常であれば動かせないはずの耳までひくひくと痙攣し、本体から逃げ出そうともがいていた。

いつもなら（というほど付き合ってもいないけど）男なのに情けないやつちゃ、でおしまいにするところだ。だけど相手は、たしかに怖すぎる。高校はわからないけどたぶん三年生だろう。邪悪な石川遼みたいなルックスで、体の大きさ以上に威圧感があって、体の隅々から非常によろしくない元気があふれ出している。

人殺し宣言をしたチンピラくんは「ふっ」と言って拳を振り下ろした。田澤はびくつとして顔を背ける。殴るふりだった。チンピラくんは冗談だよねんという感じで仲間に振り返った。ギャラリーは大爆笑。

最悪。

「おい、泣くなよー」

ギャラリーのひとりが田澤に声をかけた。憎くて憎くて、わたしは胸が悪くなった。ギャラリーその一の言ったとおり、田澤はいま

にも泣き出しそうだった。鼻水も出ていそうだったし、正規の手続きを踏んでチェックすればたぶん漏らしているはず。もう、情けなさすぎ。

すると、わたしの中でのなかが変化した。どろどろ渦巻く憎しみの奥から、きゅんきゅん締めつけられるような感情がわき起こってきた。膝の上のアヤたんを突き飛ばして助けに入りたい、アホの腰抜けを守ってあげたい。そんな気持ち。なんなのこれ。

「どこの高校ー？」邪悪な石川遼がわたしたちを見まわし、優しげに言った。「みんな、ちょっとあっちのほうで話さない？ トイレな？」

わたしを見て、ニヤリと笑った。仲間も次々に腰を上げ、扇状の席やボールリターンをまわりこんでゆつくりと近づいてくる。昔DVDで見たエイリアン2に似たような場面があったような気がする。これはヤバイ。もちろん、おいしいカレーを食べたときの「ヤバイ」とはちがう意味で。

「待て待て」

カレーつながりなのかどうか、しまじろうがすつくと立ち上がった。おお、男らしい。

「どこの高校だっていいだろ。あっち行ってくれよ」

「あ、やるつもり？」もみあげがやけに長い柔道部体型が言った。そして首をゆらゆら揺らしながら近づいてくる。「つーか、おまえらが先にケンカ売ってきたんだろっがっ」

しまじろうの手がちょっと震えている。わたしはそれを見て、ま
たも胸の奥がどろどろきゅんきゅんしはじめた。なぜか怖さはなか
った。ただただみんなが愛おしい。

「これ、見える？」

いきなり玲乃様言った。スコアが表示されているモニターを指
差す。それどころじゃないだろうと言いかけて二度見した。全員の
点数が消えている。

「見えない」

「あつそ」

なんなんだ。つづいて玲乃様は指先モデルみたいな手を伸ばして
しまじろうの袖に触れ、下にひっぱった。

「なんだ」しまじろうが振り返った。

「いいからすわって」鋭くささやく。「すわって、この状況を打開
する方法を考えるのよ」

考える？ ああ、ダメダメダメ。そんなことをしたら と、膝
の上のアヤたんがもそもそしながら反転し、くたつとわたしに寄り
かかってきた。

「どうかした？」わたしは聞いた。

「この絶望的な状況で少しでも安心したくて」

とくに意味はなさそうだ。しまじろうはしぶしぶといった感じで腰を下ろした。そして考えはじめた。それを見て、玲乃様は満足げに顎を上げ、立ち上がった。

田澤に声をかける。「こんな連中、あなたひとりでなんとかできるでしょ？」

顔をぐちゃぐちゃにしながら振り向く。ほんとうに鼻水を垂らしていた。少年マンガの主人公みたいだ。ただし一巻の、強くなる前の主人公。

はあ？ と口を開けて答えた。たしかに「はあ？」だ。玲乃様はなにを期待しているんだろう。十巻くらいまで連載がつづくのを待つつもりなのか。どう考えてもその前に読者投票の結果で連載打ち切りになるのは確実だった。

連中はすでにわたしたちの縄張りに入り込み、せまいところでごちゃごちゃとひしめき合っていた。ものすごい威圧感を感じるものの、まわりの目があるからかいまのところ暴力行為は起こっていない。隣に立った男がわたしの髪の毛に触れた。びくりとして顔を上げ、わたしはなぜかそいつに微笑みかけた。まるでだれかさんみたいだ。ひっぱたきたいのにわたしの顔はお愛想の笑みを浮かべている。

だれか助けて。

「思い出しなさい」玲乃様は命令口調で言い放った。「あなたは社会のテストで完璧な英語の回答をし、エロ本を買いに行つてはたまごクラブを買い、サッカーをしてはステイヴ・ナッシュバリのアシストを見せる。ずっとそうだった。なにをやってもうまくいかな

い。そんな人生を送ってきた。自分がイヤでイヤでたまらなかった
」

田澤のぐしゃぐしゃ顔が、モーフィングみたいに穏やかに変化していく。

「あなたはなんでもできるのよ。ただちょっとズレているだけ。だから自分を信じて、こいつらを蹴散らすにはどうすればいいかを考えないようにして考えるの」

最後のほうは複雑でよくわからなかったが、田澤は感じるころがあったらしかった。玲乃様の言葉を脳に染み込ませようとするように、なにごとかを口の中でつぶやいている。

「そう」そして遠くを見るような目でつぶやいた。「そうだ」
きわめてゆっくりと立ち上がる。妙な迫力めいたものを感じる。

石川遼が怯えたようにあとじさる。「なんなんだよ、おまえ」

田澤は石川選手を無視し、覚醒した主人公みたいなしぐさで肩越しに振り向いた。「そうじゃない」静かに繰り返す。「そうじゃないんだ」

「なにが？」玲乃様が聞いた。

「おれが買ったのは」

キッと敵に向き直る。

「たまごクラブだ」

25話 田澤、覚醒する（後書き）

まともすぎて苦戦しました。

26話 (気を)落とすんだ、小学生レベルまで！

メンター玲乃様の助言でいきなり覚醒した田澤は、ジャンプコミックスでいうといきなり十五巻くらいすっ飛ばして読みはじめたみたいだ。強者に進化していた。読者おいてけぼりのありえないオーラを身にまといっている。

「よくも」「奥歯をぎりぎり鳴らして敵を見上げる。つんつん髪が十センチくらい伸びて逆立っているように見えた。」「よくもを」

なにに対して怒られているのかよくわかっていない感じの石川遼選手は、顔を歪めて汗をたらりと垂らしながら一歩あとじさった。いま気づいたんだけど、相手の高校生はべつに某ゴルフ選手に似ているわけでもなかった。ただの高校生だ。わたしが比喻をミスっただけ。

ほかの連中も、無言でふたりの対決を見守っている。レーンみつ向こう側の親子連れまで試合を中断し、こちらを見守っている。

「よくも」

また言った。どうやら次の手を考えるために時間稼ぎをしているようだ。表情を変えないまま、目だけがなにかを探してせわしなく動いている。

だいじょうぶなんだろうか。

「なにやってるの。次に進んで」玲乃様が舞台監督のように声をか

けた。「相手方は待つてくれない。決めて。すぐに」

田澤はうろたえ、闘気が一瞬ひっこんだ。もとの弱っちい姿に戻ってきよろきよろしはじめる。相手もそれに気づいた。勢いを取り戻しつつある。

「あ」田澤が一点を見据える。「あれだ」

いきなり試合放棄して駆け出し、わたしたちの目の前をすり抜けて受付のほうへ向かった。カウンターに寄りかかり、受付の女の人と熱心に話し込んでいる。

緑色の帽子をかぶった女の人が嬉しそうに笑った。ナンパでもしているんだろうか。田澤の後頭部が大きく二回うなずいた。女の人に向かって右のほうを指さす。わたしたちは全員つられて思わずそちらに顔を向けた。

カコーン。みつつほど離れたレーンでちびっ子がストライクを取った。急いで駆け戻り、お母さんに抱きついて褒めてもらいたそうに見上げている。

女の人が腕を下げた。ふたたび田澤と話し込む。さっきの指差しはまったくなんの関係もないようだった。

お願いしますお願いしますという感じで田澤が頭を下げ、カウンターから離れた。そして近くのゲームスペースに駆け、台にすわり、弾幕系シューティングをはじめた。女の人を受話器を持ち上げ、だれかと電話している。

意味がわからなすぎて力が抜けたのか、連中は全員肩をだらりと

落とした。もっというならわたしたちもそうだった。

突然しまじろうが坊主頭をかきむしりはじめた。柔道部系の男がぎよっとして顔を向けた。

「なにか思いついたの？」玲乃様がささやいた。「もつとよ。もつと考えて」

「うー」喉の奥でうなる。「意味が」

「なに？」

「意味が分からない 田澤の行動」

「なぜあんなことを？ 親友なんでしょ？ なぜ？ なぜあんなことをしたんだと思う？」

「おおおお」「しまじろう火山が活動を開始しようとしている。
ぬおお」

「なるほど」アヤたんが言った。「理解した」

「なにを？」

「今度の週末付き合ってくれるなら教えてあげる」

目の前三センチのところで目をぱちぱちさせる。わたしはとりあえず態度を保留した。

「わかった！」しまじろうが叫んだ。「ひらめいた！」

わたしは思わず腰を浮かせて逃げようとした。

「なぜ？　なぜなの？」玲乃様がさらに煽る。

「トイレ」　しまじろうは歯の隙間からそんなセリフを吐き、柔道部をぎらぎらとにらみつけた。「トイレに行くかあ」

「ト、トイレ？」

「言っただろお」ゆらりと左右に頭を揺らす。「さっき言っただろお」

「トイレでなにを」

「それはだな！」もう辛抱たまらんと感じた感じで立ち上がる。「それはだなあ！」

「逃げよう」わたしはアヤたんにささやいた。「次の展開はわたしでも予想できる」

「おれがトイレでないと見せられないものを見せようとしているからだあ！」

アヤたんがうなずいた。玲乃嬢をチラッと見る。玲乃様はやけにアメリカな仕草でひょいと肩をすくめ、立ち上がった。連中のひとりを押しのけ、前に進み出る。

女の子三人でいそいそと現場を離れる。だれも追ってこない。

「これが　これが　「しまじろうがわなわな震えながら気を溜めている。」

「変人も使いようよ」玲乃様はわたしにささやいた。「これ、見える？」

「見えない」わたしは答えた。「って、さっきからいったいなんの話？」

お嬢はわたしを無視してカウンターに寄りかかり、受付に話しかけた。「ちなみにさっき、あの子となんの話をしてたの？」

「あの　トラブルに巻き込まれそうなので呼んでほしいと」

「警察を？」と玲乃様。

「これが　スーパーしまじろうの　」

「いえ、あの　「受付の女の人は口ごもり、小声でつぶけた。」バキュームカーを」

「ビッグバンアタックだあ！！！！」

そしてそのとおりのことが起こった。しまじろうはクレヨンしんちゃんみたいに尻を向け、そして　具体的な説明はかなり難しいしてきたとしても控えたいんだけど、とにかくしまじろうが放出したそれはビッグバンの名に恥じないあらゆる意味で超弩級の　。

まあいいや。とにかく逃げよう。

26話 (気を)落とすんだ、小学生レベルまで！(後書き)

まともじゃなくてホッとしました。せめて中学生レベルの思いつき
をしたい……。

27話 ここはどこ？ わたしは拒食症？

とりあえず男どもはほっという女の子三人で手に手を取り、ボウリング場の玄関を抜けて駐車場に飛び出した。

あとから受付の女の人も飛び出してきた。これで女の子四人。

「あー、上着がー」アヤたんが立ち止まり、うなった。「教科書がー」

「諦めなさい。どっちもどうせ必要ないんだから。それよりなるべく離れて」

と言った玲乃様がジョイナーも青ざめるスプリント力であつという間に駐車場を横断し、車の往来が激しい片側二車線の通りをノンストップで駆け抜けた。車が次々とブレーキをかけてはハンドルを切って歩道に乗り上げ、ついでに後ろから追突された。

アヤたんがわたしの手をとって走り出した。「まあ、少なくとも渡りやすくなっただけ」

ついでにいうと受付の女の人は綾^{うろ}さんといって、お狐様のなしゅっとした容姿で、ちょっとエルフっぽかった。印象的なウェーブのショートヘアからいまのに長い耳の先がひょこつとのぞいてきそうな感じ。話によると大学生で、今日はバイト三日目だったらしい。気の毒なことだ。

「うちも高校、二十世紀ヶ丘」へっへっと息を切らしながら走る。やわらかい関西弁だった。「姿勢いいね、あんた。いつもそんなふ

うに背筋を伸ばして走るん？」

「でしょー？」アヤたんが言った。こっちはベロを出してどたばたとみっともない。「あたしはうなじから背中の中のラインにかけてが好きで」

「巫女さんのバイト、紹介するよ。ここを無事生きて帰れたら」

おりょうさんが言った。アヤたんの目が輝いた。そういえばそんな予言をちらつとされたような気がする。

そんなことより無事にこの状況を切り抜けるのが先決だ。わたしたちは玉突き事故の現場を横切り、向こう側の歩道にジャンプして乗った。某セブンイレブンの駐車場でせいぜい息をつく。

車輪止めの石になぜか乗っていている玲乃様が、「受験生よ、大志を抱け！」みたいな感じで指さした。振り向く。ホームセンターが大型駐輪場みたいな外観の 二十世紀ケ丘ヤングボウル が、少しずつ膨張している。壁が湾曲し、よく目を凝らすと窓のガラスにひび割れが入っているのが見えた。わたしは目だけはいい。

「はあああああつ！！！！！」

鳥山明も裸足で逃げ出す気合いの入った叫び声がここまで聞こえてきた。声質からいうとしまじろうだ。やるならやるではやくやってほしい。

「うあー」

アヤたんが叫んだ。 二十世紀ケ丘ヤングボウル がお餅のよ

うにどんどん膨らんでいく。そして窓からは正体不明の光を発していた。

「はいっ！！！！！！」

しまじろの掛け声とともに、黄色い光が建物を飲み込んだ。まぶしすぎて目を開けていられない。ぶおっ！ という生理的な音がした。ぶおっ！ ぶおっ！ どうにも止まらない。おりょうさんがなにか念仏めいたものをつぶやいているが、大地を揺るがす爆屁音に耳がおかしくなっていたのでなにを言っているのか聞き取れなかった。ぶぶぶぶおっ！ ガラスの碎ける音、そしてずごくごくという崩落音。頼りの鼻も塞がれた。地獄を思わせる強烈な硫黄臭が漂い、あっという間に顔全体をすっぽりおおった。これを嗅ぐぐらいなら死んだほうがマシ。

そして無になった。

だれかがほっぺたを触った。わたしは自分の手のようなものを動かし、拒否した。非情な現実に戻りたくない、このまま暗闇でじっとしていたい。だけど手はわたしの逃避を許さなかった。逆のほっぺたを触り、うなじを触り、馬の尻尾をつまんでゆさゆさ揺らし、唇を指先でつつとなぞり、胸に触り、おなかに触り、お尻を触り、ふとももから足の裏にかけてマツサージしはじめた。わたしはどんな格好をしているんだろうか。

はいはい、戻ればいいんでしょ、戻れば。

薄目を開けると、天井がぼんやりと見えた。建物の中にいる。目を瞬かせ、状況を確認する。知らない家だ。洋風の居間で、わが家のリビングの五倍から七倍は豪華だった。天井扇がまわっている。

暖炉がある。マントルピースの上に写真立てが並んでいる。そしてわたしはソファの上に寝ていた。

ちなみに触っていたのは、言うまでもなくアヤたんだった。工作をこしらえる小学生みたいに熱心な顔で、わたしがかなり目を覚ましているにも関わらずべたべたと膝小僧あたりを探っている。

背もたれに乗っかっている頭を上げた。アヤたんはハッと顔を上げ、言い訳がましく笑みを浮かべた。

体に異常はなさそうだった。血も出ていない。ゆっくりと上体を起こし、言った。

「ここはどこ？」

一瞬の沈黙のあと、部屋にいる全員がいつせいに大爆笑した。全員とは、アヤちゃんと玲乃様と田澤としまじろうと元受付アルバイトのおりょうさんだ。つまり全員ってこと。

「ここは」

また言っと、爆笑の上に爆笑が重なってなんだかわからない状態になった。

「どこ？」

「うひゃひゃひゃひゃ」
「田澤がヘンな声を上げた。」「おい、金
よいせ」

しまじろうは粉塵まみれで、石膏像みたいにむっつりしていた。

ポケットから財布を取り出し、五百円を田澤に渡す。

どこでもよくなってきた。

「わたしの家よ」玲乃様が言った。真顔だったがまだ少し肩が震えている。「あなたを運ぶのは楽でいい。ほんと軽いんだから。現在三十七・二キロ。生命の危機に遭遇したせいで」

「ご飯食べてる？」おりょうさんが心配そうに言った。「もしかして拒食症とか」

「ボウリング場は？」わたしは無視してたずねた。「というか、あの高校生たちは」

聞いたら聞いたで今度は静まり返り、だれも答えない。玲乃様がテーブルのリモコンをつかみ、六十インチワイドテレビをつけた。

「えー、現在のところ原因はわかっておりません」レポーターが映った。しまじろうがふつと鼻を鳴らす。「現場はご覧のとおり、瓦礫の山です。えー、たいへんなにおいです！ 現在決死の救出作業がつづけられており」

瓦礫のところどころ、茶色くなっている部分にモザイクがかかっている。たぶんあれだ。

「と、いうわけ」玲乃様がテレビを消した。「だけどこれは重要じゃない」

「すげえ」田澤は興奮していた。しまじろうの肩に手をまわす。「こいつが破壊したんだぜ！ あのバカ不良もろとも！ かかってこ

いつてんだ！ おれも手伝ったよな？　　というかおれがきつかけと
なつて　　」

玲乃様がサツと手を振った。田澤は一気に口を閉じ、手を股間の
前に合わせておとなしくなった。

わたしは言った。「重要じゃないって？」

「新しいバイト先、見つけな」おりょうさんがぼんやりと云つ。「
んーこくさくないボウリング場」

「わたしはあなたたちを試したのよ。あのチンピラふうのエキスト
ラを雇つて」

「つまり　　」

「高校を変革するため、先生と対決するため。能力も使い方次第な
のよ。けどあなたたちはそれを知らず、自分を無力だと思い込ん
でいた。変人は偉人になれるのよ。あなたは　　」

と田澤を指さす。

「まったく脈略のないことをすればなんでもできると知った。あな
たは　　」そしてしまじろう。「考えることでバカになれる。アン
トニオ猪木と小学生を掛け合わせて一千倍に増幅したのに匹敵する
ほどのバカパワーを　　」

「なんのことだ、バカって？」

「そして名字のないちびっ子アヤ」アヤたんがほっぺたをふくらま

せた。「あなたは知ろうと思えばどんな人間の情報でも仕入れることができる。だけどあなたはマチ子さんのプライベートにこだわらず過ぎてほんとうの能力に気づいていない」

最後にわたしを見た。「マチ子さんは見えない」

とくに褒められもけなされもしなかった。つまり役立たずってこと？

「わたしが今日しつこく見せていたけど見えなかったもの、あれはなんだと思う？」

見えないんだからわかるわけがない。そしてまた手のひらを向けてきた。リカちゃん人形みたいなほっそりした手以外はなんにも見えない。

「そ、そんなものを持って」おりょうさんが驚愕した。「自分ら高校生やる？ うっわー」

「おれにもひとつくれよ」と田澤。

「いらん。人間がダメになる」としまじろう。

「仕切り屋」最後にアヤたんがぼそつと言った。

27話 ここはどこ？ わたしは拒食症？（後書き）

これからヘンテコ先生たちとの対決になるはず。そして戦いをつうじて各々が人間的に成長 しないな。たぶん。

28話 おれらの値段、アイスクリーム以下

玲乃様はわたしに向けていた手のひらを静かに握り、見えないなにかをポケットに押し込んだ。結局なんだったんだろう。あらためてぐるりと見まわし、静かな決意を感じさせる声で言った。

「敵に打ち勝つには、まず敵を知ること」

「敵って？」田澤が言った。

「二十世紀ヶ丘高校の先生全員。そして高校そのものを変革し」「ふと眉根を寄せ、瞬きした。「聞いてなかったの？」

「昨日のことは覚えてないぞ」しまじろうが胸を張った。

「敵って先生？　つまり先生と対決するってこと？」田澤が首をかしげる。「なんで？」

いらいらとかぶりを振る。「だから、わたしたちの将来のためよ。学校の方針は間違っている。このままではわたしたち全員、一人前の変人として教育され、世に送り出される。そして島の兄みたいな悲惨極まりない人生を送り事になるのよ。それでもいいの？」

みんな黙っている。

「これもだいぶ前に話した気がするんだけど」

「だいぶ前のことは覚えてないぞ」

「待つてよ。ていうかさ」田澤が自信たつぷりに遮った。「おれ、いまのままでいいよ」

「はあ？」玲乃様が小鼻を持ち上げ、いきなり声を張り上げた。ちよつとキヤラが変わってないだろうか。「あなた、戻りたいって言うてたじゃない！」

「まあね。でもおれ、なんでもできるってわかつちやったし。コツさえつかめばさ。きみが 名前、まだ聞いてないよね？ なんだつけ？ まあいいや。とにかくみに教わったとおりにすればいいんだってね。ていうか、学校なんて知るかよ。おれすげえ。マジ偉人。どうだまいったか。あいつら、さんざんおれをコケにしゃがつて。みんなそうだ。みんなとは他人のことね。他人なんか知らんもんね。自業自得だよ。なんとかしたきゃ、おれみたいに自分でなんとかすりゃいいんだ。いまさら助けてー、なんて、虫がよすぎる。なんでおれがわざわざ助けてやらなきゃならないんだよ。だろ？」

よく動く口でべらべらまくし立てる。たつたいつこの成功で自尊心の針がはるか向こうへ振り切れてしまったらしい。

「天狗になつたらあきまへんの？」

売れっ子時代のトミーズ雅ばりの傲慢さだ。ボウリング場で見せたヘタレな様子は微塵も感じられない。正直、腰抜けのときのほうがかわいかった。男ってどうしてこうなんだろう。

「おれはなんでもできる」しまじろうが親友の言葉に賛同するようにつに言った。いささかのうぬぼれも見せず、静かにうなづく。「おれはもう恐れない。あのとき、おれは知つたんだ。学んだよ。苦い経

験だった。だがおれは学んだんだ。脳は考えるためにあるということ。――

「ヒ　玲乃様は食い下がった。「ヒーローは孤独なのよ？　力を持つゆえにだれにも理解されない、っていう。あなたたちはまちがってる。なんならハンコックのDVDでも見ましょうか？　このフルハイビジョンの大型ワイドスクリーンで――」

わたしは不審に思った。なんでここまでして先生を打ち倒し、学校を変革したいと思うのか。言ってることは正しいし、わたしだって同じ気持ちだ。一日でもはやく、ふつうの高校にかよいたい。そしてふつうの教育でふつうの女の子に戻りたい。戻れるなら、わたしはなんだって協力するつもり。だけどあのお嬢の異常な熱意はただことではない。

なにかある。わたしは気を許さないことにした。

「ま、そういうわけだから」アヤたんが立ち上がった。ソファに登って内股で立ち、うろたえる玲乃様を冷ややかに見下ろす。「こんなお屋敷、庶民にはもったいないよ。一刻もはやく帰るべきだと思うな。身分がちがいすぎるっていうか。身の程わきまえて辞退するよ。じゃあ作戦がんばってね。あたしたちはうさぎ小屋に退散するから。マチ子さん、帰る。夕飯ご馳走しようか？　ちゅうどとーちやんの失業保険が振り込まれたから――」

わたしの手を取り、ぴょんとウサたんジャンプをして絨毯に降りた。そのまま強引に戸口へわたしをひきずっていく。田澤としまじろうも外人のように肩をすくめ、じゃーと言って玲乃様に背を向けた。

「なんやようわからんけど」

おりょうさんも立ち上がる。いよいよ玲乃様はひとりぼっちになった。わたしは思わず振り返った。なんだかわいそうじゃない？ せっかく能力の使い方を教えてやったのに手のひら返すようなこんな仕打ちを受けたら、あのお嬢だってちよつとくらいはうるってくるはず。

玲乃様は唇を噛み、うつむいて両の拳を握り締めていた。前髪が目を覆い隠しているので、泣いていたとしてもここからでは見えなかった。一瞬、いっしょにハンコックを見たくなった。

と、顔を上げた。表情は固かったが、少なくとも泣いてはいないようだった。まるでフラメンゴのダンサーみたいにサッと両腕を上げ、パンパンと手を叩いた。

「とう！」アヤたんが両開きのドアを蹴り開けた。ちよつと調子に乗りすぎ。「あー、なんかおなかすいたね。マック行きたい。みんなで行こっか？ 事件によって友情も深まったことだし」

振り返りつつべらべらと口を動かす。そして　どすんとぶつかった。

燕尾服に蝶ネクタイを来た何者かが行く手を塞いでいる。アヤたんがぐーっと見上げた。何者というか、もろに執事だった。白髪に白ひげのおじいさん。背が高くて、すばらしく無駄の感じられない立ち姿。そしてすばらしく気配が感じられなかった。

「なんだ？」しまじろうが気色ばんだ。「次の展開はこうか。おれらを屋敷に閉じ込め、うっかり殺人事件に巻き込ませる気だろ」

「ミステリーは嫌いなんだ。大嫌いだね」田澤がどうでもいいことを言った。「行こうぜ」

ところで執事は銀色のお盆を肩の上あたりに抱えていた。スプーンと小鉢が六つ乗っかっている。その中身は。

「ゴディバのアイスクリーム五点盛りよ」玲乃様が言った。「つまり、ひとりあたたま五点ぜんぶってことね。ストロベリーチョコレートチップ、ミルクチョコレートチップ、アイボリーチョコレートチップ、クラシックミルクチョコレート、ベルジアンダークチョコレート」

ここまで言えばじゅうぶんだった。「うおー！」

男どもが叫ぶ。アヤたんはうれしさと苦々しさとでふたつに細胞分裂しそうな顔をしている。小声でこっそり言った。「うお」

「ただし、わたしに協力してくれたらだけど」

「聞く！　そして食う！」

どやどやと戻ってテーブルの前に腰を下ろす。やっすいなあ、この子ら。まあ自分もだけど。

アホな五人兄弟みたいに目を輝かせ、執事を見上げる。おじいさんは幽霊のように音もなく絨毯をすべり、一点の無駄もない動作でアイスクリーム五点盛りの鉢を配っていった。

「じゅっくり」

あつという間にいなくなった。静かに扉が閉まる。

「明治エッセルスーパーカップが関の山の庶民としては」

おりょうさんは早速スプーンを取り、舌を出しつつ迷いスプーンをしている。クラシックミルクチョコレートをひと刺しした。

「うまー！」声をひっくり返して叫ぶ。そしてお約束の解説。「んーこれはいわゆるひとつの、じょーひーんな口溶けに深く芳醇な力カオの香りが」

それを合図に兄弟全員辛抱たまらなくなり、各自アイスクリームに食らいついた。アヤたんは苦虫顔でちよろつとすくってはなめめしていたが、五秒後にはあつさり欲望に負け、かぶりつきでわしゃわしゃと口に運びはじめた。

わたしはアヤたんのほっぺについたチョコチップを指で取ってあげ、スプーンを持ち上げ、玲乃様を見上げた。いつもの冷たい表情に戻っている。腕を組み、娘息子がおいしそうに食べるさまを満足げに見下ろしている。ふたたび主導権を握られたようだ。

わたしはどうすればいいのかわからず、スプーンを下ろした。理由をはっきり言うことはできないけど、わたしの勘ではこれは悪魔の契約となりうるかもしれない。このまま食べてもいいのか、それとも。

意を決し、玲乃様に質問した。

「ひとつ聞いていい？」

「食べないの？」指差す。

「食べる前に知っておきたいの」

「なにを知りたいの？ マチ子さん」

わたしは自分の鉢を見下ろして言った。「中身がカラッポに見えるんだけど」

28話 おれらの値段、アイスクリーム以下（後書き）

ちゃんちゃん という話でした。次からは妥当高校！ の作戦に移りたいもんです。

29話 作戦開始！

は明日で

「なぜ見えないのかわかる？　これが結束の象徴だからよ」

「ゴディバのアイスが？」

「以前、あなたの能力についてヒントを与えたでしょう。その場で見えてほしいものが見えないんだ、って。しばらくぶりすぎて覚えてない？　いまあなたは目の前のアイスクリームが見えていない。ということはつまり、わたしたちは結束すべきなんだって、暗にあなたはそう言いたいだよ。そしてあなたが見えないものはいつも正しい」

たいへん強引な気がする。というより、食べただけなんだけど。わたしはスプーンの先を、なにもない鉢にゆつくりと差し入れた。なにかに触れた。おなじみのミルクィかつさくつとした感触だ。この感触にはまちがいに身に覚えがある。

ちよつと迷ったけど、わたしは結局パントマイムをすることにした。ひとくちぶんであろうはずのアイスをすくい、スプーンを平行に保ちつつ口に近づける。いつも以上にアーンと口を開け、戦闘機を宇宙船に格納する。

戦闘機は母艦「わたし」に拍手喝采で迎えられた。パイロットは肩車をされ、みんなに手を振っている。そしていつのまにか先勝記念のパレードがはじまった。

「またそんなお上品に食っちゃって」アヤたんが横から口を出した。「だれに気を使ってんのって感じ」

そういうあなたはもう少し気を使っても罰は当たらないんじゃないか。

「がつがついきなよ。みんな友達になったんだからさあ。というより戦友かな。これからみんなで作戦を実行し、勝利を勝ち取るわけなので」

どうやら玲乃様の洗脳はあらかた完了したようだった。つまり見えないのは、友達としてともに苦楽をわかち合うべきだかららしい。消火器は正しかった。今度はどうなんだろう。

「じゃ、本題ね」玲乃様が言った。「敵に打ち勝つにはまず敵を知ること。基本中の基本ね」

「具体的には？」田澤が言った。

「それはマチ子さん次第」わたしを見る。「わたしたちは次の作戦を実行するにあたり、敵を知る必要が出てきた。作戦遂行にはなにが必要？」

「敵を知る」

わたしはつぶやいた。何味の部分だかわからないがアイスをひとつとすくいし、口に運ぶ。気づくと全員がわたしに注目していた。

「わひゃひがひめへいいいほ？」

「一度に口に入れすぎ」玲乃様が冷やかに注意する。「そして次にどうすべきかは、あなたにしか決められない」

「そう　えーと」わたしは口からスプーンを引き抜き、考えてみた。「敵の実体を知るんだから、たとえば　盗聴装置一式とか

」

「盗聴器ならここにあるぞ」

しまじろうがズボンのポケットに手をつっこみ、おもむろになにかを取り出した。

「おれの兄ちゃん盗聴好きなんだ。その手のアングラ装置は一式そろってる」

「たまたまポケットに入ってたってわけ？」

「そう。用意いいだろ。都合がいいっていつか」

「ほかには？」と玲乃様。

「ほかには　音だけじゃなくて映像もあれば。だって、もしかして決定的瞬間を盗撮したら　」

「ゆすれるな」田澤がわたしの言葉を引き継いだ。

「なるほどね。カメラならちょうどそこに」玲乃様が部屋の隅を指さす。「天井付近のかどっこに監視カメラが。マチ子さんには見えないでしょうけど」

見えなかった。「じゃあつまり、先生の様子を探るために盗聴器と監視カメラを仕掛けるんだ？」

玲乃様はふつと息を吐き出し、ひとつうなずいた。そして景気づけのようにパンと手を叩いた。

「じゃあ、明日決行ということで。今日はゆっくり寝て。わたしも転校するまでにすることがあるから、今日のところはこれで」

全員がうなずいた。と、おりょうさんがひとり取り残されたようにきよろきよろした。

「ウチは？ なにするん？」

29話 作戦開始！

は明日で（後書き）

ひっぱりすぎ！ すぐ展開して！ あと飲みすぎ！（自分に）

30話 リモートアヤたん、やる気なし。

翌日、わたしたちはさっそく作戦を開始した。内容はそんなに複雑じゃなくて、ようはたかったりゆすったりするネタを仕入れるために職員室に盗聴器を仕掛けるというだけのこと。そしてボロを出した先生から順にやつつけていく。作戦は複雑じゃないけど、そのぶんデンジャラスだ。そしてインモラル。そのへんに関してはわれらがリーダー玲乃様に聞いてもらいたい。

重責を担うのはアヤたん。なぜかというと、ジャンケンに負けたから。あの子はほんとうに、ビックリするほどジャンケンに弱い。

「最初はグー！ ジャンケンはい」

昨日の帰り際、「ていうかだれが仕掛けるの」という話になり、数分後にはこんな感じでジャンケン大会になった。当然このようなデンジャーな任務はだれも負いたくない。ジャンケンの前、自然な流れで盗聴器の所有者であるしまじろうが設置すべきだという話で落ち着きかけた。というか落ち着かせようとした。しまじろうは顔色ひとつ変えず、非常に説得力のある反証を展開した。いわく、所有者は厳密に言つと兄である、それに自分は背が大きくガタイもいいで隠密行動には向かないだろう。たしかに。そしてジャンケン大会に持ち込みたくないみんなはごく自然にほかのターゲットを探した。

田澤はすでにアホの烙印を先生方からいただきつつあったので、職員室にいる時点で不審がられるだろうと自ら言った。そして設置は女子がやるべきだと付け加えた。それから二十分ほど、女スパイの有用性を必死な様子でわたしたちに説いた。うっとおしくなつて

きたので田澤は無罪放免になった。

「それに仕掛け方も知らないしね」

「はいはい」とアヤたん。あなたも女子のひとりなんだけど。「あたしは当然ダメね。だって情報専門だから。それにぶきつちよだし。箸も使えないくらいね。ご飯はいつも先割れスプーン」

そして玲乃様をのぞきこむ。

「というか、あんたがやりなよ。まずはじめにリーダーらしいところを見せればいいじゃん。チームからの信頼も得られるし」

「リーダーが自分で行動したら、そもそもチームなんていらんじやない。でしょ？」お嬢はムキになって反論した。結局やりたくないだけだろう。「マチ子さんは？」

「は？ わたし？」

わたしはそれだけしか言えなかった。唯一まともな反論ができなかったので、イヤな流れがわたしに傾きつつあった。

「どう思う？ チームのために一肌脱ぐ気は？」

「えーと」「このままではまずいので、反発覚悟で提案した。」「ジャンケンで決めない？」

というわけでわたしの意見がとおり、公平にジャンケンで決めることになった。最初はグー、とやるわけだけど、必ずだれかがパーを出して妨害した。「あーうそうぞ。もうやんない、もうやんない」

とか言いながら、結局毎回だれかがパーを出しつつけた。小学生でもここまでしつこくやらないだろうという状況がつづく。あの豪華なりビングで、二時間はジャンケンをつづけていた気がする。わたしもどさくさ紛れでやった。だって、授業を抜け出して職員室の各デスクに盗聴器を仕掛けてまわるなんてごめんこうむりたいじゃないか。もし見つかったら停学まちがいなしだし、わたしの場合は家にも居場所がなくなるはずだし、それにこのメンバーなら、万が一の状況に陥った際は全員確実にしらばっくれるだろうという確信があった。

ジャンケン開始から二時間十分後、みんなはようやく大人になった。

「ほえー」アヤたんがひとりだけチョキを出した。みんなはグー。

「また負けたー」

これで三十七連敗だった。

「もっかいお願い！ おねがいおねがいおねがい。もっかいだけ

ー

それから五十四連敗し、さすがのアヤたんもようやく観念した。

これからは困ったことがあったらジャンケンして決めよう。

そんなわけで、わたしたちは化学の実験室で携帯電話を片手に作戦実行のときを待った。

「おう、おなかが痛いぞー」

打ち合わせどおり、アヤたんが言った。だけど残念ながらひとり

ごとすぎて化学の先生には届いていなかった。ちなみに化学の先生は峰という名前で、比較的ふつうの先生に見えた。だけどアヤさんに言わせるとそうでもないらしかった。

「先生はテストの問題と回答をすっかり漏らしてしまうという能力の持ち主なの」アヤたんが解説した。「だから生徒からは人気があるの。ふじこちゃんとか呼ばれて。まあ見てのとおりおばさんだけれどね。だけど真の能力はほかにあって」

「それよりも作戦でしょ？」わたしは腕をつついて言った。「おなかが痛くなるんでしょう？ とある理由で」

「おなかがー」と言いかけ、期待かなにかで目を輝かせつつわたしを見た。「もっかいつついて」

つついた。

「おなかがいたーい！」大声を上げる。「うおー、こいつは辛抱たまらない」

おばさんパーマの峰先生が気づいた。板書していたところで振り返り、アヤたんを見て目をまんまるにする。「あら、まあ！ だいじょうぶ？」

「いいえ。というわけでちよっくらトイレに」

立ち上がると、先生がストップをかけた。

「でも、これからガスバーナーを使うのよ？ マグネシウムの燃焼を実験するの。ぶわーって燃え上がるのよ、マグネシウムリボンが。

見たくない？」

「見たいなー。できれば見たいんですけど、ぼんぼんのほうが緊急事態で。でもだいじょうぶ。家に帰ったらユーチューブで見えるんで」

「あら、それは残念。でもこれ、テストに出るのよ？」

作戦と関係のないクラスメイトが一気に色めきだった。「具体的にどういう問いですかー？」だれかが言った。

「ダメダメ。言えるわけないでしょ？ 言っちゃったらテストにならない」

「いいじゃん。教えてよ、ふじこちゃん」

「問いのいくつー？」

「じゃあこれだけ。問いの二で出題しますよ。問題は『反応後の白色の固体はなんというでしょう』 じゃない。ダメ。これ以上は教えられません。残念だけど」

「答えはー？」

「いいかげんにしなさいよ、みんな。自分で勉強して、自分の力で酸化マグネシウムですって答えなきゃ」

ハツと口を抑える。気づいたときにはすでに遅く、全員ノートに答えをメモリ済みだった。能力がどうというか、ただのうっかりおばさんだ。

わたしはぼーっとつつ立っているアヤたんをもう一度つついた。

「いやん」体をくねらせてうれしそうに反応する（化学だけに）。

「なに？ 誘ってるの？」

「行きなよ」無視してささやいた。「この混乱に乗じて」

斜向かいのテーブルで、玲乃様が頼杖をついている。やる気なさそうなのは態度だけで、さっきからこつちをチラ見してはイラついた表情で口を動かした。

「リーダーも怒ってるよ」

「へーい」

アヤたんはしぶしぶ実験室をあとにする。結局、はじめから許可を得る必要はないようだった。クラスメイトは次々にテストの問いと答えをたずねまくり、峰先生は「こら、いいかげんにしなさい。教えるわけがないでしょ？」と言った次のセリフでぜんぶテスト内容をバラすもんだからよけいみんな調子に乗ってすでに収集がつかない状況に陥っていた。

わたしは堂々と携帯電話をのぞいた。じつはアヤたんのブレザーには小型カメラと双方向に通信可能なマイクがセットされていて、各自の携帯電話から様子をうかがうことができるのだ。そんなハイテクをだれが仕込んだのかというと、話が長くなるのでまたあとで。

教わったとおりに携帯電話の画面を切り替え、アヤたんの一人称視点にする。アヤたんは廊下を歩いている。酔っ払いみたいにふらふらしている。わたしは玲乃様に目を向けた。同じように画面に目

を落としている。しまじろうは腕を組んでむっつりと前を向いていた。自分の携帯を持っていないのだった。

田澤は机の影でDSをプレイしていた。自分で言うくらいなのだから、ほんとのアホなんだろう。わたしは先生の目を盗んで消しゴムを投げ、真面目にやれと口を動かした。田澤はうれしそうにうなずいた。パタンと閉じて携帯電話をいじくり出す。

わたしは画面に目を戻した。アヤたんは相変わらずのろのろらふらしている。マイペースに寄り道しつつ、小声で鼻歌を歌っている。どうやらディルアングレイのニューシングルのようだ。

アヤたんEYEが立ち止まり、ついに職員室内部を捕らえた。閑散としている。

30話 リモートアヤたん、やる気なし。(後書き)

昨日のぶんを取り返す！ 明日はさらに気合いを入れて、やる気のないアヤたんを書きます。

31話 後で後悔、お腹が腹痛

授業中の職員室を見たのはほとんどはじめてだったけど、ほんとに活がない。もちろん授業に出ている先生が多いから、というのもあるだろう。わたしがアヤたんEYEをとおして見たときに思ったのは、休み時間に忙しくしているのは「まじめにやってみて自分ら」というアピールをわたしたち生徒にするためなんじゃないかということだった。

アヤたんは相変わらず緊張感のない歩き方でふらふら内部に侵入し、三往復くらいカメラを横に揺らし、それからさりげなく近場の机に近づいてカメラをピタッと設置した。すごい、まともに任務を遂行している。

ところで実験室はさんざんな状況だった。ふじこちゃん先生はすでに三学期の期末テストまで全問「うっかり」と教えてしまっていた。もう用なしだろうし、実際に生徒もまったく管理できていない。クラスメイトも調子に乗りすぎた。先生が辛抱たまらず逃げ出そうとするとだれかが「念動力」かなにかを使って実験室のドアをぴしやりと閉め、べつの生徒がピンポン玉のいっぱい詰まったバケツを先生の頭上に出現させて仕掛けが作動していないのにバケツを引っこり返してピンポン玉を強制的に降らし、またべつのは「教師が手を出せないのをいいことに暴力行為に走る生徒」の能力で先生につつかかっていっていいよ本格的に泣かし　とにかくいちいち説明するのもめんどくさくなるほどのケイオスぶりだった。先生はアホだけと確実にかわいそうだったし、罪もなにもない。わたしは学校を変革するのだという玲乃様の口車に乗ってしまったわけだけど、この現状を見るにつれ、疑問が浮かんできた。

ほんとに敵は学校なんだろうか。

「ちゃんとチェックして！」玲乃様が女子バスケット部の先輩みたいに鋭く注意した。鋭く注意できるほど実験室は混乱している。「あの子の目になって。このカメラは双方向だから、無防備な体制で事務員の先生とかが近づいてきたら注意するの」

わたしは条件反射でうなずき、携帯電話をのぞきこんだ。アヤたんは余裕でいつこずつカメラを設置している。みつめをつけ終わると、ベロを出しながらバッグに手をつつこんで次のカメラをこそそやっている。バッグを抱えた生徒が授業中に職員室でふらふらしているのに、だれも注意しにこない。

「無防備すぎて不審に思われないのよ」

と玲乃様。そんなもんなのか。

「あの子は適任なの。だから選んだ」

「ジャンケンで負けたからでしょ？」

「あの子がなぜ注意されないのかわかる？ 自分を持っていないからよ。いつも他人のことばかり嗅ぎまわって、情報を集めて、そしていつしか自分がいなくなった」

わたしはふたたび画面を見た。3D酔いしそうなアヤたんEYEで職員室を見ているうちに、一瞬アヤたんと同化したような錯覚を覚えた。「あなたがわたしにくれたもの」とジッタリンジンの鼻歌を歌いながら、小型カメラを片手に奥へ進む。がくつと腰をおろし、よつつめを設置した。先生が目の前に十センチのところす

わっていたんだけど、なぜか気にされない。空気みたいな存在だった。

わたしはなんだかさみしい気持ちになってきた。ふだんあれだけボディタッチが多いのも、もしかしたら本人がよくこのことをわかっているからなのかもしれない。すでに休憩時間よりやかましくなっている実験室内を見まわす。帰ってきたらちよつと優しくしてあげよう　わたしは思った。

しまじろうは桂馬の位置にあるテーブルで、仏像みたいにじつと腕組みをしながら目を閉じている。苦しそうに一瞬眉をぴくつと動かしした。同じ高校一年生として、この現状を恥じているんだろう。それがクラスの現状についてなのか、それとも自分だけ携帯電話を持っていないことについてなのか、そこまではわたしにはわからなかった。

田澤は現状とDSの両方を楽しんでいた。きつとあとでお嬢のお叱りを受けるだろう。

「はい、ちよつとそこどいてくれます？」

おじさん先生がすわるイスの背もたれをつかみ、ずるずると後ろに引いた。それでも先生は気にしない。振り向きもせずに愛妻弁当をひたすら口に運んでいる。

ぺたつとくつつける。裏につけるのがめんどくさくなったのか、机のど真ん前に置いた。

「どーもー」

「だいじょうぶ？」わたしは思わず声をかけた。「あといくつ残ってる？」

「ザー」アヤたんが言った。「ザーザーザー」

「なにそれ」

「ノイズ」

「なにそれ」

「あと残りは、ひーふーみーよー」アヤたんのカウントする手がカメラにあらわれた。「たくさん」

「様子はどうだ」

しまじろうがふつうに席を立ててやってきた。来いと手を振り、田澤も呼び寄せる。そして玲乃様も。わたしは新しいゲームを買った小学生みたいにみんなに囲まれた。全員でわたしの携帯電話をのぞきこむ。

なんて緊張感のない作戦。

「あといくつなの？ はやくして」

玲乃様が言った。アヤたんはザーとも言わない。

「きつとマチ子さんの声しか聞こえないのよ」「無理やり納得するよ」に言う。「はやくするように伝えて」

無視してるだけだと思っけど。

「お」

とアヤたん。立ち止まった。視界がきょろきょろと動く。わたしたちは同時に画面に顔を近づけた。

「メーデー、メーデー。あーやば」鋭くささやく。「ザー」

ザーと口で言ったあと、ほんとにザーとなった。砂嵐になった画面に全員がかぶりつく。

「アヤたん？ どうしたの？」

わたしは呼びかけた。反応がない。「どうしたの？ わたししかないから安心して話して」

脳裏になにかがひらめき、わたしは口ごもった。砂嵐になる直前、画面の向かって右端に映った女の顔。見覚えがある。黒髪で鬼太郎みたいに片目が隠れた、面長で妖艶で独身で行き遅れ感の漂う顔だ。

なんだっけ？ 日本に来日するみたいな名前の女教師。

思い出した。

「御御坂」

「だれそれ？」

田澤がゲームしながら聞いた。わたしは答えず、砂嵐を見る。

緊張感が出てきた。

31話 後で後悔、お腹が腹痛（後書き）

なんか救出劇になってきました。しかも救出すべき理由をすっかり提示しているし（そのつもり）。上々じゃないでしょうか。そうでもないか。

32話 危険が危ない！ 友情パワーみたいな力で内申急降下の巻

「諦めましょう。任務に犠牲はつきものよ」

玲乃様が立ち上がり、いきなり言った。

わたしはおずおずと反論した。「まだ捕まったと決まったわけじゃ
」

「いいえ。いまごろ本部に連行されて拷問を受けているはず。
いい？ あなたたちも捕まった場合はなにを聞かれても『記憶にござ
いません』と言っのよ」

メンバーを見まわす。しまじろうは神妙にうなずき、田澤は「あ
ー！」と声を上げながら頭をかき、DSをほうり投げた。残機がゼ
ロになったらしい。

最後にわたしをじっと見つめる。意味ありげに目を細め、リップ
塗りたてのうるうる唇を開いた。

「個人的にどんな関係にあるのかはあえて聞かないけど、あなたも
状況によつては非情に徹しなきゃね。チームが最優先、個人的な感
情は二の次よ」

「アヤたんを見捨てるってこと？」

「そうは言っていない。わたしが言いたいのリーダーとしての苦し
い立場よ。ま、とにかく手遅れね。諦めて先に進みましょう。こう
いう状況ではあれこれ考えてもしかたないわけで」

玲乃様はくるりと振り返って混乱状態の教室を見まわし、指先で唇に触れながらなにやら考え込んだ。手串でパツと髪を持ち上げ、すたすたと歩き出しす。そしてなにをするつもりかと思えば、クラスの連中をリクルートしはじめた。なんて薄情な女だ。わたしはセクシーな背中とお尻をにらみつけた。

「なんとかなるはずだ」

しまじろうがつぶやいた。「なにかいい考えがあるはずだ　あ、もう少しいつきそう　」

「ダメ！」わたしは条件反射的にしまじろうの思考を遮った。「考えちゃダメ」

「どうしてだ？　じゃあおまえはこのまま見殺しにしろと、つまりそう言いたいのか？」真正面から見つめられ、厳しく問い詰められる。「そんな薄情な女だとは思わなかったぞ」

そうじゃなくて。

玲乃様は身振り手振りを交えながら、だれかと交渉をしている。わたしは少し横にずれ、のぞきこんだ。相手はいなかった。というか、見えないんだろう。たぶん。またしても。

ふとひらめいた。見えないってことは、重要だってこと。ということは、あのお嬢にとってわたしたちじゃなくてもだれでもいいっていう　。

携帯電話が震えた。ささやく声。「マチ子さん　」

わたしはかぶりついた。アヤたん？ 助けを求めているのだろうか。でも残念ながら、声はアヤたんのものではなかった。

「先日はごちそうさまー」ちがう。この声はゲゲゲの女房の孫娘、行き遅れビッチの御御坂だ。「調子はどう？ まだヒリヒリしてる？」

答えようとして口を開きかける。

「そうそう。あなたたちの作戦はすべてお見とおしよ。だってわたしは先生だもの。生徒が勝てるわけないでしょ？」ほんの少し威嚇の色がこもった。「わたしはいい先生なの。なぜアヤたんに気づいたか。わたしはだれにも気にかけるられない生徒に気づくことができる。ものが見えていない生徒に大事ななにかを見せることだってできる。バカなADD持ちの生徒にもめげずに接することができる。なにをやってもうまくできない生徒に人生の目標を与えることだってできる。そして」

いったん言葉を切った。画面の砂嵐がじょじょに薄れていき、見覚えのある女の顔が浮かび上がってきた。

「転校生を落ち着かせ、悩みを聞き、学校になじませることもできるのよ。いい？ だれもわたしの体重は当てられない。わたしにかかればあなたたちはただの高校生なの。あなたたちは見えていない。あの万年転校生がどんな裏の意図を持ち、あなたたちをけしかけ、学校を変革しようとしたのかを。あなたたちはみな騙されている。はやくそれに気づくことね。危ない橋を渡っているのよ」

わたしは声が出ない。そして画像は完全に地上デジタル化が完了

し、数日前にわたしを手箒めにしたあの顔がドアップで表示された。

「ま、あなたはかわいいから許しちゃうけど。またイイことしない？ 悪いようにはしないから。今回のことは忘れてあげる。見返りがほしいんでしょう？ だから考えてみて、よきにはからって、みないな感じで」

無駄に言葉を尽くしているが、つまりまわりくどい寝返りのお誘いをしているのだ。この女がなにを考えているのかはわからないけど、いうことをきけば今回のおイタは忘れて今後三年間の高校生活は保証してあげる、ということだろう。わたしだけ。

玲乃様を見る。こちらもなにを考えているのかわからない。勧誘している相手が見えないのと同じ。

「停学になれば内申にも響くでしょうね。ま、気にしない大学があればいいんだけど」

さらに追い打ちをかけてくる。と、画像が乱れた。

「たす」

切れた。

「ほらほら、慌てないの。おとなしくしてなさい」御御坂が猫なで声で言った。「あなたはマチ子さんをおびき寄せるエサなのよ。三人プレイでなきゃただのお荷物なんだから。マチ子さんが来たら、ふたり同時にたっぷりかわいがってあげるから」

企みをぜんぶ話した。アニメのアホな悪役みたいだ。

「たすけてー」

なにをどうやっているのか、アヤたんはビッチ画像にねじこむようにエマーゼンシーコールを送ってくる。人質として縛り上げられているわけではないはずだけど、声はじゅうぶん苦しそうだった。

「アヤたん
」

やっと声が出た。だけどほかに言うべきことが思いつかない。携帯電話に映る御御坂を見、そして授業を放棄しぼんやりと教卓にすわっているふじこちゃん先生を見た。わたしたちはなにをしようとしているのか。もともとわからない感はあるんだけど、よけいにわからなくなってきた。変人を育てる高校で三年間、いまより立派な変人になって社会に巣立つ。それはまったく疑いようもなくまちがいないようだった。だけどほんとにそうなのだろうか。わたしだって他のみんなだって、言われるとおりに教わるとはかぎらないのだ。考える頭を持っているのだから。ふじこちゃんを見よ。完全に思惑がはずれているじゃないか。

ええじゃないか。このままでいいのかもしれない。つまり、平成の開国なんかしなくてもええじゃないかええじゃないかええじゃないかと。

「たすけてくれー」アヤたんの声。そしていきなり笑い出した。「うひゃひゃひゃひゃ！これはたまらん　お願い　もうやめて　マチ子さん大好き　うひゃひゃひゃ　」

わたしはうなだれ、両手で耳をふさいだ。これ以上聞いていられない。学校に反抗したばっかにアヤたんを失うことになるなんて。

残念だけどわたしにはなににもできない。

と、しまじろうがわたしの肩に触れて言った。

「いい感じのこと言ってもいいか」

振り向いて大仏顔を見上げる。よくわからないがうなずき、先をうながした。

「やつらは知らない。高校生は内申よりも友情を重んじる、ということ。」「苦しそうにうつむき、ぶるぶると震えはじめた。男の怒りが爆発しそうな感じた。」「それがやつらの誤算さ。生徒だって先生を倒せるんだ。ぜったいに許さんぞきさまら。やつらはおれを怒らせた。私の戦闘力は53万です。」「

少年マンガ的なセリフを立てつつけに並べる。そしていきなり田澤の背中を殴りつけた。

「クリリンのことが!」

「なんだよ。なに言ってるんだよ」半分寝ていた田澤が顔を上げる。
「ところでいますごい夢を見てた。ツイなんとかでつぶやいていい?」

「助けに行くんだ。友情パワーみたいな力でな。だいじょうぶ、おれたちならできる。できるさ」完全に世界に入っている。「できるったらできるんだ。ということでもみんな集まれ。ちようどおれにいい考えが。」「

32話 危険が危ない！ 友情パワーみたいな力で内申急降下 の巻（後書き）

明日はヒマなので、全体の流れをしっかりと考えます。まあ、それなりに。

33話 死ぬんじゃない、爆発するんだ

「おれにいい考えが」

わたしと田澤が同時にしまじろうを押さえこむ。わたしの体は本能で危険を察知し、気づいたときにはしまじろうのみぞおちにこぶしをねじこみ、相手がうげつと言って上体を折り曲げたところを背後にすばやくまわりこんで腕を取り、ひじをキメてねじり上げ、後頭部をつかんで実験室の黒いテーブルに横っ面を叩きつけた。

田澤はかなり遅れてから両手をわたわたやっていたが、しまじろうが拘束されているのを見ると決まり悪そうに腕を下ろした。わたしを見る目は複雑だった。恐ろしがつているような、尊敬しているような。

「それ、なんて宗派？」

「ただの護身術」

去年ちよつとした反抗期があつて、わたしは護身術の授業と剣道部と公文式を一気にやめた。理由なんてわからない。ただただイヤになったのだ。同級生といるとひとり姿勢がいいのがバカみたいに思えてきたし、先生には褒められるし、なによりいい子だと誤解されるのが我慢ならなかったんだと思う。もうウンザリ。母の教えも、道も わたしは一時期留学を考えるほど和の心を憎んでいた。いまも好きじゃない。だからいまはなるべくだらしなくなるうと、将来的に背骨が曲がりそうな姿勢で床にひじをつけてテレビを見たり、迷い箸をしたり、畳の上をスリッパで歩きまわったりしている。

護身術は久々だったが、体が覚えているようだ。つかんだ手首を肩甲骨のほうへ持ち上げる。しまじろうは悲鳴を上げた。田澤はじつにうれしそうに口の両端を持ち上げ、妖精めいた笑みを浮かべた。

「かけーな。免許皆伝じゃん。今度おれに教えてよ」

「教えてすぐできるもんじゃないよ」

「いいじゃん。弟子入りさせてよ。おれ金曜の放課後、ちょうどヒマなんだよね」

「あなたには」

無理だよ、と言いかけ、わたしは口ごもった。聞きようによつてはなんらかのお誘いのようにも取れる。

さりげなく田澤をのぞきこむ。ん？ と眉を上げて見返してきた。どうやら言葉どおりの意味らしい。たしかに、こいつにそんな心理戦ができるわけないのだ。まあいいや。

そんなわけでもしまじろうを考えさせないことに成功し難を逃れたわたしたちは、アヤたん救出にあたってもう少し穏便においも少ない方法を考えることにした。

わたしたち三人は神妙な顔で携帯電話を見下ろした。画面にはなにも映っていないかった。ときおりアヤたんの苦しみに満ちた叫び声がノイズ混じりに聞こえてくる。

「うひゃひゃひゃひゃ！ ダメダメ、そこはダメ あたし弱いの。女の子ならだれだって ううううーおう！」

「停学確定だな」しまじろうが負傷した肩を押さえつつ言った。「盗聴器をセツトしようとしたんだ。全国二ユースものだろ」

停学。ものすごいリアルな言葉を耳にして、わたしは現実世界に引き戻されたような気がした。変人高校で頭のおかしい人間とヘンテコ生活を送っていたせいで、かなり認識にズレが生じてきているようだった。

「あいつ、すぐにもおれらのことをばらすぞ」

「ちよつちよつちよつちよつ」 「ふたたびアヤたん。」 なんと。それはまた大きなアイテムで」

あのふたりはいつたいなにをやっているんだろう。

「おれらも停学ってこと？」 田澤が声を裏返す。「なんもしてないじゃん」

「いや、したぞ。おまえも同罪だ」

「してねーよ」

「した」

「してねーよ」

「あばばば。 うへー、これはまた厳しい」

「ねえ、助けないの？」 わたしはたまらず口をはさむ。「友情パワ

「がどうか言ってたじゃない、さっき」

「時間切れだ。いいところでおまえに水を差されたからな」しまじろつはまじめくさってうなずいた。「やる気をなくしたんだ」

「おれ、いち抜けた」

田澤が背中を向けて立ち去りかける。と、見えない相手と話し込んでいた玲乃様がくるりと振り向き、氷のまなざしでこちらを見据えた。遅れてやってきたライトブラウンの髪がふわっとほおを撫でる。いちいち動作が大げさだ。

大股でやってくる。「助力が得られた。助けに行きましょう」

「助ける？」わたしは聞いた。「さっきは諦めましょうって」

「言ったでしょ？ 助力が得られたって。だからよ」

「やだよ。それに停学になったら変人もクソもないじゃんか。ていうか、それこそ変人の人生なんじゃないの」

田澤がめずらしく鋭いことを言った。

「退学にはならない。ぜったいに」

「どうして？」

「その前にこの子を紹介する。わたしたちの救世主」

となりのほうを指さす。わたしにはただの空間だったけど、田澤

もしまじろうも見えているようだった。

「知ってるよ。大栗だろ」田澤が言った。口調に軽蔑がこもっている。「こいつになにができたよ。うまくやれるっていったらモンハンくらいだろ」

「救世主が聞いてあきれろぞ」しまじろうもつづける。「いまだに親に髪を切ってもらっているようなやつだ」

「たしかに、この子の能力はモンスターハンターシリーズをだれよりもうまくプレイできるだけで」

「バイオもだよ」空間が不機嫌そうに言った。「爆発しろ」

「は？」だれもつつこまないのでわたしが返した。「爆発って？」

「ただの口癖よ。意味はないの。イラついてるだけ」玲乃様が冷やかに言った。メンバーを見まわしてつづける。「じつはこの子のお兄さんも、二十二世紀が丘にかよっていたの」

「てことは、変人なんだ？」田澤が言った。「病気持ちの能力持ちなんだ」

「そう。ちょうどわたしたちの助けになるような能力を、ね」

「どんな能力？」

「それは」

「あー、待つて待つて待つて」

わたしの携帯電話がザーと鳴った。まるっこいボブヘアが息を切らしつつあらわれた。

「あんた、あたしの役目を取らないでよね。このハーフなり損ない」
「アヤたんがむーんとうなつてにらみつける。説明のためにわざわざ登場したのだろうか。」大栗兄は五歳年上、現在高校二年生。
え？ それじゃ計算が合わないって？ そうなの。大栗兄は「いつまでも高校にいますわりつつけることができる」能力の持ち主。つまり」

「力を借りるのよ。そうすれば退学にはならないでしょ？」

玲乃様がおつかぶせて要点を言い終えた。

「なるほど」しまじろうがあごに手をやる。「たしかにうまい手だ」

そうかなあ。わたしはふと気づいた。

「でもそれって」

「留年するってことじゃん」田澤がひきついだ。「意味ねー」

意味ねー。アヤたんも含め全員が声をそろえて言った。

「そうね。たしかに意味ねーかも。でも現実は厳しいの。退学よりはマシでしょ？ 少なくとも留年であれば一から学年をやり直すことはできるんだから」

「あー、いいかげん助けに来てくれませんか？」

アヤたんが画面に顔を近づけ、鼻をくっつけて言った。ピシッと鞭を打つような音にビクリと反応し、横を向いた。そしてあんぐりを顎を落とす。

「そ、それはまた最新鋭な。え？ どこにつけるって？ 後ろに腕をまわすの？」

33話 死ぬんじゃない、爆発するんだ（後書き）

うーん。ストーリーにはその世界に合った「行動する理由」ってものが存在するはずなんですが、まだ見えていません。お気楽な世界にまじめな理由を結びつけるとちよつとちがつてくる。それはわかるんです。まだつかみ切れてないってことでしょうか。

34話 時計は友達

これ以上ぐだぐだしているといろいろ問題が出てきそうなので、さつさと救出しにいくことにした。わたしたちが実験室から出ると、大栗もあとからついてきた。わたしには見えいんだけど、男どもがうつとおしそうに振り返るのでなんとなくわかったのだった。

「なんでこいつがついてくるんだよ」田澤が言う。「足手まといなんだよ。死ぬぞ」

「気持ちはいれいいんだが」しまじろうは振り返り、諭すように言った。「やはりおまえには荷が重すぎる。ここはおれたちに任せて」

いまだに少年誌気分が抜けていないふたりは気づいていなかったけど、いつの間にか後藤も後ろについてきていた。こっちは見える。

「というか後藤ってだれなんだ。」

「後藤はいつ何時でもエキストラになれるという能力の持ち主なの」いきなりアヤたんが画面越しに言った。「とくになにをするわけじゃないけど、なんとなくね。でもエキストラって必要でしょ？ 映画なんかじゃとくに。よくわからないけど必要なの。いつどんなときもね」

「なんか余裕そうだね」

「いたたた」いきなり痛がった。「そんなことはない。はやく助けに来て。そしてあなたの胸に飛び込んであれこれ」

わたしは通信を終了した。

「で、あいつはどこに捕らえられているんだ」しまじろつが言った。

「反省室でしょ？」とわたし。

「だが、考えてもみる。あそこで鞭を振るようなスペースがあると思うか？　その他もろもろの器具も。ああいうことはしかるべき場所を用意してプレイするものであって」

そのとおりだった。反省室はカラッポだった。

「こらこらこら。なにやってるんだ、おまえら」

そこへアホの坂田にそっくりな担任の富田先生がやってきた。「まだ授業中だろう。なにをぞろぞろと」

「えーと」わたしが言った。「じつはですね」

「なんというか」と田澤。

「つまり」としまじろつ。

「正直申し上げると」と後藤。

「それはほんとうですか」

と、大栗が言った。姿は見えないけど、オタク特有のねちっこさはイヤというほど伝わってくる。

「どうしていまが授業中だと先生は断言できるんですか。時間は絶対だと先生は言い切れるんですか。先生の思い込みなんじゃないですか。理論的に証明できるんですか。どうなんですか」

「なんだって？」富田先生はしどろもどろで答えた。「い、いいか。時間をそんなふうに言うもんじゃない。時間は友達なんだぞ。ほら、その証拠に」

指さす。レトロなサッカーボールふうの壁掛け時計があつた。十二時十分。だけど富田先生がいる以上信用できないし、針はいまにも遊びまわりたくてうずうずしていた。

「でも時計は交通事故からは守ってくれないでしょう。いくら友達といつても」

「そんなことはない！」

金切り声を上げる。先生はかなり取り乱していた。

大栗は冷ややかにつづけた。

「いいえ。どっちもばらばらになるだけです。そして死ぬ。第一話でストーリーは終了するんです。ワールドカップにも出られないし、イタリアの強豪クラブに移籍することもできない。もちろん、女性の人気も得られない。ぼくの言う意味がわかりますか？」

なんの話だかわたしにはさっぱりわからないけど、少なくとも先生にはなんらかの効果を与えたようだった。富田先生は苦しみはじめた。「ぼ、ぼくはいままで遅刻したことがないんだ。二十五年間、

一度もだ。今朝もそうだった。起きる時間になると目覚ましが

「先生がが前日にセツトしたからでしょう」

「していない！」

「酔っ払ってて覚えていないだけでしょ」

「ウソだ！ そんな」

「高橋陽一はじつはサッカーが好きじゃないんですよ。野球のほうがいいなんです。知ってました？」

このひとことが決定打になったようだった。先生はがつくりとんだれ、それからゆつくりと顔を上げた。惚けたような笑みを浮かべ、うつろな目で職員室を見まわす。そして生きる望みを絶たれた感のある先生の背後で、サッカーボール型の時計が「ざまあみろ」とでも言いたげに長針と短針をハイタッチさせた。

なんのこっちゃ。とにかく先生は自殺でもしそうな雰囲気を背中に漂わせつつ引き下がった。田澤としまじろうはおもしろくなさそうにある一点をにらみつけている。大栗とやらがどんな得意げな表情を浮かべているのかは、やっぱりわからなかった。

「ま、とにかくこれで教師をひとり撃退したわけね。ごくろうさま」

玲乃様はそう言うと、アメリカ人のように肩をすくめ、反省室のぞきこんだ。なにか気になるところがあるようだ。

電話がかかってきた。公衆電話からだ。あわててボタンを押し、

耳に当てる。

まさか。

「もしもし？」

「大栗の能力についてだけど」なんだ。だれかと思えばアヤたんだった。「あいつはだれよりもうまく攻略法を見つけることができるの。モンハンが得意というだけじゃなくね。つまり、生まれながらのウィキペディアの管理人というわけ」

「ゲームだけに？」

「ゲームだけに」

「いまどこにいるの？」

ザー。

「地下」それだけ言った。

「どこの地下？」

返事はなかった。さっきからなんなんだ。余裕で電話をかけられるくらいなら居場所をぼろっと漏らしてもいいもんなのに。

「あのちびっ子から？ どこにいるって？」

玲乃様は上履きを脱いで反省室に上がった。四つん這いになり、コンタクトでも落としたみたいになしぐさで畳をまさぐっている。

わたしは答えた。「地下だって」

男ふたりは玲乃様のお尻に釘づけになっている。たしかに、なんとも妖艶なにゃんこだ。

「これを見て」

にゃんこは上体を持ち上げ、お姫様すわりをして前髪を払い、わたしたちに顔を向けた。人差し指を真下に向け、うなずいた。

わたしは聞いた。「畳がどうかした？」

「これをひつpegして」だれにともなく命令する。

「だれが？」

「さあ、だれでもいいけど。ここは男の仕事なんじゃない？」

「ぼくはイヤだ」大栗が怒ったように言った。「畳アレルギーなんだ。力も弱いし。そんなことをするために生まれてきたわけじゃない」

「だれも期待してねー」

ウザそうに田澤が言った。しまじろうとふたりで畳の縁に指を差し入れ、むんずと持ち上げる。

わたしはのぞきこんだ。ふつうは板の間が出現するはずなんだけど、そうではなかった。中は空洞がぽっかりと口を開けていて、明

らかに怪しげなハシゴが下に向かって伸びていた。ゆるやかな風を顔に感じる。風はしめっていて、カビくさかった。真っ暗で底は見えない。

「なぜ地下につづじる階段が、こんなところに」

と、すっかり存在を忘れていた万年エキストラの後藤が言った。いったいだれに対して説明しているんだろう。

「そうか、わかったぞ。きっとこの奥にアヤたんが捕らえられているんだ！ この奥にはなにが待ち受けているのだろうか。それはだれにもわからない。そして次回、すべての謎が明らかに」

「うるせえ」

田澤がぼそりと言った。「おまえの謎は今日でおしまいだよ」

34話 時計は友達（後書き）

海兵隊員が職員室に突入してくるはずだったのですが、なぜか地下に行く展開に。そしてわけのわからないナレーション要員、キャプテン翼ネタ これも飲み慣れない芋焼酎の効果でしょうか（知るか）。まあ海兵隊はあとで使います。せっかく思いついたんだし。

35話 おれの名はサム。ほのかにエロいぜ

足もとに暗黒の穴がぼつかりと口を開けている。さびた鉄のハシゴ、内側は岩肌がむき出しで、古井戸のようにも見える。封印されし邪悪が飛び出してきて世界を支配してやるぞーなどのたまう展開になるとしたら、これ以上の穴もシチュエーションもないんじゃないかと思えるほどだった。

のぞいているうちにふらっと引き込まれそうになり、わたしは思わず腰を下ろした。ひざ立ちであとじさる。後頭部に堅いものがぶつかった。慌てて振り返る。

田澤が痛そうに口を押さえていた。「ぐらっていったぞ、歯が

」

「降りるのか」しまじろうがだれにともなく言った。「その前に作戦を考えたほうがいいんじゃないかと思うが」

「ダメ！」全員が言った。

「もちろん降りるの」と玲乃様。「あなたのバカパワーはのちのちのために取っておいて。ここまで来たら引き返せない。とにかく降りて、それから考えましょう。どこにつうじていようと突進あるのみ」

「それは考えたほうがいいんじゃない？」わたしは提案した。

「薄情ね。恋人を見捨てるの」

「だって この奥にアヤたんがいるとはかぎらないでしょ？ それに、探せばべつのルートが見つかるかも」

ザー。

「その穴の奥にいるよー」アヤたんから通信が入った。「そしてべつのルートは存在しないよー」

「待遇のいい人質だな」しまじろうがつぶやく。「自分で出てこいよ」

「いまは休憩時間にやの。だから」

「にやの？」

「あーごめん。いまにゃんこなの。耳に尻尾生やしてね。詳細はのちほどお話するけど、だからついにゃん語を」

「一刻の猶予もないようね。はやく助けに行きましょう」

玲乃様が締めた。厳しい表情で見まわす。わたしたちはしぶしぶうなずいた。

「ぼくは授業に戻らなければならない」棒読み口調で大栗が言った。「申し訳ないんだけど落ちる」

縁起でもないネットスラングだ。ドアが静かに閉まる。どうやら出て行ったようだ。

「じゃあまず降りる順番を決めましょう」

「男が先だ」男のしまじろうがすかさず言った。「そして女とつづく。ハシゴを降りるときは昔からそうと決まっているんだ。おい、後藤。先陣を切れ」

後藤に視線が集まる。ちなみに後藤のルックスは、たいへんふつうだった。これといって華もなく、かといって超絶不細工というわけでもない。説明が難しい。目を離すといきなりどんな顔だか忘れてしまうタイプだった。

だからエキストラなんだろう。

「どうして？」

「おれはチャンスを与えようとしているんだ。主役級になりたくないのか」

「なりたい」憧れをにじませつつ言った。

「ならば決断しろ。運命は自分でつかむものだ。というわけでさっそく」

しまじろうが穴を指さし、はようせいという感じであごをしゃくった。後藤は神妙な顔で細かくうなずき、ゆっくりとハシゴをつかみ、地獄の穴に足を下ろした。右足、そして左足。下をのぞきこみ、一歩ぶんはしごを下りる。

顔を上げた。「怖い」

「はやくしろ。あとがつかえてる」

このがんばり次第で今後の役者人生が決まる後藤は、「あー」と声を上げながらみつつほど下った。もう半ば暗闇に紛れてしまっている。

「だいじょうぶみたいだ。ハシゴの留め金もしっかりしてる」左手を離し、岩肌に打ち込まれたボルト部分をまさぐる。余裕が出てきたのか笑顔さえ見せている。「おーい。みんなはやく来いよ。ぜんぜん怖くないぜ」

右手を離し、上に向かってカモンと手を振った。「どうした、怖いのか？　ぼくは平気だぞ！　よーし、このまま主役を食って自分の人生を自らこの手に引き寄せるんだ」

ゆっくりと体が後ろに傾いていく。悦に入りすぎて本人は気づいていないんだけど、後藤はどっちの手も離していた。

「うわー」

気づいたときにはすでに遅い。両手をひっかくように振りまわし、ハシゴに指をかけようとする。右手が空を切り、左手が空を切った。もう空を切るものが残されていない後藤は、観念して落下することにしたようだった。

どさつ。かすかに激突する音が聞こえた。わたしは思わず口を押さえた。

「どうしてこんな」

「エキストラだからじゃねえ？」

田澤があつさりと言った。なるほどね。

「運命には逆らえなかったようだな」

しまじろうは肩をすくめた。仲間の死を四秒で乗り越え、穴に入り、ハシゴを降りていく。

次は田澤。そしてわたし、玲乃様とつづく。

ハシゴを踏むカツカツという音が反響する。中はくさかった。とんでもないにおいだ。どこかで嗅いだことがある。と、すぐにひらめいた。これはプールの更衣室においだ。古井戸ってこんなにおいがするんだろうか。嗅いだことがないのでわからないけど

頭上の明かりがみるみるしぼんでいく。その前には玲乃様の靴とソックスとほっそりした膝の裏と太ももとお尻があった。

「落ちたら助けてよ！」わたしは下に叫んだ。自分の声が不気味に反響する。腕がかすかに震えている。

直接的な答えはなかった。そのかわり田澤がこう言って返してきた。

「パンツまる見えー」

わたしは反射的に右手を離し、スカートを押さえた。

「無駄無駄無駄！ こんな暗闇なのに白がまぶしい」

だから先に行きたがったのか！ わたしとしたことが、不覚だった。

「待て。おまえが先頭に立て」さらに奥の方からしまじろうが言った。「そしてその暗視装置を貸せ」

「了解。一分交替で入れ替わろう。分かち合いの精神ってやつさ。そついうもんだろ、友達って」

下の方でポジションチェンジが行われている。両方落ちて死ねばいいのに。

頭上から玲乃様に話しかけられる。

「で？」

「でって？」

「いま考えていることよ」

「なにも考えてないよ」

「じゃあ考えて」

なにが言いたいんだか。リーダーの申しつけなので、わたしは慎重に階段を下りながら言うべきことを考えてみた。

意外とあっさり見つかった。

「目的を知りたいんだけど」

「言っただじゃない。だいぶ前に」いきなり怒られた。「学校を変革するのよ。わたしたちの将来のために。このままでは変人として世に送り出され、全員が悲惨な人生を」

「ほんとうに？」わたしは思わず口にした。

「それはどういう意味？」

「ほかの」

口ごもる。つまり言いたいのは、あなたもかなり怪しいんじゃないかってこと。ほんとうに学校を変革することが目的だったとしても、自分のためって感じがする。そのためにわたしたちが利用されている、という。それでもいいっちゃいいんだけど、なにかべつの目的があるような気がしてならない。そしてその目的が達成された暁には、わたしも田澤もしまじろうもアヤたんも見殺しにされる。

そついうのって映画でよくあるじゃないか。

「なにを考えているの、マチ子さん？」

詰問される。下の方では「かんりょー」というかけ声とともにコンバートが終了したようだった。しまじろうが不気味に見上げている。顔に装着した暗視ゴーグルが赤い光を放っている。

わたしはふたたび顔を上げた。「べつに。なんでもない」

「あっそう。あなたがなにを考えているかぐらいすぐにわかるんだ

けど。でもいまはそれどころじゃない。救出に集中しよう」

「ぷりぷりだぞ、ぷりぷり　おい、なんだ、クソ！　田澤、ゴールの調子が悪いぞ。どうなってるんだ」

「横のダイヤルで調整しろよ。そっちじゃなくて。そこは倍率だろ。どんだけ急接近するつもりなんだよ。欲望に忠実すぎると身を滅ぼすぞ」

わたしは無言のまま奥へと進んだ。先はまったく見えない。そして無事地面に降り立ったら、連中のケツの穴に拳をつっこんで口越しに暗視ゴーグルをもぎ取ってやろうと思った。

35話 おれの名はサム。ほのかにエロいぜ（後書き）

はじめての死人が出ました。たぶん死んでないと思うんですがね。これから先は、やっぱり密教ネタになるんでしょうかね。先生方がイルミナティみたいに邪悪な儀式をやってるんですよ。そこへ海兵隊員が わけわからん。

36話 説明が必要なときだってあるんですよ！（金切り声で）

暗すぎて時間の感覚が富田先生並みになっている。わたしは機械的に足を動かし、ハシゴを降りていった。ほかのみんなもネタが尽きたのか静かになった。なったらなつたでちよつと気になってくるけど、あえてしゃべらせるのもアホらしいので黙ることにした。その代わりわたしは暇つぶしに、普段バカをやっている芸人がドラマに出てシリアスな演技をしたりするとちがった一面を見た気がして妙にドキツとするのはなぜだろうというようなことを考えていた。

つま先を伸ばして次のステップを探る。おお、地面だ。ほぼ二日ぶりの地面。慎重に両足で踏みしめる。平たい地面に立つのはなんだか妙な気分だった。

みんな降り立った ようだった。

「まっくらだな」

しまじろうが説明的なセリフを吐いた。まったくそのとおりでみんな見えていないのはわかっていているのにだれに対してそんなことを行ったのかわからないけど、とりあえず全員近くにはいるようだった。体温と呼吸でなんとなくわかる。

「くせー」

田澤が言った。こちらみんなじゅうぶんにわかっている。

「おまえが先頭だ」しまじろうがつぶやいた。

「おまえってだれ？」田澤が言った。

「おまえだよ」

「おまえおまえ言われても、見えてねーし」

「暗視ゴーグルを装着してるのにか」

「ちっ」「舌打ちする。」「なんでおれなんだよ」

「ずっと先頭だっただろ」

しぶしぶなのかすらも暗すぎてわからないんだけど、田澤は観念したように歩き出した。

カーン。

「痛って……。なんだこれ」

「パイプみたいな音ね」わたしの耳もとで玲乃様が言った。今日はみんな説明口調だ。「いきなり行き止まり？」

「あー、いや」「じゃりじゃりっという足音。」「右と
じゃりじゃり。」

「左」

「横に道が延びているだけのようだ」としまじろっくが説明した。

「どっちに行きゃいいの」

「知るか」

「ねー、リーダー。　　というか名前なんだっけ」

「いい。どうせ明日になれば忘れるんだから」

リーダー玲乃様が答える。ふと気づいた。口調は冷やかだったんだけど、目がふさがれているぶん耳が冴えているのか、ほんのちよっぴり寂しさみたいな感情が紛れているのに気づいた。そう、暗く冷たい森の奥、日の射さない森に咲く一輪の花のように。妙な言語感覚まで研ぎ澄まされているようだ。

「あなたが決めて。先頭なんだから」

「なんでだよ。ただ前を歩ってるっただけだろ？」

「そうじゃない。わたしたちの行動は人智の及ばぬ力によって導かれている。あのお方の力によって」

「あのお方？」と思わずわたし。

「なんでもない。　　あなたはもう一度、自分の能力を思い出すべきよ。あなたはなにができる？」

「あー、なんだっけ？」たぶんしまじろくに聞いた。

「なにをやってもうまくいかない能力」

「そうそう。　　っーか、そんなふうにひとことでまとめられると腹立たしいな。で、なんだ。おれはやりたいことがぜんぜんできなくて、それで　　」

ふと言葉を止める。なにかに気づいたようだった。「そうか」

「そうよ」玲乃様が部下の成長を喜ぶリーダーのように言った。「そのとおりよ」

「右だ」

田澤は断言した。ひとりでざくざく歩き出す。わたしたちはあとにつづいた。

「どうして右なの？」わたしはたずねた。

「左に行きたいと思ったからさ。うまくいかないなら、はじめからやりたくないことをやればいいんだ。　　すげえ。またまた開眼したよ。悟りを開いたっていうか。いきなり三レベルぐらい成長した気分。明日から勉強するよ。そうすれば彼女できるし。エロいコンテンツなんてもういらなくなるし」

「エロと彼女は別物だ」しまじろつが厳しい口調で言った。

「ご名答ね。すばらしい」

玲乃様は満足そうだ。というか上機嫌。わたしはというと、先ほどの発言に対する質問が魚の小骨のように喉にひっかかっていた。「あのお方」って。彼氏のことだろうか。彼氏とは普段そういう秘密の遊びをしていて、それをうつかりぼろりと口にしてしまった

のだろうか。

怪しい。

「お、また壁だ。えー、今度は左。確實だつて。おれが言うんだからまちがいない。そして彼女募集中　マチ子よーい」

「はい？」彼女募集中とわたしの名前を同じセンテンスで言われ、思わずうわずった声を上げた。「は？」

「アヤと仲いいよな。どんな子？　どいうタイプの男が好み？」

こいつはアヤさんに気があるのか。これは以外　だけど残念無念。これが叶わぬ恋なのは日本が今後百年間でワールドカップを優勝するのとどっこいどっこいだろう。

「アヤさんは　「思いっきりレズっ子なんですよ、とは言えない。わたしは口ごもった。」

「じゃあ、普段はなにしてる？」

「最近は　「わたしは少し考え、言った。」「捕まってる」」

36話 説明が必要なときだってあるんですよ！（金切り声で）（後書き）

やばい、後藤の死体を忘れていた　これも伏線にするしかないな。
何者かに回収されたんですよ！　って本文で書けって話ですね。

37話 選択肢はひとつの七三のみ

わたしたちは田澤の指示に従い、尻を追いかけながら右へ行ったり左へ行ったりそのまま直進したりしていた。だんだん目が慣れてきたのか、周囲の様子がぼんやりを見えるようになった。通路は筒型で、パリの下水道みたいな感じ。ほんとうに迷路のようだった。そしてもちろん田澤の尻もよく見ることができた。

「今度はまっすぐ」

「ほんとにあつてんのか」不審そうにしまじろうがたずねた。

「信じるよ。親友だろ？ ゆえに、もしまちがってて窮地に陥ったとしても快く許してくれるという寸法で あ」

「あ？」わたしが言った。思えばこのところあ？ とかえ？ とかしか言っていないような気がする。「え？」

「後藤の死体がなかった」

「後藤？」なんとかまともな質問をしたかったんだけど聞くべきことはひとつしかなかった。「なかったって、どこに？」

「入り口の下だよ。着地点」

「そうだったけ？」 z <

全員がいつせいに首をひねる。死体があつたかどうかというより、大半は後藤ってだれだったけという顔をしている。

「余計なことは考えなくていいの」玲乃様が締めた。「前進あるのみ。ほら、気づかない？」

「なにが？」とわたし。これじゃまるでバカな女エキストラだ。「気づくってなにが？」

「同じ質問を二度繰り返さないで。かすかに風を感じるでしょう？ 出口が近いってことよ」

「おれら脱出するんだっけ？」すつとぼけた顔で田澤が言った。

「じゃあ目的地が近いってことなんじゃない？」逆ギレする。「案内係なんでしょ？ はやく歩いて」

そんなこんなで先を急いだ。そういえばだれかが囚われてるんだっけ？ もう一週間以上会っていないような気がする。風？ まったく感じない。出口って、わたしたちが進んで飛び込んだんじゃないのかっただけ？

なにやってるんだろう、わたし。

「おっ」

田澤は十字路を左に曲がりかけ、バックステップして背中を壁に張りつかせた。こっそりとのぞきこむ。アホな暗視ゴーグルをつけているし、もう完全にスパイ気取りだ。

「どうした。敵か」しまじろうが肩に手を置き、ささやいた。「気づかれたか」

「わかんね。なんかガジェットない？」

「家に帰れば死ぬほどあるぞ」

ファンムービー版みたいなしょっぱいサム・フィッシャーがそいつとのぞきこむ。「なにかがいる」

そのとき、声がした。「そこにいるのはわかっている」

よく響く野太い声だった。わたしはなんの意味もなく背後を振り返った。玲乃様が不機嫌そうなへの字口で見返してくる。「なに？」

その先の石壁に、ポスターのようなものが貼ってあった。よく見ようと目をすがめる。視力のよさも明かりがなければ役に立たない。

玲乃様はもつと不機嫌な顔になった。細い眉を寄せ、眉間にちっちゃなしわをこしらえる。「だから、なに？ お昼ご飯の青ノリが歯についてるとか」

パツと明かりがついた。まぶしい。わたしは目を細めた。ヘッドライトの三倍は強力な光源が下水道のあっちこっちでビカビカしている。

「いいから出てきなさい」

例の声。よく聞くとなんとなく先生っぽい口調だった。

わたしは石壁のポスターに目を奪われていた。なんだこれは。かなり古くて色褪せているし、端も捲れていていまにもはがれ落ちそ

うだった。手のひらでひさしをつくりつつ一歩、二歩と前に進む。言い寄られるのかとも思っているのか、玲乃様が不審そうにあとじさった。そして振り返る。

あれは時間割表だ。なんでこんなところに？ なじみの枠に、科目が書かれている。けどかなり古いというだけでなく、内容も意味不明だった。月曜の一時間目は「唱歌」で、二時間目は「書き方」。そのほかにも「手工」やら「読本」やら 「修身」ってなんだろう。

「戦前の時間割ね」玲乃様が説明してくれた。「どうしてこんなところに」

戦前？ よくわからないけどそうだとすると、戦前の高校生は歌って読んで書いて修身していればよかったのか。なんて楽なんだろう。

ただし当時も水曜日は七時間授業のようだった。どうでもいいけど。

「出てきなさい」みたび声が言った。ちょっとイラついている。「正直に話せば警察沙汰にはしない。内々に処理するから」

なんだそれ。わたしは振り返り、身を寄せ合った。互いに顔を見合わせ、見合わせる顔がなくなるとだれとはなく角から出た。万引きをしたわけでもないのに、みんななぜか条件反射的に顔をうつむかせている。田澤は恥ずかしそうに笑みを浮かべている。

通路は行き止まりで、鉄製の扉があった。その両脇に、まるで侵入者から扉を守るようにふたりの先生が立っていた。どっちもおっ

さんっぽいキャメルのスーツを着て、まったく同じ顔をしていた。歳は四十くらいだろうか。ふたりは両手を中途半端に上げ、形容しようなないポーズで固まりつつわたしたちが近寄るのを待っていた。ゆっくりと近づく。双子なんだろうか。その不気味さをのぞけばただの先生に見える。

もっと近づくと、もうひとつちがいがあった。

「ほう、侵入者というのはおまえらのことか」右側が言った。

「待ちわびたぞ」左側が言った。

門番は顔も背格好も完璧に同じなんだけど、ヘアスタイルが微妙にちがっていた。右側は向かって左方面に分け目をつけた七三で、左側は向かって右方面に分け目をつけた七三だった。あと強いて言えば、左の先生のほうが毛髪が薄いような気がした。

そんな見分け方より名札でもつけたほうがよっぽどわかりやすいんじゃないだろうか。ほんとうにどうでもいいけど。

「なんすか」先生ということで、田澤が敬語でたずねた。「なんにもしてないっすよ」

「ライガとフウガか」しまじろうがじつにわかりやすい例えを口にした。「相変わらず古いな」

右側がギロリとしまじろうをにらんだ。

「あんなのといっしょにするな」

「だが名作だ」左側がうなずく。「時を超えた名作だぞ」

「門番ってことは」「わたしが言った。どうしてもまともな発言をしたいばかりに思わず口をついて出たのだ。「あの　わたしたちをとおしたくないっていうか　その先になにか見られたくないものが」

「いろいろすつとばしたな」右七三の左側ににらまれる。「不本意だが答えてやろう。まあ、そのとおりだ」

それはそうと、先生の門番はずっと同じポーズを取りつづけている。少し前から腕がふるふる震えているんだけど、示しがつかないからなのか下ろすつもりはないようだった。

「ここをとおりたくば」

「質問に答えよ」

だれも答えない。生徒が手を挙げないのには慣れているようで、左七三の右側の先生は顔色ひとつ変えずに言った。

「ひとりの先生は真実のみを答える。ひとりの先生は虚偽のみを答える。問いは一度だけだ。答えるのはひとりの先生、答えはイエスかノーのみ。さあ、問いかけなさい。いずれが正しい先生なのかを」

「ん？」

わたしは口をとがらせた。どっかで聞いたような　。

37話 選択肢はひとつの七三のみ（後書き）

無理やり伏線回収、みたいな。主人公が活躍しなさ過ぎなのはわたしの悪い癖です。

38話 お国のために尽くす 塾のアルバイト講師

「このオッサンなに言ってるの？」

田澤が振り返り、かなりふつうの声で言った。そのオッサンふたりは顔色ひとつ変えず、相変わらずのヘンテコポーズで固まっている。

玲乃様が細い眉をぐにやりと曲げ、わたしを見た。「ヘンな顔」

「は？」思わずまた言った。もう今後、は？ とか、え？ とかは言わない。ここに誓う。「なにそれ。いきなりなにを」

どこからともなく手鏡を出し、わたしに向ける。それを見て、わたしは誤らなきやと思った。たしかにヘンな顔だ。眉間にしわを寄せ、タコみたいに口をとがらせている。

そうだ。なんでこんな顔をしていたかというと、門番の先生の問いをどこかで聞いたような気がしたからだ。これでまともに役に立つことができる。

いつの間にかみんながわたしのヘンな顔に注目している。どこで聞いたんだっけ？ とりあえずふつうの顔に戻してから、あらためて考えてみた。あ、そうだ。あの学歴社会の弊害みたいなわたしのロッカーだ。これで答えられる。

ふと気づいた。門番先生ふたりにたずねる。

「質問、なんでしたっけ？」

「問いは一度のみと言ったはずだ」右側の七三が言った。

「二度は繰り返さない」左側の三七が言った。

「じゃあ答えられないんですけど」

「そこまで言うならしょうがない」ふたり同時に言った。「これが最後のチャンスだ。制限時間は三十秒」

門番としてはだれも問いに答えてくれないと存在価値を見いだせないのだろう。ふたりはまったく同じトーンとピッチで質問を繰り返した。

「という質問でした。さあ、いずれが正しい？」

「えーと」期待のまなざしを一身に受ける。わたしはテストでも使ったことのないような脳の部分をフル回転させた。「たしか答えは」

「十秒経過」左がかすかにニヤリとした。

「答えは」

指が算数の足し算でもするように動いた。言うまでもなくなんの意味もない行動だ。

と、指が勝手に右側を指さした。

「質問はこう。『あなたが正しい先生かとわたしがたずねたとき、あなたはイエスと答えるか?』」v

「なにそれ。意味わかんないんだけど」

田澤を相手にする人はいなかった。右側の門番が首をビクツと震わせ、それから苦しそうにうめきはじめたからだ。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお」

次のプレスまで「お」を繰り返し、青い顔で思いっきり空気を吸い込んだ。

「ああああああああああああああああああああ
ああ」

「いいから答えてください」わたしは一步せまった。「答えはイエス? ノー?」

すごい自信に満ちた声。すると右のオッサンは「あ」をフェードアウトさせ、最後に蚊の鳴くような声で「イエス」と言った。

「見事だ」正しくない左側が神妙な顔でうなずいた。「きっと大学に入れるぞ」

「正解だ。扉をとるがいい。さあ、これを」

右側がわたしに手のひらを差し出した。鍵が乗っかっている。

わたしは鍵を受け取った。ひんやりした感触がちよつとうれしい。くるつと振り返ってみんなに見せびらかす。

残念ながらだれも反応しなかった。

「わたしはモノホンの先生だ。住吉といいます。二年三組の担任で、国語を担当しています」

「じゃあ、左の人は？」

「自分は先生ではありません！」自ら化けの皮を剥がした。声や口調までちがっている。直立不動でびしつと敬礼し、先をつづけた。

「自分は歩兵第61連隊の長谷川と言います！昭和十九年、フィリピンはルバング島へ着任いたしましたが、翌年の米軍上陸と艦砲射撃により我が部隊はなすすべもなく撃退され 敵の兵力はすさまじく！」

唇を噛み、うつむいた。そしていきなりがばつと顔を上げた。目には涙がこぼれている。

「恥ずかしながら、生きて帰ってまいりました！」

偽物は旧日本兵の生き残りだった。というか計算が合わないんだけど。

「みんな数学は苦手だろう？ だからバレないと思ったんだ」住吉先生が言った。

「なるほど」

「もう用は済んだ？」玲乃様が冷ややかにたずねてきた。「はやく扉を開けて、奥に行きましょう」

「畏なんじゃね？」田澤が言った。旧日本兵に顔を向ける。「先になにがあるの？」

「自分は知りません！　自分は階級が低く　」

「行こうぜ」

しまじろつに促され、わたしは鍵をそろそろと鍵穴に差し込んだ。ちっちゃな鍵をまわすと、じつに大げさな音を立てて開閉装置が作動した。

ガチャン、ガチャン、ガチョン　。

「ガチョーン！」階級の低い旧日本兵が真顔で言った。「いまいちばんナウいジョーク！　自分は大笑いであります！」

ギギギ、とちようつがいをきませ、鉄の扉がゆっくりと開く。しまじろつは田澤の背中を叩いた。先頭に立てということだ。田澤は「なんでおれが　」と言いかけたが、ぎゅっと口を真一文字に引き結び、先頭に立った。腰を落とし、様にならない潜入のポーズを取る。

ドーン。背後で扉が閉まる。そして　ガチョン、ガチョン、ガチョーン。退路は断たれた。なんとしても先に進むしかないようだ。

篝火があちこちに焚かれ、オレンジ色の明かりをゆらゆらさせている。わたしは照らし出された茶色の岩肌を見た。洞窟のようだ。

それかなり広い。そしてほんまものの不気味さを醸し出していた。

「帰りてえ」

田澤が言った。玲乃様が追いついてるようにケツを叩いた。腰をかめつつ、少しうれしそうな田澤はそろそろと前進した。わたしたちは立ち止まって見守る。前進、前進、ガチョーン。

ガチョーンだった。

「うっわ！」

ものすごいでかい声。あたりに田澤の声が反響し、わたしは思わず耳を塞ぎかけた。

「助けて助けて助けて」早口言葉のように連呼する。「落ちる落ちる落ちる」

しまじろうが駆け出し、しゃがんだ。それから腹ばいになり、うめきながら言った。「つかまれ」

わたしも近づく。しまじろうの傍らに立ち、そして仰天した。洞窟の真ん中がぽっかりと大穴を開けていた。田澤は完全に落ちかけていて、片手をしまじろうの手首、片手をぼろぼろ崩れる岩肌をがっつちりとつかんでいた。

「引き上げて！ 引き上げて」

わたしはどうすることもできず、とりあえずチアリーダーになった。しまじろうはむんと一声気合いを入れ、田澤を引き上げた。わ

たしの応援の甲斐あって、無事平らな地面に四つん這いになる。からだじゅうがぶるぶる震えている。

「ほんとになにをやってもダメなんだな」

「穴はおれのせいじゃねー」

わたしはチャリーダーのポンポンを捨て、穴の下をのぞきこんだ。マンションで言うところの三階くらい下の位置に、かなり人工的にこしらえられた四角い空間があった。といってもかなり広い。そして。

わたしはしゃがんだ。そして生まれてはじめて地面に腹ばいになった。

「どうした」

「シート」しまじろうに向かって指を立てる。「だれかいる 大勢」

三人で腹ばいになり、そーっとのぞきこむ。大勢の人間が、なにをするでもなく空間をうろろ歩きまわっている。わたしは目を凝らした。全員ローブを着てフードをかぶって いるわけではなく、みんなスーツにネクタイという場違いな格好をしていた。青いジャージを着ている人間もいた。脇になにか黒い長方形の板を抱えている。

あれ、出席簿だ。

「なんなんだよ、あれは」 田澤がおびえた声を上げた。「まるで密教の 先生？」

「先生」わたしはうなずいた。白衣を着た先生が、ものすごい勢いで縦に横に歩きまわっている。とくになにをしたいというわけではなさそうだ。あ、あれは投稿初日に掲示板の前で遭遇した先生だ。

「先生？ 二十二世紀が丘の？」と田澤。

「見覚えのない顔ばかりだぞ」しまじろうがつづける。

「入学したてだからよ、きつと」

「うすきみわりーよ。生け贄でも捧げんのか？ あの祭壇で」

田澤が指さす。たしかに、空間の向かって左側には、よく磨かれて黒光りする長方形の台があった。ちょうど人が横になれるくらいのおおきさだった。

ちょうどだれかが横になっていた。「アヤたん？」

「なに？」「マジで？」男ふたりも目を凝らす。驚いた。ほんとうに捕らえられていたんだ。といつても手錠で拘束されているわけではなく、端から見るとただ単に昼寝をしているだけのように見える。

隣には勉強机が一式あった。

「これって」

「助けるべき？」わたしは田澤のセリフを引き継いだ。でも、どうやって？「玲乃様はどう」

振り返る。玲乃様はいなかった。

38話 お国のために尽くす 塾のアルバイト講師（後書き）

ありがとうの感謝を込めて大容量のスーパーカップ！ ちなみに旧日本軍のくだりはかなり適当です。あとで修正すればいいんですが、それ以前にアンタッチャブルなネタなんじゃないかという気がしています。この先生の密会、教育委員会かPTAに結びつけたいなあ。じつはマチ子さんの母が みたいな。

39話 押してもダメなら小学生

わたしは田澤をつついて言った。

「どこに行ったの？」

残念ながら田澤は死から生還したばかりで副交感神経が優位に働
きすぎていた。簡単に言くと腑抜けになっていた。

腕を伸ばしてしまじろうをつつき、同じことを聞いた。

「だれの話だ」

「われらがリーダーよ」

「菅直人か？」真顔で返す。「どこにも行ってないぞ。しっかりと
日本を治めてる」

わたしはかぶりを振った。菅直人首相がすっかり日本を治めてい
ないという意味ではない。やっぱり自分ひとりで疑うことにした。

まずわたしの頭に浮かんだのは、「マチ子さんの言うとおり」
だった。気味が悪いけどほんとのことなんだから仕方がない。つま
り、あの子をはじめっからわたしたちを裏切るつもりだったのだ。
理由は知らないし知りたくもないけど、わたしはずっと前から気づ
いていた。これだけは言わせてほしい。

相変わらず腹ばいになって下の空間と先生たちを見る。と、場の
空気が変化した。先生たちは慌ただしい感じでささやき合い、立ち

止まっでは周囲をきよるきよしている。ほら見る。密告者がわたしたちを密告したんだ。このままではわたしたちもアヤたんもろとも邪神の生け贄にされてしまう。

「なにかあったのか」よだれを垂らして燃え尽きている田澤越しにしまじろうが聞いてきた。「もしかして」

「もしかしてよ」

「もしかしてなのか」ぎろりと目玉を動かして先生たちを見、つづけて顔も動かした。「なんとかうまく切り抜ける方法を考えないと」

「

「こら！」

わたしが考えさせるのを止めようとすると、背後から大声で呼びかけられた。わたしはどうやったのかわからないけど腹ばいのまま飛び上がった。しまじろうも飛び上がった。田澤は死んだ魚の目をしていた。

「おまえら、こんなところでなにやってんだ？ いまは授業中だぞ？」

もつともなコメントだ。おそろおそろ振り返る。そこにいたのは邪教の信徒ではなく、ちよつと時代錯誤な長髪をなびかせたおじさんの先生だった。

「教室に戻りなさい、教室に！」

「あの」

わたしは口を開きかけた。これは先生なんだろうか。それとも先生に見えるけどやっぱり邪教の信徒なんだろうか。ただの先生だったら怒られるv

と、しまじろうがささやいた。「ここはおれに任せろ。いい考えがある」

「ダメ」

「なにがダメだ。なにがいい考えだー？」少し博多弁なまりがある。長髪をかき上げてつつける。「どういうことか先生に言っ」

「んこ」しまじろうが素早く言った。

「なんだってー？」

「んこ」

わたしはしまじろうのほうに目を動かした。いつものしまじろうではなかった。表情には微塵も知性を感じられない。にへらへらと笑みを浮かべて先生を見上げている。鼻水まで垂らしている。この顔　どこかで見た記憶がある。どこかで　。

そうか。小学生だ。しまじろうは考えたあげく、小学生に退化したのだ。

「んこってなんだ、んこってー？」先生が問い詰める。「それじゃわからんぞー」

「んーこしてきた！」天真爛漫に叫んだ。「だってさー、漏れそう
でさー、それでさー」

「なんなんだその言い方は？ それでも高校生か？」

ちがう。

「授業中にんーこで抜け出すのか？ ん？ 高校生なのにか？ そ
んなバカな話は聞いたことが」

「んーこ、んーこ！」ひとりでんーこコールをはじめた。手も叩き
はじめた。「もっらっせ！ もっらっせ！ さーあっきーまでー、
からだのーなかーにーいたーのーにいー」

そして森山直太郎の『うんこ』を歌い出す。まさに狂気の沙汰だ。

「おおお おまえはーっ！」先生は切れた。当然だ。「こっちに
来んしゃい！ あの祭壇に横たわって生け贄に」

わたしはたまらず上体をねじり、手を挙げた。いまのしまじろう
は能力が発現している状態だ。おそらくしまじろうは、この状況で
先生に対し理屈でねじ伏せるのは不可能だと決断したのだろう。そ
して理屈のつうじない小学生になったのだ。

よけい話がややこしくなったただけなんだけど。

「はい、マチ子さん」先生が指した。

「しまじ 島くんは」やばい、なにを言おうとしてたんだっ
け？「島くんは えーと、基本的人権について述べているんだと

「思います」

「なんだそれは？ アメリカの話か？ ここは日本だぞ！ 大日本帝国です！ 米英の価値観は通用しないぞ！」

「高校生でもします、ってことです。授業中であろつと、なかろつと」

「なにをー？」

「ですから を」

「なにー？」長髪をかき上げ、耳を澄ますポーズを取った。「聞こえんぞー？」

「生理現象を、です」

「ほかの言い方で」

顔がゆがみすぎてひっくり返りそうになった。「 知りません」

「おー、そんな基本的な言葉も知らんのか？ 一から国語をやり直したほうがいいんじゃないかー？ 言わないと捕まえるぞー。祭壇が待ってるぞー。生け贄にするぞー。そしてあんなことやこんな大人のお遊戯会を ー」

わたしは叫んだ。どんだけ大声で叫んだのか、先生は仰天した顔で革靴の底をじやりつと言わせ、あとじさった。「お、女の子がそんなはしたない言葉を ー」

あんたが言わせただろうが。

周囲の空気がまた変化した。それも寒いギャグですべったときの教室みたいな生やさしい変化ではなかった。下の空間がざわつき、先生たちが野蛮な声を上げている。わたしは振り返った。わたしの呪文の詠唱に全員が気づき、こちらを指さしている。言葉が原始的すぎてわからなかったけど、「侵入者だ、捕まえろ」という意味なのはまちがいないようだった。

しまじろうは小学生に退化し、田澤はいまだに交感神経を休ませていてシヨックから立ち直っていない。アヤたんは祭壇で寝こけているし、玲乃様は美しき女スパイだった。そしてただひとりまともなわたしは、わらわらと集まってきた邪教の先生方に囲まれ、物珍しげにじろじろ見られ、胸上げのように抱え上げられた。

「わが校の秘密を知った生徒　生きては返さない」

かなり下のほうから声が聞こえた。首をねじって声の主を見ようとかがいたけど、下過ぎて見えなかった。先生方に抱え上げられているからではなく、声の主の身長が低すぎたからだった。

校長先生は信徒に命令した。「祭壇に運べ！　偉大なるお方、千葉市教育委員会様がお待ちだ　！」

39話 押してもダメなら小学生（後書き）

はい、また下ネタです。でも婉曲表現にしたから言われないと気づかないかも……。！ それにしてもこれってなんの話なんでしょうね。教育の問題点を浮き彫りにしようとしているのか？

40話 真のヒーロー ギャラも天井知らず

わたしはえっさはいさと担ぎ上げられ、下の空間に運ばれる。「教育委員会様はお喜びだ！」と校長先生が恍惚とした声で言ったのでふたたび振り返ってみたが、やっぱり姿は見えなかった。

おとこふたりも運ばれていた。こっちはわたしみたいな生やさしい運ばれかたではなく、片足をつかまれて地面をずるずる引きずられている。とくに田澤はうつ伏せのまま顔を岩肌にこりこり削り取られながら運ばれている。祭壇に着くころには温水洋一よりフラットな顔になっていることだろう。

祭りにかける男たちが、岩を削ってつくられたとおぼしき階段をえっほえっほと降りていく。祭壇に近づき、わたしは畏怖を湛えつつ千葉県教育委員会様の巨大な像を見上げた。篝火の炎に照らし出され、じつに不気味に浮かび上がっていた。千葉県の教育方針を決定するお方には山羊の角が生えているらしい。まあ、納得できないこともないけど。

そうーれ！ のかけ声とともに、わたしは祭壇前の生け贄台に放り投げられた。ごろんと横に一回転する。目を開けると、真っ正面にアヤたんの顔があった。横向きでほっぺたに両手を乗せ、くうくうと平和そうな寝息を立てている。はあ、と寝息をつき、わたしの鼻先をくすぐった。ほんとに本気で寝ているようだ。よくまあこんな状況で　　と思ってから頭を二百七十度まわして台を見てみた。台はベッドでいうとクイーンサイズくらいの大きさで、しかもあり得ない快適性と弾力性を誇っていた。ふたり並んでもゆったり。

というか、ただの高級ベッドだった。そして大理石だとばかり思

つていた表面は、ただのマーブル模様のベッドシートだった。

あまりの快適さに、わたしも寝てしまいそうだった。死への眠りに必死で抵抗しつつ、周囲の状況をうかがう。

もうダメ。あと五分だけ。

「こら、起きろ！」

いきなり大勢に怒鳴られる。「起きろ！ 授業中だぞ！ 起きろ！ 起きろ！」

体をビクツとさせて飛び起きた。見まわす。祭壇の下では、松明を持った先生方が声を合わせ、拳を振り上げながら毛筋の乱れもなく合唱を繰り返している。「こら、寝るな！ 授業中だぞ！」

わたしは悟った。召還の儀式がはじまったのだ。

「おつきろ！ おつきろ！」校長先生がいちばんノっていた。教育委員会様の像のかたわらで、制御の効かない小学生みたいにぴよんぴよん飛び跳ねている。「おつきろ！ おつきろ！」

すでに先生方は主への呼びかけをやめていた。とても背の低い校長先生は気まずそうに黙り、ゆっくりと拳を下ろした。乱れたヘアをさりげなく整える。

「　　というわけだ」

静かになるとふたたび眠気がぶり返した。目玉が裏返りかける。わたしは急いでアヤたんをつつついた。

「起きて。アヤたん」

「むにゃむにゃ」妙に滑舌よく言った。「あと三時間二十分だけ。そしたら学校に行くから」

アヤたんはいま何時あたりにいるんだろう。

「ダメ。起きて。このままじゃ」

「爆発しろ！」大声で寝言を言った。「転校生爆発しろ！むにゃむにゃ」

「いないよ。裏切ったの」寝言に答える。「玲乃様はわたしたちを裏切って いやちがう。もともとスパイだったのよ。美しき女スパイ。ありがちでしょ？つまりそういうわけよ。だから」

「『いまなにが必要？』だって。は！　ねーねー覚えてる？　一ヶ月くらい前の話。あいつがマチ子さんにいきなり問いかけたでしょ？『あなたはいま必要なものが見えないのよ』とかなんとかバツカみたい。むにゃ」

この子ほんとに寝てるんだろうか。

「で？」とわたし。

「むーーーーーん！」いきみはじめた。「ダメだ！　やっぱり死ね！　転校生ネタは追い詰められた作家の苦し紛れだ！　ネタよりまずおのれの才能を拾ってこんかい！　むにゃりんこ」

支離滅裂になつてきた。わたしは起こすべきかどうか迷いはじめていた。「アヤたん」

地面がぐらぐら揺れ出した。尋常じゃない縦揺れだ。先生方は「おお」と畏怖に打たれたような声を上げる。そうか、この状況にこの揺れ。タイミング的にはバッチリだ。ついに。

「日本の高校教師よ、われにひざまずけ」

全員ひざまずいた。自分は大物だと思っているのか、校長は立ったままだった。恍惚とした表情を浮かべ、像を見上げている。

「時は来たれり。わたしの子供たちよ、いまこそ日本の教育のあり方を根本から変えるのだ。さすればわれは蘇らん」

「そうです！」校長先生が言った。「そして対米隷属の日本を終わらせるのだ！日本は真の独立国として」

「だまらっしゃい」教育委員会様はぴしゃりと言った。「まだ講釈は終わっていない」

「そうですか。ではどうぞ」

わたしも含めて全員が耳を澄ます。いまのところ講釈のつづきは聞こえてこなかった。

「主よ どうされました？」校長先生が心配そうにたずねる。

ややあつて、主は咳払いした。「なにを言いたいのか忘れた」

「そんな」

「おまえが邪魔すつからだろ？」いきなりフランクな口調になった。
「まあ、つまりだ。戦後の日本教育ってのは、あれだよ、ようはマッカーサーの野郎がさ、日本を隷属させるためのプログラムをこしらえさせたんだろ？アメリカ様に反抗しない日本人をつくる教育よ。考える力を養わせないようにしてる。平等教育って、つまりそういうことじゃん？なんでも横並びにしてさ、個性を殺すんだ。でもそれって教師が無能なんじゃなくて、日本が戦後からいままですつとそういう教育方針で来てるからなんだよ。教師はそれに従ってるだけでさ。だから、ほんとにかわいそうなのは先生ってわけよ。だろ？」

「そうだ！」先生方が次々に声を上げる。「おれだってまともな教育をしたい！」

「生徒の個性を伸ばしたい！」

「やる気と自尊心を養わせたい！」

「真の教育を！われわれの準備はできているのだ！」

頭が混乱している。つまり儀式を滞りなく終えてわたしたちが生け贄になれば、日本は対米隷属から逃れ、真の独立国として教育を一新できるということだろうか。よくわからないけど、植草一秀が聞けば泣いて喜ぶだろうと思った。

わたしの答えはこうだ。死にたくない。だってそうだろう、なんで輝かしい日本の未来のためにわたしが犠牲にならなければならぬのか。

「死ね！」またアヤたんが怒鳴った。「転校生は死ね！いまあたしたちに必要なものは？ マチ子さーん あっ、そこはダメ、あうん、そんないきなり」

かなりとっ散らかった夢を見ているらしい。そしてわたしはふと思った。いま必要なものは？ だれかの助けだ。だれでもいい。ヘンなヘルメットにコスチュームを着た五人組でも、精神が弱いパイロットの乗った人型兵器でもいい。ほんとうに助けてくれるのなら磯野カツオでもよかった。

だれでもいい。毎週テレビに出ているヒマがあつたら、わたしたちを助けに来て。

40話 真のヒーロー ギャラも天井知らず（後書き）

これ、いつ学園ものに戻るんでしょうかね。まあたぶん来週ごろには。ちなみに対米隷属教育うんぬんは本当の話です。考えさせない、エリートをつくらせない教育方針なんです、日本の学校は、むかしからずっと。平等万歳！

41話 旧支配者 単なるダメ上司

「つーわけよ。ぶっちゃけて言うと。日本の教育の問題点、みたいなの？」

教育委員会様が結んだ。「そろそろまじめになっていい？」

「それはもう できれば」校長先生が手もみしつつ言った。「そのほうが雰囲気も出ますから」

「雰囲気ね。大事だよな、たしかに。よし、地面とか揺らしちゃおっかなー」

「とか、という言葉遣いはあまり」

地面が思い出したようにぐらぐらと揺れはじめた。

「ついでに天井からぱらぱら岩の破片を降らす的な」

「ですからそういう言葉は」

天井からぱらぱらと岩の破片が降りはじめた。

「あ、あと、自分の像もヒビなんか入れちゃったりして」

山羊の角を生やした像にヒビが入りはじめた。言っておくけどいまのところわたしはなにもしていない。

「そ、それは」校長先生がうろたえる。「侵入者があらわれて

人質を救出し、儀式がすんでのところで阻止されたあとになぜか起きるイベントでして」

危険なほど揺れながら像が言った。「マジで？」

「ええ、マジで」

「なんだよ」教育の神様はせせら笑うように鼻を鳴らし、若干キレ気味に言った。「それをはやく言えっつーの」

それを合図に、なにもしていないのに洞窟内が本格的に崩壊しはじめた。像はびきびきつと縦に大きく亀裂が走り、左腕がぼとりと落ちた。祭壇ふつのベッドはマッサージでもするように優しく振動している。

結局、助けを呼ぶ必要なんかなかったようだった。そう、悪は常に自滅するものなのだ。

わたしはアヤたんを揺すった。「起きて。逃げなきゃ」

「俺のエクレア！」意味不明の寝言を叫び、飛び起きた。きよろきよろし、きよとんとわたしを見る。「ここどこ？」

「どこでもいいよ。逃げないと」

「よくないよ。あたしの体があたしの意に反したところにいるんだから」両手を挙げ、ふあーっとあくびを漏らす。「グーグルマップで調べてもいい？」

「いいよ。あとでね」

そんなこんなでわたしたちは快適なベッドをチェックアウトし、手をつないで崩落寸前の洞窟から逃げ出す。階段を駆け上がり、立ち止まり、右、左と出口を探す。

「逃げられると思ったら　かなり下の方から声がした。校長先生だ。」「いや、いまは逃げられるだろう。しかしわたしは諦めないぞ。夢を諦めない！　きつと必ずや日本の教育を変え、おまえたちを真の変人として世に　」

教育委員会様が首をかしげた。　いや、ちがう。ぼろりともげた。山羊の角を下に向け、いちばんのお得意様がけて落下する。校長先生は見上げた。そのときにはすでに手遅れで　。

そうでもなかった。定年間近とは思えないほど軽いフットワークで頭のかたまりを避けた。まっふたつに割れたご主人様の頭を見下ろし、腹立たしげに毒づく。「このバカ委員会が。崇拜して損した」

そしてふたたびわたしたちを見上げる。

「逃げられると思うな。　明日も授業が待っているぞ。その次もその次も　そしておまえらは結局、われわれに変人として教育されるのだ。いあ！　おまえらに個性を植えつけてやる！　考える力を与えてやる！　世の中は厳しいぞ　とくに自分の頭で考える人間にとってはな。余計なことを考えるんじゃない　そう思わせてやる！　おまえらはこれから一生、人生の意味を考えて生きつづけるのだ！　いあ！　いあ！　ふんぐるい、むぐるうなふ、くとうぐあ　」

途中からべつの邪神に祈りを捧げはじめた校長先生は、そのうち瓦礫と粉塵に飲み込まれて姿が見えなくなった。

アヤたんがわたしの脇腹にがっしりとしがみついている。「このまま死ぬ」

「死なないよ」

「いや死ぬ」

わたしは出口を探した。

「こっち！」

聞き覚えのある声がした。「出口はこっちよ！　いますぐここから出れば、午後の授業に間に合うから！」

声はすれども姿は見えず。　待つて。これってわたしが昨日から願っていたヒーローじゃない？　いまいちばん大事なものは、ここから助け出してくれる救世主で

「ちがうよ。ただのバカお嬢」アヤたんがわたしの頭を読みつつぼやいた。舌打ちしてつつける。「せつかくふたりきりで死ねると思っただのによー」

「はやく！」危機的状況なだけに、玲乃様の声も切羽詰まっていた。「このままではお昼休みが終わってしまう！」

そうか、これはお昼休みの余興だったのか。なんて長いお昼休みなんだ　と、わたしはふと気づいた。

「 待つて。田澤としまじろっは？」

「それはあとで考えて！ もう手遅れってことにしてもいいから！」

「あなた、どこにいるの？」

「どこでもいい！ わたしと同様に、あなたには出口につうじる扉も見えていないの！ ということはつまり、どこでもいいってことなの！ 岩肌顔に顔面から激突して！」

「 アメリカのコメディみたいに？」

「アメリカのコメディみたいだね！」玲乃様が急いで繰り返した。

「もしくはパンをくわえて曲がり角を見つけるの！ そうすれば必ず意中の男性を激突できるから！ 最初は腐れ縁なんだけどイベントを重ねることにお互い意識し合い、そして引かれ合ってついには」

「なんの話？」

「なんでもいいの！」

「あ あなたはスパイじゃ」

「わたしはただの転校生よ。あなたたちの大嫌いなね。明日になればわたしたちはまた初対面 だからわたしなんか、見えても見えなくても同じこと」

わたしは目の前の岩肌を見た。ここが出口だ たぶん。わたし

は汗ばみまくった手をぎゅっと握り、アメリカのコメディエンヌになるべくアヤたんをひきずって駆け出した。そういえば午後イチの授業は英語だった。そしてわたしは岩肌にずがーんと顔面から激突し。

41話 旧支配者 単なるダメ上司（後書き）

眠すぎ御免！ いちおうクトゥールーネタで閉めてみたつもり。こんなだったかな、たしか。

ずがーんと顔面から激突しなかった。「きゃあ」とか言っ
てひっくり返ったあとなにこともなかったようにすつくと立ち上が
ってフレームインし、ファン開拓用のすつとばけた表情でかぶりを振
って次の場面に進むこともなかった。ハリウッドのコメディには縁
がないらしい。わたしは次の一步で正面衝突するだろうというこ
ろで目を閉じ、ブレーキをかけようとしたけど時すでに遅く、気づ
いたときには次の一步と勢いづいた二歩目とお義理の三歩目まで先
に進んでしまっていた。本来ならとくに岩にめり込んで仲間の救
出を待たなければならぬ状況なはずなのに、なんともなかった。
痛くもない。わたしは目を開けた。周囲の様子は形容しがたかつた。
まさに岩の中だった。わたしの足は調子に乗って四歩目と自分の限
界にチャレンジしたくなったのか大胆にも五歩目も繰り出し、する
と次第に周囲が白っぽく変化してきた。まぶしい。わたしは目を閉
じた。そして前人未踏の六歩目と横綱昇進をかけた七歩目を勇往邁
進した。そして。

「うおっ？」

アヤたんがすつとんきような声を上げた。なにを意味しているの
かはわたしにもすぐにわかった。成功の人生を噛みしめるように八
歩目を踏み出すと、急に足場が消え、わたしはまるで財団法人日本
相撲協会のように真つ逆さまに転落した。

落ちて、落ちて、落ちて、理事長が更迭されて、もっかい落ちた。
いいかげん落ちつづけるのも飽きたので目を開けると、幽体離脱し
た靈魂みたいに上方から教室を見下ろしていた。

やった、ほんとうに脱出できたのだ。でもなんで教室の天井付近に出現するんだろう。そんなことを考えながら二秒ほど静止していたけど、次の瞬間わたしはワイリー・コヨーテのようにぴゅーんと落下した。胃が喉もとにせり上がり、手を振りまわす。

すんと席に着く。アニメのようにスマートとはいかず、イスの座面に尾骨をもろにぶつけた。

びりびりするお尻をさすりつつ、教室を見まわす。見慣れた一年一組だった。授業がはじまる前の、お馴染みのぐだぐだした雰囲気。キンコンカンと授業開始のチャイムが鳴った。みんなはのろのろと席に着く。アヤたんは？ いた。同じくおケツをさすりながら、机の中をのぞきこんでござござかきまわしている。しまじろうも、田澤もいる。ふたりと目が合った。危機を乗り切った仲間として思わせぶりにうなずいたり親指を立てたりなどといったことはなく、なんとなく気乗りのしない感じで目をそらし、イスの背もたれに寄りかかってだるそうに足を投げ出した。エキストラの後藤もいる。こちらはエキストラらしく、とくに目立った動きは見せなかった。

平和だ。ものすごく平和。わたしは思った。きつと悪い夢でも見ていたのだろう。邪教とか変人とかなんとかとか よく考えればなんてバカバカしい。そんな高校、あるわけないじゃないか。たぶんもう少ししたら英語の先生が入ってくる。起立、礼、着席。そして今日は関係代名詞について勉強するのだ。「町田、十八ページを読んで」と先生に指され、立ち上がったたどしい英語の発音で読んでみんなにくすくす笑われて恥をかいいたりするのだ。

なんだか生まれ変わった気分だ。わたしは真新しい教科書とノートと筆記用具を並べ、わくわくしながら授業開始を待った。あとはわたしの予想が外れないことを祈るだけだ。

ガラガラ。先生が入ってきた。愛する生徒に目を向けるわけでもなく、疲れた表情で事務的に教卓へ向かう。先生がポジションに着いて正面を向くと、学級委員らしき子が「きりーつ」と号令をかけた。

「れーい、ちやくせーき」

先生はとくに反応せず、代わりに大きなため息をついた。いいぞ。やっぱり先生はこうでなくちゃ。

「今日は十八ページ、関係代名詞をやるぞ」

ちなみに先生は三十過ぎの独身で、グリコ・森永事件で世間を震撼させたキツネ目の男によく似ていた。名字は松井。名前は知らない。ほら、やっぱりわたしの予想どおりだ。なにがって、他人の説明をしているのにアヤさんの横やり解説が割り込んでこない。わたしは悪い夢を見ていたのだ。

先生はワイシャツの上から首に緑色のバスタオルを巻いていた。たぶん汗っかきなだけだろう。たぶん。

「じゃあそのビッチ。例文を読んで。ケンがナンシーについてひとりごとを言ってる」と」

「はい？」わたしは耳を疑った。思わず聞き返す。「ビッチ？」

先生はわたしを向いている。「きみのことだよビヤッチ。名前なんだっけ？」

「町田ですけど」

「町田、なに？」

「マチ子ですけど」

「ホーリーシット！」いきなり吐き捨てるように言った。「ワラ、フアーク！　なんてこつたい！」

お約束というかなんというか、わたしの予想もいきなり雲行きが怪しくなってきたようだ。おそろおそろたずねる。「　　どうかしました？」

「ちなみに担任の富田先生だが」唐突に話題を変える。「体調不良で早退した。きみたち学生とちがつて、大人はいつでも好きなきに欠勤したり遅刻したり早退したりできるんだ。『体調不良でお休みします』　これだよ。あと『電車遅延で三十分ほど遅れます』とか。これだけでまったくおとがめなしだ。どうだ、いいだろ？　大人は羨ましいだろ？」

「あの」

「体調不良というのはじつは対外的な口実で、富田先生は昼休みになるといきなりなにも言わずに帰宅したんだ。体内時計が狂ってしまったらしい。心配になりわたしが電話をかけると『三年くらいしたら出勤します。つまり明日　あの、十年前の夏　』といった返答だった。完全に狂っている様子だった。わたしは言わんとしていることを察してたずねた。『十年前の夏に、なにかがあつたんですね？』すると富田先生はこう答えた。『そう、そうなんです。ぼくが独身なのはトラウマのせいなんだ。あの日、ある女子に手ひど

いフラれかたをしたんです』『それで、その子の名前は？』『町田マチ子』『町田マチ子ですって？』『そうなんです。あれは大東亜戦争終結から二十分くらい経ったあとのことでした。ノルマンディー上陸の二時間前です。覚えてませんか？ バルジの戦いのちようど八分二十四秒前ですよ』もうわけがわからなかった。先生はつぶけた。『町田マチ子。許せない。ぼくをツイッター上でフリやがって。ぼ、ぼくの時間を返せ。ああ、おなかが空いた。さつき食べたばかりなのに』『わたしは電話を切った。頭が狂ってしまいそうだったからだ』

わたしはもつと頭が狂ってしまいそうだった。そもそも富田先生を追い詰めたのはオタクの大栗じゃないか。だいぶ前の話なので詳細は覚えてないけど。

「で、どうする？」松井先生が言った。「きみはどうしたほうがいいと思う？」

「どうすべきですか」

キツネ目の男は目をさらに細め、わたしを見た。そしてゆっくりと口を開き、言った。

「べつに、なんにも」

「じゃあなんのために長々と」

「ただ話したかっただけ。べつに心配しているとか仇を討とうとか、そういうわけじゃないんだ。友達でもないし。慰安婦として従軍してもいいんだよ、罪の意識にさいなまれてるとか、そんな気持ちを抱いているならね」べらべらとまくし立てる。「そうそう、あ

と大人は、嫌いな人間とも仲良く話すことができるんだ。大人ってすごいだろ？ 羨ましいだろ？ だからみんなも一生懸命勉強して、いい会社に入って、体調不良で休みまくるんだぞ。いいな？」

残念ながら、平和は長くはつづかなかった。これはいつもの二十世紀が丘高校の授業風景。変人の先生がいて、変人の生徒が完全無欠の変人になるべく勉強するところ。やっぱりどうあがいても、変人学校の魔の手から逃れることはできない。

「じゃあ授業に戻ろうか。　えーと、そのチンポ頭、つづきを読んで。ケンが妄想上でナンシーをファックしてるところから」

42話 6×9〃42（後書き）

フルスロットルでカーブを曲がるような軌道修正。明日いろいろと
考えます。ちなみにタイトルは意味なし。

43話 フリーターは二十五歳まで！

富田先生が大人のスキルのひとつ「体調不良」でリタイヤしたらしいので、次のロングホームルームは副担任の先生がやってきてわたしたちの相手をするようになった。

副担任の柳生先生は眼帯をして腰に木刀を差していることをのぞけばごくふつうの先生だった。ちよつとしたユーモア感覚も持ち合わせていて、むしろ思わず悩み相談を持ちかけたいくなるような雰囲気がある。若くて、ざつくばらんで、フレンドリーで、本題そっちのけで富田先生をすでに過去のものとしてジョークのネタにしていた。

「時間がわからない男のジョークだ。男が通りを歩いていると、教会の鐘が鳴った。男は近くにいた老女にたずねた。『あれは時刻の鐘ですか？』すると老女は耳に手を当て、こう言った。『はあ？』」

だれひとり笑わなかったけど、富田先生の不在を悲しんでいるわけでないのはたしかだった。ただし黒板の上の時計は例外。さつきからずっと十八時二十分を指しつづけている。終生のライバルまたは格好の遊び相手を失い、うなだれているのだった。

ちなみにいまは十五時すぎ。

「とまあ、そういうわけだな。あんまり病人をネタにしたらかわいそうか。じゃ、ホームルームということだから、なんかまともなことを話そう。将来について、なんてのはどう？ 社会に出て生きる上での不安とかなんとか。おまえらも不安とかあるだろ？」

わたしたち生徒は思わずあえぎ声を上げた。あまりにまともな内容だったからだ。

「生きる上でいろいろ悩むのは、みんないつしよだよな。だれもが悩んでる。重要なのは、悩みはごく個人的なもので、その内容に優劣はないってことだ。どうしても彼女ができないんだという俗な悩みも、人はなぜ生きるのかといった崇高に聞こえる悩みも、悩みは悩み。ひとついいことを教えてやろうか。自己実現のためにやりたいことがあつて、けどどぶつうの道から外れるのが怖い、けど自分の声がどうしてもこれをやれと言う。そんなときはどうすればいいか。めっちゃめっちゃ悩むよな。やるべきか、それとも諦めるべきか。答えはこうだ。やれ」

みんな真剣に聞き入っている。

「人のことなど気にするな。自分の人生だ、好きなことをやれ。ただし二十五歳までにしとけ。そこでダメならすっぱり諦めて、べつの人生を探すんだ。フリーターは二十五歳まで。ハイつづけて」

「フリーターは二十五まで！」口をそろえて復唱する。

「じゃあ今日はここまで。二十五歳からでも人生はじゅうぶんやり直せるぞ。そしてこの話にはとくにオチはない。まるで人生と同じだな。てことでまた明日！」

ホームルームが終わった。教室がガヤつく。男の子たちは神妙な表情で帰り支度をしている。このうちの何人かは家に帰ったらゲームをこしらえたり徹夜で小説を書きはじめるにちがいない。わたしはとくに首を伸ばしてアヤたんを見やった。新しい先生が出現したのにお馴染みの解説がないのが、なんとなく気にかかったのだ。

アヤたんはヘンな顔をしていた。かなり微妙な表情でたとえば難しいんだけど、夕飯はハンバーグだとさんざん言われて喜び勇んで食卓に着くと目の前の皿にエスカルゴがごろつと転がっていたのを見たまさにその瞬間といったような顔だ。颯爽と立ち去る柳生先生を目で追い、いなくなってから首から上をひょこつと突き出したままドアのあたりを凝視しつづけている。こういう反応を示すアヤたんはじめてだ。なにかヘンなものが見えたのだろうか。

いっしょに帰りながら聞いてみた。

「んー？ べつに」

アヤたんはわたしのチャリンコのなりをとことこ駆けながら言った。おかしい。アヤたんとは途中まで帰り道が同じなのでぼちぼちいっしょに帰っていたんだけど、必ず百パーセントわたしのチャリンコの後ろに乗りたがり、わたしのおなかとか胸のあたりにぎゅっと腕をまわし、背中にはっぺたをつけながら愛の言葉をささやくのがお定まりだった。むかし、弟がインフルエンザにかかったときのことを思い出した。ちがった表情や態度を見せつけられるとドキリとする。

「いい先生だよね。おもしろいし。相談に乗ってくれそうな感じだし」

これもアヤたんの言葉。信じられない。なんてまともな発言なんだろう。そういえばちよっぴり元気がない。

わたしはおうかがいを立ててみた。「今日の宿題だけど」

「英語のやつ？」

「そうそう。ケンの暴言集を穴埋めするやつ。あと次の章の
んだっけ？ ナンシーと電話で口論する会話」

「レッスン六、タイトルは『ナンシーはハイスクールのスーパー
ビッチ』」

「それ。デカ尻のレズとかいう　その予習もしないと」

「で？」

「わたし、英語は苦手なの。だから　」

「いつしよにやろう、って？」

「そう」

「ふうん」

まるで気乗りのない返事。交差点にさしかかり、わたしはけたたましいブレーキをかけて止まった。アヤたんは微妙に離れたところに立ち止まり、退屈そうにため息をついた。わたしはドキリとする。そして信号を待つあいだ、わたしたちは無言で往来する車をぼんやりと眺めつづけた。もしかして嫌われた？　でもなんで？　アヤたんは魂が三分の二くらい抜け出しているようなうつろな表情をしている。こんな気まずい空気になるくらいなら

どうしよう。声をかけづらい。

「ひとりでやるもんだよ、宿題つてのはさー」

アヤたんが言った。

「だよねー」わたしは慌てて取り繕う。「言いたかったのは、『だから今日は夜更かし確実だなー』ってこと」

「チョコレートでも買えばいいよ」

「買いに行く？」わたしはさりげないふつを装って聞いた。「付き合ってよ」

「宿題があるんでしょ？ 夜更かしするんでしょ？」

「ちよつとくらい寄り道しても」

「ごめん。あたし用があるから。じゃね」

その夜、わたしは宿題どころではなかった。当然チョコレートもなし。集中できないわたしはペンを机に放り投げ、勢いよく立ち上がった。二、三週ほど部屋をうろつろしたあと、パジャマの上からパーカーをかぶり、携帯電話をポケットにねじこみ、スリッパを履いて部屋を出た。そう、イライラしているのは甘いものが切れたせいなのだ。なにか食べたい。

弟の部屋をとおるすぎる。扉のすきまから明かりが漏れ、うつすらと音楽が聞こえてきた。また二コ動でも見てるんだろう。

一階に下りる。父も母も就寝済みのようで、居間も台所も真っ暗だった。死んだように静まっている。

トイレに行ってから台所の戸棚をかきまわし、ヘンなサルのイラストが描かれたチョコクリスピの箱を取り出した。がさがと皿に盛り、牛乳をかける。

豆電球をつけ、音を立てないようそーっとイスにすわる。スプーンを持ち、ざくつと一口すくった。持ち上げたところでふと手が止まる。

もう片方の手で携帯電話をひっぱり出した。着信はなし。アドレス帳を検索する。

わたしは田澤にメールした。玲乃様は毎日アドレスが変わるらしいのでだれも知らないし、しまじろうは携帯電話自体を持っていない。だからとくに意味はない。

「アヤたん、おかしくない？」

わたしは闇夜でシリアルをもしやもしやした。半分くらい食べるころまで放置され、ようやく返信が来た。

「これでどうだ！ 届いてるかー？」

「届いてる」

「厚生大臣宛にメールすりゃいいのか。めんどくせー」

相変わらずだ。少しほっとする。「なんの用よ」

「アヤたん、暗くない？ そっけないというか、いつもとちがうか

ら。気になって」

「さあ？　つーかまともに話したことがない」

役に立たないのも相変わらずだ。と、アヤたんがヘンな顔で副担任を見ていたことを思い出した。

「副担任の柳生先生って、なにか知ってる？」

食べ終わっても返事が来ない。わたしは二杯目に行こうかどうか迷いながらイライラと画面を見つめた。

「知らねー。でもいいじゃん。まともな先生って始めて出会った参考になったよ。おれも卒業したらフリーターやるわ。小説家デビューー！　七年も修行すりゃ、なれるだろ」

「それは　「わたしは思わず口に出してつぶやいた。　「変人の人生って言うんじゃない」

カラン。わたしは空の皿にスプーンを放り投げ、顔を上げた。オレンジ色に光る豆電球を見つめる。そして気づいた。なんて巧妙な手口。そう、あの副担任はまともで理解ある先生なんかじゃなかった。やっぱりわが母校はまともな高校なんかじゃなかった。これは夢ではない。みんなでもう一度、なんとかしないと。

アヤたんにメールを入れる。結局、翌日の朝まで返事はなかった。

43話 フリーターは二十五歳まで！（後書き）

なんとか修正できそうな手応え！ ようするに変人つてのは、わたしみたいな大学で勉強もせず就職もせず小説を書いて人生のなにかを失ったタイプの人間のことなんですよ。そしてそれは悪いことなのか？ ほんとうになにも得るものはなかったのか？ という。なんてまともなんだ。

44話 次のいきものがかりを目指して

そう、新しく登場した副担任の柳生先生は、耳に心地よい言葉でわたしたちをたぶらかし、全員フリーターの夢追い人に仕立て上げようとしているのだ。ほんとうに夢を叶える人は、もしかしたら出てくるかもしれない。だけど田澤でないことだけはたしかだった。

わたしは知っている。才能がなければいくら努力したところで作家にもミュージシャンにも俳優にもなれるはずがないのだ。なんで知ってるのかはわからないけど、とにかくそういうものなのだ。

「おれは決めたぞ。おれはお笑いの道を突き進む。うんこネタで世界を制するんだ」

翌日、わたしは右上の奥歯の隙間に舌をねじこみながら教室に入った。朝食の鮭をやっつけている最中、厄介な小骨が第二小臼歯と第一大臼歯のあいだに潜り込んだのだ。骨に気づいて「おうっ」と言い、半ばデンプン質と化したごはんもろともお皿にべつと吐き出したがすでに手遅れだった。吐き出し損の、母に冷ややかなまなざしを向けられ損だった。

最近母とどうもうまくいっていない。なにが原因かはまったく見えていないんだけど、なんとなく諦められているような気がする。わたしもじょじょに変人化しつつあるのだろうか。わたしの知らないところで。高校にかようことで見えなくなる能力がどんどん強化され、いろいろと大事なことを見落としているのかもしれない。

わたしはわれにかえり、目下の敵に集中することにした。そしてわたしの舌VS小骨の戦いを繰り広げながら席に着いたとき、さっ

きの声が聞こえてきたのだった。だれかと思えばしまじろうだ。目を向ける。しまじろうはじつに高校生らしい夢と希望に満ちた表情で、取り巻きの男の子を見まわしている。

「考えてみる。高校卒業後すぐに夢を追うとして、二十五までなら八年間あるだろ」

七年間だ。

「どんだけ長いんだって話だぞ。だろう？ 小学校在学より長い。ようするに、成功は才能によるものじゃない。ある程度の期間、集中的に取り組むかどうかにかかっている。いつまで経っても夢を叶えられないヤツってのは、たぶん迷いを抱えながら中途半端にやっていたからなんだよ」

取り巻きは「そうだよなー」とかうなずきながら、なにやら各人の押さえきれない想いが爆発しそうな顔をしていた。

「くそ、おれもなんかやりてえ」取り巻きその一が、辛抱溜まらんとした顔でおのれの拳を握り締めた。「やり遂げてえ」

「だったらおれのアドバイスは、こうだ。夢はあるか？ 自信はあるか？ だったらやれ。とにかくやれ。ジャスト・ドウ・イットだ。男なら、人生を無駄に生きるな。熱く生きる。言いたいことはそれだけだ」

自分も夢を追いかけてはじめて二分しか経っていないというのに、すっかり成功したつもりになっている。

「じゃあさ、学校なんかかよってる場合じゃないんじゃないの？」

取り巻きその二が言った。「おれ、いまから帰って漫画描くわ」

「おれはルーツを探るわ」田澤が言った。「昔に読んだ小説とかひっぱり出して」

「やべー、人生楽しくなってきた！」

人生楽しい発言を合図に、取り巻きがぞろぞろと離れていった。わたしは相変わらず齒のあいだに潜り込んでいる小骨を舌で必死にかき出しながら、机を手のひらでひととおり払い、教科書とノートと筆記用具を出した。連中はめいめいの席に戻り、持ち物をあらかじめカバンに詰め、次々と教室をあとにした。わたしはいつのまにか握っていたシャーペンを、なんとなく視界にすべり込ませた。ほどよく伸びた芯に焦点を合わせる。

いつそこれで小骨をシーシーしようかなどと考えていると、視界の先のぼんやりしたアヤたんに気づいた。焦点を合わせる。アヤた人は窓際の席にすわっていて、頬杖について窓の外を眺めるというこれ以上ない寂しげなポーズを見せてつけていた。

窓の外をカラスがさつと横切った。戻ってきてベランダの手すりにとまり、教室の中をじつと見つめている。アヤた人は頭にハテナマークを浮かべつつ、ゆーっくりと首をかしげていく。カラスも同じ方向に首をかしげた。

わたしは九十度ひねった首をさらに百二十度くらいまでひねり、後ろの席の女の子を見た（名前は残念ながら知らない）。その子はわたしと同じようなことを考えているようだった。つまり　バカじゃないの、夢なんか叶えられるわけない、おまえらは全員失敗し、苦み走った顔でその後の惨めな人生を吉野家で並盛りを食ったりし

ながら送ることになるのよ」と。

「じゃ、帰る。退学したら連絡するわ」

田澤がしまじろうに言った。うきつきと背中を向ける。

と、しまじろうは厳しい表情で田澤の手首をつかんだ。「待て」

「なんだよ」

じつと見上げる。「行くな」

「なに言ってるんだよ。はやく帰らないと電撃文庫の締切に間に合わない」

「ひとこといいか」

「言えよ、はやめに」

「高校は卒業しろ」握る手にぐつと力を込める。「頼む。親友からお願いだ。おまえが悲しむところを見たくない」

「だっておまえ、さつきはすぐにでも夢を追えって」

「兄ちゃん」

「は？」

「兄ちゃんを思い出したんだ」

「酔っ払い運転の？」

「そうだ。おれは　おれはなにを血迷っていたんだろう　」ぎゅつと口を引き結び、顔をうつむかせた。「バカなことをしたものだ。人生は夢を叶えるためにあるんじゃない。夢を夢見て、希望を胸に生きる　その道程こそが、真の成功、真の幸せと言えるんじゃないのかな。だろう？」

なんのこっちゃ。とにかくしまじろうは五分で夢を諦めたようだった。はやすぎる気もしたけど、まあ能力の限界に気づくのははやいに越したことはない。

「だからおまえも諦める。机にすわって教科書を開き、高校を卒業し、地道な仕事に就け。結婚し、子供を養い、堅実な人生を送るんだ」

「やだ」田澤は手を振り払った。「おれは作家になるんだもんね。早起きしなくて済むし」

ガラガラガラ。そしてその先生が入ってきた。

「まだ気づかないのか？　これは先生どもの罠　」

しまじろうは言葉を止め、ハッと振り返った。柳生先生は教壇に登ってごつごつと歩きながら、しまじろうに顔を向けつつける。

しまじろうは顔を伏せた。そして悩ましげな顔でわたしをチラ見した。

「席に着け。　どうだ、着いたか？　おれは隻眼だからよく見え

なくて。レーシックでよくなるのかな？ おまえらはどう思う？」

先生は和やかに冗談を飛ばしつつ、いいほうの目をわたしに向けてきた。一瞬残忍な光が宿り、わたしは背筋をぞくりとさせた。そう、アホな眼帯に木刀を腰にぶら下げているけど、副担任は富田先生なんかよりよっぽどクレバーなのだ。それとも入学直後の緊張感も取れたところで、いよいよ学校が本気を出しつつあるということなのだろうか。

「じゃ、はじめろぞ。まず注意事項がいくつか。女子のスカートだが、股下十センチ以上は禁止になった。まあ不本意だろうが、学校の方針だからな。我慢して短くしてくれ。それから男子は必ず短ラン着用、それから持ち込めるゲームソフトもひとり三本までになった。学校は勉強するところだ。文句は言うなよ。最後にクラスで金魚を飼うことになった」

金魚？

「どうだ。飼育したいやつはいないか。いきものがかりだぞ。好きだろ、みんな」

45話 捕虜には餌をやりすぎないでください

「なんだどうした。みんな金魚は苦手か？　　そうだな、しょうがないか。おまえらが悪いんじゃない。都会に自然がない日本がいけないんだよな。小さなころから生き物に慣れ親しんでないおまえらに生き物の世話をしろなんていう学校が無神経なんだ。よくわかる」

少し前ならここでアヤさんの解説が入るはずだった。たとえば「柳生先生は十代の気持ちをいたいほどわかることができるの」とかなんとか。おもしろくない？　まあわたしはお笑いで天下を取るつもりはないのでいっこうに構わないけど。

アヤさんは猫背で前を向いている。横顔は虚ろで、まるで魂を抜き取られたかのよう。いつもはイスに横ずわりしてわたしからひとときも目を離さずにこにこしたりウインクを飛ばしてきたりしていたのに。

ほんとにどうしちゃったんだろう。単に嫌われただけ？　だとしたら合点がいかない。わたしはなんだか頭に来て、舌を顎ごとぐりぐり動かして紅鮭の小骨をひっぺがしにかかった。

「ん？　　そういえばクラスの三分の一ほどが欠席しているようだが、なんだこの状況は？　インフルエンザか？　学級閉鎖直前スペシャルか。それともおれが見えてないだけかな？　生徒の気持ちをまあいいか。おおかた、夢を追いつめるのに忙しくて学校どころじゃないんだろ。そうかそうか。それはいい。なんてすばらしい

」

先生はまたわたしをチラツと見た。そして残忍な光を帯びさせる。ヘンな顔で魚の骨と格闘していたから？ いや、そうじゃない。わたしになにか用だろうか、それともわたしに次世代の金魚番をしろとでも言いたいのだろうか。

「言っておくが先生、悪いなんてこれっぽっちも思っていないぞ。それどころが大賛成だ。夢は追い求めるべきだし、学校は勉強するためにあるところだ。ただ来ればいいというものじゃない。潔く正しいじゃないか。おれは先生としてじゃなく、ひとりの人間として応援するぞ。がんばれ！」

なにががんばれた。わたしはよけいに腹が立ってきた。先生の意図は見え見えだ。これは平たく言えば褒め殺し作戦。理解ある教師のふりをしてわたしたち全員を変人の社会不適合者にしようと企んでいるのだ。廊下からドアの窓越しに、化学のふじこちゃん先生がおずおずとのぞきこんでいる。

気づくとわたしは手を挙げていた。

「なんだ」先生は寛永通宝型の眼帯を右手でつまんで調節した。「名前、なんだっけ？」

「町田です」

「それは名字だろ」

わたしのこめかみがぴくつと動いた。

「で、なんか用か？ 日本でも旧正月を祝いたいか？」バカにするように言う。「まさか金魚の飼育係になりたいってわけじゃない

だろう？ まさか。そんな。信じられない。なにか他の用事があるはずなんだ。言ってみろ。なんでも聞いてやる。おれはおまえの先生だからな」

というわけで飼育係になった。ショートホームルームが終わると、速攻で金魚が運ばれてきた。正確に言うところポンプ付きの水槽で、男子生徒が四人がかりでえっちらおっちら重そうに持ってきて、窓際の棚に置いた。ひとりかわたしに近づいてきて、「ボリスとナターシャをよろしく」と言い、餌の袋を手渡した。

そしてすれちがいざま、わたしの耳もとでささやいた。「くれぐれも気をつけろ」

「えっ？」わたしは振り向いた。「なにを」

「やつらに餌をやりすぎるな。金魚はほんのちよっとでいいんだ」

金魚運搬係は来たときと同じように速攻でいなくなった。

ちなみになぜ金魚係を引き受けたのか。簡単に言うと、なにかあるとひらめいたからだ。だいたい高校で金魚を飼うなんて、どう考えてもまともじゃない。それにこのところ、おかしいことづくしだ。アヤたんは人が変わったようにくらしい女の子になってしまったし、それに今日は高校入学以来はじめて転校生がやってこなかった。

この金魚には、ぜったいになにかがある。

目の前で水槽がぶくぶくと泡を立てている。金魚が二匹泳いでいた。ボリスとナターシャというロシア系の金魚。

「金魚」

お昼休み、わたしは金魚側の机にすわり、水槽をにらみつけながらお弁当を食べていた。背後からいきなり声が聞こえ、わたしは振り返った。

アヤたんが夢遊病の小学生みたいに立ち尽くしていた。「マチ子さん、金魚が好きだなんて」

「好きじゃないよ」わたしは急いで答えた。いきなり話しかけられてどうすればいいのかわからなかったけど、とにかくしゃべるべきだと思った。「お昼、食べる？」

「かわいい、金魚」

ぼんやりと言う。けど実際のところ、金魚はかわいくなかった。両方金魚とは思えないほど巨大で、全長は約二十五センチ。これは鯛のまちがいじゃないのか。それに挙動もかなり不審だった。ボリスはえらいスピードでせまい水槽を回遊し、中央に大メイルシュートルームができている。ナターシャはゆったりと気品のある動作で砂利の近くを泳いでいるんだけど、どうも自分を金魚だと思っていないようなふしがあった。ヒラメのように横たわったり、半回転してカレイのように横たわったり、ときおり思い出したように直立してトリプルッツを決めたりしていた。

かなり餌をやりたくない金魚どもだ。

「なんで 金魚 マチ子さんが」

寝言のようにつぶやくアヤたんの手を取った。ぐいとひっぱり、となりの席にすわらせる。お尻を軸にしてイスの上を半回転し、お弁当箱を抱えてアヤたんを直視した。馬の尻尾がご主人様の額をぴしゃりと打った。

「新しい髪型？」

「いつもどおりだよ。ただのポニーテール」アヤたんがうつむいたので、わたしはかがんで顔をのぞきこんだ。「いったいどうしたの？」

「どうって？」

「なにかあつたんじゃない？」

口をぽかんと開けた。うつろな目でわたしの頭上を見上げ、にへらっと笑った。「わからない」

「なにか悩んでるとか？」

「わからない。わからないのがわからないの」

「それはつまり」

「なんにもわからないの」まぶたがぴくつと痙攣した。「あたし、知らなかった マチ子さんがいきものがかりに憧れてたなんて」

「ちがう。だから金魚が好きなんじゃないよ。これにはわけがあつてね」

そしてわたしは、なぜ金魚係に立候補したのかを説明した。アヤ
たんの反応はかんばしくない。

ためにタコさんウインナーをつまんで食べさせてみた。無理や
りおくちにつっこみ、しゅぽんと箸を引き抜く。

眠そうな顔でもぐもぐしている。

「ね？　つまりそういうことなの。だって、明らかに怪しいで
しょ、高校で金魚なんて。いかにもこの高校がやりそうなことって
いうか。だから立候補したの、秘密を探るために」いったん言葉を
切って反応をうかがう。「どう、理解できた？」

アヤさんはウインナーをごくくと飲み込んだ。まぶたをゆっく
りと持ち上げて言う。「おいしいです」

だめだこりゃ。

「おい、餌くれよ」

だれかが言った。「おれにも食わせろ」

振り向く。やっぱりというかなんというか、話しかけてきたのは
金魚だった。声からするとボリスのほうだ。

「あたしもペコペコよ」ナターシャも言った。机にある餌の袋を見
てウンザリした声を上げる。「えー？　今日もテトラフィン？　い
いかげんにしてよ」

「もっと滋養のあるものを食べろ」ボリスがつづいた。「ロシアの冬を乗り切れるような」

「まったく。こんな扱いを受けるなんて信じられない！ あたしたちをなんだと思ってるの？」

「金魚」

薄ら笑いを浮かべ、アヤたんが言った。

45話 捕虜には餌をやりすぎないでください（後書き）

なぜかロシア系金魚になってしまいました。それにしてもこれ、どうやってリライトすればいいんでしょうか。いまのところ一話完結型の短編連作というかたちで考えてはいるのですが……。

46話 青のりのような口どけ… 湖池屋メルティーキッス

「われわれをただの金魚だと思っているのか」

ボリスが憤然と言う。ナターシャはあきれたように肩をすくめ、かぶりを振った。金魚がどうやってたら肩をすくめたりかぶりを振ったりできるのか説明しづらいんだけど、できるんだからしかたがない。

「この子たちには真の意味がわかっていないみたいね」ナターシャはため息をついた。ほわっと水槽が一瞬くもった。「でしよう、ボリス・アナトーリエヴィチ？」

「たしかにな。ナターリヤ・ステパーノヴナ」

「金魚は金魚でしょ？」

昼休みを金魚と話して終わらせるのかと思うと気が滅入ってきたが、どうせいつでも休めるのだ。わたしたちはこれまで一度たりともまともな授業を受けたことがない。ちなみに次の漢文は日本語が不自由な亀田先生。これまでの授業の内容はというと　まあ、いうまでもない。ボクシングは多少上達したけど。

わたしは攻勢に出ることにした。見下したような態度だけど連中は水槽から出られないわけだし、なんといっても飼い主はこのわたしなのだ。

「長い付き合いになるんだから、せいぜい仲良くしましょう。でないとあなたたちはテトラフィンですらごちそうに思えるようになる

でしょうね」

「マチーコ・ヨイーチェヴナ」諭すように言った。「われわれは情報をつかんでいる。きみはわれわれを捕らえた。情報がほしいからだろう。ならばここはおたがい大人になろうじゃないか」

アヤたんが目端で動いた。指をコの字にしてわたしのお弁当を狙っている。ハツとしてアヤたんに振り向いた。アヤたんは肩をビクツとさせてわたしを見る。顔は終始無表情だった。

それを見てわたしは、ハツとした顔をさらにハツとさせた。これはあれだ、事故で足の感覚を失った人がときおり足にかゆみを覚えるという。つまり、アヤたんの脳はこれまでのお昼休みの習慣を覚えているのだ。

わたしは金魚どもにサツと向き直った。「どんな情報？」

「おまえはなにを与えてくれる？」

「えーと」「テトラフィンの袋を持ち上げる。「おいしい昼食を」

「ふん！」ナターリヤ・ステパーノヴナが鼻を鳴らした。「あなたが食べたかどうか？　そうすればせめて金魚並みの知性が身につくんじゃない？」

「われわれは真のおいしい昼食を要求する」ボリース・アナトーリエヴィチが言った。「つまり、おまえたち人間と同じお弁当だ。われわれを見くびるな」

「その見返りは？」わたしは目をすがめる。すっかりロシアンスパ

イの雰囲気感化されている。「わたしの知りたい情報を持っているのね」

「そうだ。二十世紀が丘高校の大いなる秘密。先生どもの真の狙い」

「まともに卒業できればそれでいいんだけどね」わたしは重々しく付け加えた。「わかった。お弁当は約束する。母に頼んであなたたちのぶんも用意する。わたしは料理できないから」

「だれもおまえに料理など期待していない。殺人的にまずい料理をつくる以前の問題だろう、おまえの場合は」

「冷凍食品のオカズでごまかそうなんて考えないことね」ナターシヤが念を押した。「それから、これだけは覚えておいて」

「なに？」

「オホーツクはカニじゃない。あれはただのカマボコよ。わたしたちにはわかるの。そしてわたしたちを裏切ったら、あなたが必要としている情報は二度と手に入らない。あなたは変人として高校を卒業し、なにひとつ大事なものが見えなくなる。そしてご友人も二度ともとは戻らない」

「そういうことだ」ボリスが神妙にうなずいた。そして交渉は終了だと言わんばかりに背びれを向け、ふたたび回遊をはじめた。「あー腹減った。あつしたつのおつかずつはなーんだーろなー」

放課後、アヤたんを家に呼んだ。思えばはじめてだった。なんでもいままで拒否していたのか理由は思い出せないけど、それはともか

くいまアヤたんは薄暗い台所のテーブルにちよこんと腰を下ろしている。

パーティ開けたポテチ（のりしお）にはいつさい手をつけず、見向きもしない。ほんとにどうしちゃったんだろうか。金魚どものあの口ぶりだと、高校のなにかが関係しているらしい。

とにかく、明日は都合三人分のお弁当をこしらえてくださいと母にお願いするつもりで家に帰った。アヤたんを連れてきたのは、おなかを空かした子を演じてもらうためだ。「あのね、今日学校で金魚の飼育係に任命されてね、明日金魚にお弁当が必要になったの。おねがい」なんて言っても、ノリツコミ的につくってくれるような母でないのはよくわかつている。それどころかしかるべき病院に連れて行かれるのが関の山だ。

で、その母はいなかった。買い物にでも出かけているんだろう。

「いい？ 母が帰ってきたらまず儀式を執り行うからね」わたしはアヤたんにも再度確認した。「茶室でお茶をいただくの。はじめはだれもがとおる道でね、だからわたし友達が少ない分けなんだけどそれはいいか。とにかく、大和撫子として滞りなく済ませることでないと今後いつさい出入り禁止になるから」

アヤたんはにへらーっと笑った。ちゃんと脳に届いてるんだろうか。

「そしたら、おなかぺこぺこの演技をするの。母親が育児放棄して男をつくつてることにもいいけど、気がとがめるならそこまですなくてもいいよ。ハイ、言ってみて。『あたしおなかぺこぺこだよー』」

「ぺこぺこだよー」

かなり棒読みだった。

「ちがう。もつと感情を込めて」「わたしは中腰になってアヤたんの顔をのぞきこんだ。「おなか減ってない？」

「ほあー」

残念ながらアヤたんはほっぺの色つやもいいし、爪もピンク色で亜鉛欠乏の兆候も見られない。こんなに発育のいい育児放棄された子なんていないだろう。

「キッス」

「え？」わたしは聞き返した。「なに？」

「キッスがほしいの」

うわごとのように言う。「王子様のキッス」

「えーと」「つまりこのわたしにキスしてほしいってこと？わたしはとぼけた。「明治のメルティーキッスじゃダメ？」

「それでもいい」

大急ぎで戸棚をかきまわし、患者にチョコレートに分け与える。

「そうそう、これがほしかったんだ。このキッス」「ひとつまみ

し、おくちに運ぶ。と、自分を真つ向から否定するようにぶんぶんと頭を振った。「このキッスじゃない！」

ノリツツコミをしてから正方形のチョコをほうりなげる。そして「あー」とうなりながらパーティ開けしたポテチ（のりしお）に顔を何度も何度もつつこませた。

ざくつ、ざくつ。わたしはなすすべもなく見守る。そしてノリツツコミとのりしおをかけているわけでもなさそうだった。

ようやく衝動が収まったのか、アヤたんはゆっくりと面を上げた。顔全体がコイケヤふうになっている。テーブルにはおやつとしての存在そのものを粉々に砕かれたポテチのかすがちらばり、床や流しにまで飛び散っている。

のりしお味のアヤたんがわたしを見上げ、まぶたをぱちぱちさせた。青のりがまつげからぱらぱらと落ちる。

「アヤたん」「これを異常事態と言わずしてどれを異常事態と言うのか。わたしはもったいぶった言いまわしはやめ、友人としてストリートにたずねようとした。「いったいどうしたの」

ガチャガチャ。玄関の扉に鍵が差し込まれる音がした。「ただいま」母が帰ってきた。わたしを無性に恐れさせる規則正しい足音が近づいてくる。

アヤたんがふたたび言った。「キッス」

46話 青のりのような口どけ… 湖池屋メルティーキッス（後書き）

メルティーキッス×コイケヤポテトチップス（のりしお）の意味不明なコラボ。あとロシア金魚が口にした父称から、マチ子さんのお父さんが勝手にヨイチさんと決まりました。まあ小道具も使えなし、日常に戻ってこれたし、しばらくはこの調子で進めたいと思います。ちなみにオホーツクってカニかまのことですけど、ローカルな名称なんですかね？

47話 ふたつの三者面談

母が一直線に台所へ入ってきた。わたしの前を横切り、流しで手洗いはじめる。

「ただいま！」

わたしはひきつった声で反射的に言った。いや、なにかがおかしい。この場合家に帰ってきたのは母のほうなのだから、わたしは迎える側として本来ならばおかえりなさいと言うべきだろう。だけどわたしもわが家に帰ってきたわけだからただいまでもべつにおかしくないわけ。

ええい、面倒だ。両方言おう。

「おかえり！」

母はいまのところ無言だった。長女が存在にも、その連れのポテトチップスにも、いまのところまだ気づいていないらしい。しかも手ぶらだ。

「どこか出かけてきたの？」同級生の手前、平静を装ってたずねる。
「買い物にしてはどこにも買い物がないんだけど」

遮られてもいないのに口ごもってしまった。いつもこうだ。そして母は話したいと思ったときにしか話さない。

キュツと水道の蛇口を閉めた。弟みたいにバツバツと手を振りまわすわけでもなく、かけてある布巾で片方ずつきっちりしなく

をぬぐい、ブラウスの袖をなにかの儀式のようにゆっくりと下ろした。

舞台女優のように振り向く。表情からすると悪役を演じているらしい。

「あなたの学校へ行ってきました」

学校？

「今月分の給食費を払いに？」

「そう、現金を手渡しで」母はめずらしく冗談を言った。よくない兆候だ。「半年分を一括で納めたら、五パーセント割引をしてくれましたよ」

わたしは親と学校が結びつくイベントなんてどこかにあったらうかと考えた。そして あった。

「あなたのことで学校に呼ばれたので行っただけです」

逃げ出したい。

「校長先生と面談を」

「校長先生？」

「なぜ二度繰り返すのですか。一度言えばじゅうぶん伝わります。テレビドラマではないのですから」

「すみません」

「それから担任の先生とも」

「富田先生？」

「いいえ。若い先生です。目に眼帯をし帯剣した、武士のような立派な先生」

あの副担任か。「目が不自由なんだって。理由は知らないけど

」

「ものもらいだと言っていました」

ウソつけ。それにしても母を呼び出すなんて、今度はどんな悪巧みをしようとしているんだろう。

「あなたは金魚の飼育係に」

「そう、そうそうそう。そうなの」

細かくうなずく。図らずもアヤたんを紹介できるきっかけができたわけだけど、そもそも紹介していいものなのか疑問が残る。

そのポテトチップスは、顔じゅうのりしおだらけにしながらぼけーっとイスにすわっている。

「うなずきは一度でわかります」

ああ、もう。こんな親なら子供を放置してパチンコに行く十七歳

のシングルマザーのほうがよっぽどマシだ。少なくとも言うことなすこといちいちやもんをつけられずに済む。そして警察やソーシャルワーカーが乗り込んできたら、むしろ味方になってあげるのだ。「いえいえ、わたしが勧めたんです。パチンコに行けて。わたしはだいじょうぶ。食事なんか、いらないんです。もともと食も細いし」とかなんとか言って。

よくわからなくなってきた。「なんの話だっけ？」

わたしの暴言にもかかわらず母はツツコミを入れず、代わりに静かにテーブルに着いた。アヤさんの右となりだ。そしてアヤさんには気づいていないのか、目も向けない。

もしかして見えていないとか。

母は正面にすわりなさいと指さした。わたしはアヤさんにちらちら目を向けつつ、テーブルにすわった。そして母と子と裁判長の妙な三者面談がはじまった。

「単刀直入に言います」母が切り出した。「あなたは学校に不満なのですか」

「それは」もちろん。だから好きでもない金魚の係を引き受けてロシアのスパイから情報を得ようと母にお弁当を三人分つくってほしいという見込みのない戦いをしようとしているのだ。そしてアヤさん。この子、なんで連れてきたんだっけ？「不満とかじゃなくて」

「とか？」

わたしは頭をかきむしりたくなつた。いちいち揚げ足を取つてくる。わたしのなにが気に入らないのか。嫌いなのか。「お母さんはどう思った？ あの高校に行ったんでしょ？ なにか気づいたことはない？」

「地下にとおされました」

「例の穴ぐら？」

「穴ぐらが適当な表現かはわかりませんが、そうです。内々の話でしたから」

「儀式も？」

母はお上品なため息をついた。「話をはぐらかすのはやめなさい。あなたは昔から、いつもそうでした。わたしが大事な話をしようとしても、はぐらかしたり、冗談を言ったり、非現実的な妄想に逃げ込もうとしたり」

「だって地下でしょ？ 彫像が 教育委員会の」

母の顔がさらに固くなつた。これに比べれば教育委員会様もただのかわいい山羊さんだ。わたしは先をつづけるのを諦めた。どうせ言っても無駄だ。聞く耳を持っていないんだから。言っても言わなくても同じこと。

だいぶ腹が立っていたので、学校のことなんかどうでもよくなっていた。なにを言われたのか知らないけど、好きにすればいい。

「校長先生はあなたの行動に問題がある、と言っていました」

「たとえば？」不良娘が言った。いつそ足を組んでテーブルの上に
乗せてやるつか。だけど長年のよく行き届いた躰に遮られた。

「悪い仲間とつるんで、授業を妨害しようとしたり」

わたしは聞かずにアヤたんを観察して楽しむことにした。アヤたんはさすがに退屈したのか、唇のまわりをちょこつとずつ舐めて塩分を摂取していた。なんてかわいいんだろう。アヤたんのお嫁に行けばアヤたん一家として幸せに暮らせるかもしれない。

「教室を火事にしようとしたり。学校に火を放つなど、テロリストのつもりですか」

「数学の先生がタバコをポイ捨てしたからだよ」

「先生が？ 授業中にタバコを？」

「いいよ。言っても信じてくれないだろうから」

母は口を開きなにか言いかけた。目を閉じ、ヨガかなにかみたい
に背筋を伸ばし、腹式呼吸をした。きつと自分に言い聞かせてるんだろ
う。「ここで取り乱してはダメ。それでは母親失格よ。辛抱強く接しな
きゃ。それが親の務めだもの」とかなんとかかんとか。

「校長先生および副担任の先生からは、わたしからよく言って聞か
せるようにと注意を受けてきました。ですから、わたしはあなたに
罰を与えます」

はじまった。罰則はいつものことだ。わたしは十五年間バツだら

け。おかげでお正月は羽根つきをやる必要もないくらいだった。

「その態度が改まるまで、昼食のお弁当はつくりません」

わたしは恨み辛みで構成されたどろどろマグマからポンと弾き出された。「は？」

「あなたの一学期の成績を見て、学期末に先生に就学態度を再確認し、それからお弁当を復活させるかどうかを決めます」

罰といえばお小遣いなしとか週末は三週間外出禁止とかが定番なはず。お弁当カットってなんだ？　そしてじわじわとその意図がわかりはじめてきた。これは先生どもの口添えにちがいない。なぜって、金魚がおなかいっぱいになって極秘情報を漏らされては困るからだ。

というか、なんで金魚のことを知っているんだろう。

「よろしいですね。あなたは部屋に戻りなさい。こなさなければならぬ宿題があるのでしょう？」母は立ち上がった。「マチ子さん、返事は？」

わたしは八行の発音をしかけたまま口の動きを止め、目玉をスライドさせてアヤたんを見た。アヤたんは自分の世界に入っている。いまはにゃんこみたいに手の甲についたのりしおをぺろぺろ舐めまわしていた。

47話 ふたつの三者面談（後書き）

おお、話が展開しそうな雰囲気がいじみ出てきました。なにげに教育委員会様にも言及できてるし！「おもしろくしよう」と考えると自意識がどんどん大きくなってロクなことにはならないのだ、という気づきを得られました。今日の成果。

48話 コードネーム：グルーボン

「ねえ、今日のテストどうだった？」

「エストニア語の？ ううん、ぜんぜん。わたしウラル語系は苦手です」

翌日、トイレの洗面所でそんな会話を耳にした。たぶん一年生だろう。わが一年一組でも、英語の時間にエストニア語の小テストが実施された。べつに抜き打ちでもなんでもなくて、例のファッキン松井先生が前回の授業で予告したとおりテストを行ったまだった。だけど予習にも限度がある。人生、どうにもならないときもあるものだ。

かくいうわたしは、余裕だった。高校生がエストニア語ぐらいできなくてどうする。というのは真っ赤すぎるウソで、実際は前日、田澤にテスト範囲を確認して回答をあらかじめいただいたのだ。わたしは意外と学校に順応している。

わたしにとってはロシア金魚のほうが問題だった。次回のイヌイット語のテストよりよっぽどたちが悪い。ひとまず朝、お弁当を用意できなかったことを伝える。

「なるほど」ボリス・アナトーリエヴィチが静かに言った。「われわれもあまく見られたものだ」

「期限は一週間よ。この前は言い忘れたけど」ナターシャがつづける。「それまでにおいしいお弁当を用意すること。わたしたちの情報がほしければね」

「その前に飢え死にするんじゃない？」わたしは思わず聞いたが無視された。

「簡単な要求でないことは理解している」

ボリスの言うとおり、たしかに簡単じゃなかった。わたしの読みがあまかったのか　　というかそんなことよりも目下の心配ごとはわたし自身の昼食をどうやって調達するかだった。パン代もなし。

「だけど、それに見合った情報よ」

「ではこうしよう」ボリスが提案する。「水槽の水を取り替えてくれ。体がぬるぬるしてきた。これでは回遊できない」

言われるがまま、わたしは次の休み時間をまるまるつぶして水槽の水を取り替えた。そしてわが校の基準に照らし合わせればなにごともなくお昼休みに突入した。やることも食べる餌もないわたしは屋上に行った。この高校ではだれも屋上に行かないしどんなイベントも起こらないからだ。

今日も転校生はこなかったし、アヤたんはヘンなままだったし、副担任は十代の少年少女に理解ある教師でありつつけたし、

なんの着信もない携帯電話をなんとなくのぞきこみながら、腰を下ろそうとフェンスのほうへ向かった。と、室外機の近くに人影があった。田澤だ。あぐらをかいて空なんか見上げながら弁当を食べていた。

のぞきこむこと四十五秒、ようやくわたしに気づいた。

「なんだよ」

「お弁当食べてるの？」

「まあね」

「屋上で？」

「そう、屋上でランチなんてあり得ないよな。ほんとほしまじろうたちとサッカーやるはずだったんだけど、気づいたらここにいてさ」

なるほど。わたしは後ろ手に組みながら、ゆっくりと近づいた。だからといってなにをするわけでもない。田澤のお弁当に目がいった。なんとまあ豪華な。

わたしのものほしげな視線に気づいたのか、田澤は見上げてニヤリとした。「すげえだろ」

「すごいね」

ほんとにすごかった。お弁当は三段重ねの重箱で、色とりどりのおかずがびっしり四人前は詰め込まれている。グリーンポンも顔を青ざめさせる充実した内容だった。

すわる場所を探したがどこにもない。目の前に立ち尽くしている
と、田澤が言った。

「だれがつくったと思う？」

「お母さんでしょ」

「おれだよ、おれ。料理できるんだ」

「意外」

ぼろつと口からついて出た。誤るべきかどうか考えているうちに田澤が答える。

「まあね。おれも意外だし。なんでかっていうと、昨日ピクシブに小説をアップしようとしたんだよ。そしたらなんかこう、小説どころじゃなくなつてさ」v

「例の能力？」

田澤はうなずいた。「んで、気づいたら暗闇のなか台所に立ってたんだ。包丁を持って。目の前には想像力を刺激する食材があつて」

「なるほど」

「食べる？」

「なにを？」

「グルーポン。張りきりすぎて分量を考慮に入れ忘れてさ。思ってたのよりしょぼかった、って意味じゃないよ。すごすぎたんだ。おまえ、飯は食った？ 食ったよな。まあいいや。とりあえずちよつとつまんでみるよ」

田澤はほんとうにそっけなくたずねてきた。たぶん言葉どおりの意味なんだと思う。つまり、おれの飯を食え、と。そのあまりのナチュラルさにわたしはうなずいた。

「これなに？」

「さあ。たぶんチキン・コリアンダーだと思うけど」

わたしは腰をかがめて指でつまみ、ひと切れいただいた。うまい。がつつきたくなる気持ちを抑えつつ、安全にすわれる場所を探す。

「すわれよ。そこに立たれるとせつかくの青空が見えなくなる」

「新しい制服だから」

「あー、中身が見える心配？ そんなのいらないよ。おれ、おまえが十二のときからなにもかも知ってるんだぜ。上から下まで、なにがどうなっているというところまで」

懐かしい話が飛び出てきた。とおりがかりの人が聞けば幼なじみなんだなと思うだろうが、当然そうではなかった。

「ところでわたし、金魚の飼育係になつてね」

「で？」

「おかしいと思わない？ 金魚って」

「自分で立候補したんだろ」

「玲乃様は今日も転校してこなかった」

「べつの高校に転校したんじゃないの？ どうしたって飽きがくるだろ、毎日同じ高校じゃさ」

「アヤたんの様子も」

「なあ、青空をさえぎるなよ。おれの唯一の味方なんだから」

わたしは横にステップして退いた。

「空はいい。雲もいい。今日は出てないけど。だって、そうだろう？ どこに行ってもなにをまちがっても小説をアップしたのにまったくアクセスがなくても、見上げればそこには必ず空がある。おれを見守っていてくれる」

まるで友人に微笑みかけるように空を見上げる。なにかの病気が、それとも脳内で小説でも書いているんだろうか。

と、顔を下ろしてわたしを向いた。「この学校ってさ」

「うん」

「狂ってるよな」

いまさら。いままでさんざんわけのわからない事態に巻き込まれたのを忘れてもしたのだろうか。でも　わたしは考え直した。自分ひとりでもややもや考えているよりも他人の口からあらためて言われると、ほんとうに狂っているとあらためて実感できたような気がする。

した。

おせちを見下ろす。そしてわたしは口を開いた。

「お願いがあるんだけど」

「言わなくてもわかるよ」

「ほんと？」

「ああ」田澤は神妙にうなずいた。「おせちでひと儲けしたいんだろ？」

48話 コードネーム：グルーポン（後書き）

やっぱりグルーポンが出てきました。やっぱり隅に置けないですね
グルーポン。

49話 田澤、ロシアの鉄人。

田澤においしいお弁当をつくってもらったため、その日の放課後わたしは田澤家にお呼ばれされることになった。需要と供給がマッチしたのだ。田澤が供給したがっているのかはわからないけど、事情を説明してお願いすると、あっさり「いいよ」と言った。

「じゃ、放課後にうちで」

「え、なんで」わたしは珍しく、きわめて女の子っぽい反応を示した。「わたし、手伝えないよ。料理できないから。レシピはお任せする」

行きたくないわけじゃないんだけど、呼ばれる理由がよくわからない。機嫌を損ねないように慎重に言った。

「おい、それじゃ投げっぱなしだろ。なんでおれだけにやらせんだよ。それに あれだ。あれ」わちゃわちゃと両手を動かす。「もっと詳しい話、知らないか。どんな料理を望んでいるのかとか、金魚のあいだで最近流行のスイーツとか とにかくいまのままじゃ説明不足だ。もっと話を聞かせろよ。金魚について」

放課後、並んでチャリンコで車道を走りながら金魚についてもっと詳しく説明した。といってもわたしもよくわかっていないんだけど。

「へー。ロシアにも金魚がいるんだな」

「わからない。スパイだから、もしかしたら日本で育てられたのか

も」

「縁日の金魚のふりをしつつ、じつは諜報活動を　おわっ！」

車がうしろからびゅーんとおりすぎた。田澤は危なっかしくよろけ、体勢を立て直しながら「お母さんありがとう、ありがとう」とつぶやいた。母への感謝をあらわすことでようやく上手にチャリンコを操れるようになるらしかった。なんとも不便なことだ。

武道のおかげで体幹バランスが優れているわたしは、母への感謝などしなくても上手にチャリンコを操縦できる。とはいえ、なんだか妙な気分だった。クラスメイトの中でも、田澤とはそれなりにしゃべるほうだろう。だけど先生の悪口とかくだらない冗談とかを話す以上にこいつに深入りしようとは思わなかった。田澤も同じようだった。十二歳当時の裸を見られてはいるけども、あれ以降は自重しているのかそれともこつを忘れてしまったのか、わたしに対する妄想は行わなくなった。

まあいいか。しかるべき理由があってと呼ばれたのだ。遊びに行くわけじゃないし。

田澤の家は遠い。チャリンコで片道三十分はけっこう骨だ。ようやく到着する。ちょっとばかり田舎風の一軒家だった。引き戸に、赤いトタン屋根。せまい庭は雑草が伸び放題だった。

わたしはブレーキの効かないチャリンコを飛び降り、靴底でブレーキをかけた。玄関口を少しばかりオーバーランしてから後輪を浮かせて半回転し、駆け戻る。

犬小屋があった。鎖につながれた柴犬も。わたしは目をしばた

かせた。フラッシュバックだ。

「ねえ、もしかしてお兄さんがいたりする？」

「いるよ」

「もしかして、その」「言いづらい。ふとひらめいた。」「どんな仕事してるの？」

「してないよ」

「てことはやっぱり、うちの高校の卒業生？」

「そうそう。うちの兄貴、しまじろうの兄ちゃんと仲良しでさ。ちよつと頭がおかしいけど、気にしないでいいよ。三年間部屋から一歩も出てきてこないし」

イヤな予感ほどずばりの中するものだ。わたしは自営のために聞いた。

「頭がおかしいって、どんなふうに」

「あ？ さあ、よくわかんね。三年前に聞いたかぎりでは、たしか『つねに予告しつづけてそれを実行しない』能力なんだって言うってた」

「殺人予告とか？」

「まあね。一度それで京都府警が乗り込んできたよ。PCとスマホ没収されて意識不明になっちゃってさ。でも害はないから気にすん

なよ。なんにもしないんだし。普段は『サイトを更新する』とか『英検三級に挑戦する』とか『ケンブリッジに留学する』とか言うてるだけだから」

というわけでわたしは田澤家に潜入した。チラツと犬小屋の柴わんに目をやる。しまじろう家の犬とちがって韓国系の名前でもなければヘンな鳴き方もなかった。潤んだ瞳で見つめ返してくるだけ。わたしは少しほっとした。

中は外見と同じく古びた感じで、歩くたびに廊下の板がぎしぎし音を立てた。田澤は汚い靴下のままするすると台所に向かった。後を着いていく。

システムキッチンとはほど遠い台所で、食べ物のおいがこびりついている。父方の実家を思い出した。「すわって」と言われ、テーブルに着く。クロスは油っぽくべとべととしていた。蛍光灯の傘も黄色く変色していて、レトロなハエ取り紙がぶら下がっている。

静かだった。なんだか落ち着く。

「そんなにあらたまつてすわるなよ」

「これがふつつなの」

「で、金魚の餌をつくってほしいって？ なにがいい？」田澤はべとべとコンロの下収納から包丁を取り出した。たん、と景氣づけにまな板を打ちつける。「なんでもつくれるぜ。こつをつかんだんだ」

「うーん」わたしは唇をいじくりながら、ゆらゆらするハエ取り紙

を見つめた。「おいしいお弁当」

「おいしいかどうかは人それぞれだろ」

「そう言われたんだから。金魚の好みなんて知らないし」

「ロシア料理を恋しがってるかもな。ビーフストロガノフとか」

「つくれるの？」

「しかもビーフモストロガノフもないんだぜ。ちょっと待って」

田澤は包丁をまな板に置き、台所を出た。ぎしぎしと階段を登る音が遠ざかり、しばらくなんの物音もなくなった。

わたしはみたびハエ取り紙を見つめた。それからふと田澤やその他の人によく言われるツツコミを思い出し、自分のすわる姿を見まわした。これがいちばん楽なんだけど、たしかに固いかもしれない。「なんかこつちまで背筋が伸びるんだけど」「わたしといるとくつるげない？」などなど、黄ばんだ明かりに照らされる台所にツツコミの言葉が亡霊のように漂う。

試しにダラッとしてみた。脚をおっぴろげて投げ出し、腰を前方にずらして背もたれに頭を乗せた。「うえー」とかうなりながら天井を見上げる。ちっちゃい虫が素早い動きで円を描いている。

それからアホみたいに口を開け、目を半開きにし、イス全体を前後にゆらゆらさせた。なんだ、すごくリラックスできる。自分が消えて、何者でもなくなる感覚。わたしはだらしなく両手を上げ、後

頭部に持つて行き、馬の尻尾の結び目をつまんだ。結わえてあるゴムに指を入れ、ぐつとほどく。サツと髪が広がり、両肩を撫でていった。ああ、楽だ。自由。明日からヘアスタイル変えようかな。

気づくと田澤が戸口の付近で立ち尽くし、いぶかしげな顔でわたしを見つめていた。わたしは反射的に上体を起こし、イスを引き寄せて深くすわり、膝の上に手を置いた。

顔をひきつらせつつ笑みを返す。田澤の鼻が動いた。そして流しに向かった。

「おまえ、はじめての訪問なのにだらだらしすぎだぞ。もう少しキチンとしろ」

「なにやってたの？」

「小説を書いて、アップしてきた」だんだん表情が恍惚としてきた。
「ああ　ロシア」

包丁をつかむ。それからの田澤の動きは、和の鉄人道場六三郎もシャッポを脱ぐほどだった。コンロの火を起こしてフライパンをかけ、サラダ油をじゅつと垂らす。「おい、牛肉！」鉄人が助手に声をかける。だれもないのにフライパンに目を落としたまま後ろ手で催促する。パントマイムのようになにかを受け取りフライパンに投入した。箸でかきまわしている。肉のにおいが漂ってきた。

腰を浮かしてそーっと中身をのぞきこむ。なにも見えない。つづいて塩こしょうで味つけしはじめただけど、やっぱりわたしには本格的なおままごとにしか見えなかった。

「タマネギは？ はやくしろ」

バターを溶かしてタマネギをアメ色になるまでよく炒めはじめた。牛肉を戻し、トマトピューレを加えて軽くかき混ぜ、ふたたび塩こしょうで味を調える。

お皿をわたしの前に並べ、フライパンから慎重に盛りつける。田澤の額には汗が吹き出している。その横顔は職人そのものだった。今日の小説はだいぶ手応えありだったらしい。

ぐう。わたしのおながが鳴った。付け合わせのおいもとピクルスが登場する。めっちゃめっちゃいいにおい。時間が余った田澤はまたなにかひと品こしらえようとしている。いいからはやく食わせるとわたしはスプーンを催促しかけ、ふと気づいた。

いまつくったってしょうがないだろう。

「よし」

田澤はもうひと皿をわたしの向かいに置き、腰掛けた。「食おうぜ」

わたしはしばらく、ハエ取り紙越しに田澤と見つめ合った。

「あの」

「んん？」田澤はすでに皿に顔を近づけてがつついていた。食い方もロシア人ふうだ。「はやく食えよ。今日はおれが皿を洗うんだから」

新婚か。心の中でツツコミを入れつつ、自分の皿をのぞきこむ。べつにいいか。わたしは審査員のひとりとしておいしくいただくことにし、さっそくスプーンを持ち上げた。

「で、今日はどうだった？ 新しい仕事は順調？」

もういいって。

49話 田澤、ロシアの鉄人。（後書き）

今日は個人的にはおいしゅうございました。それより田澤の名前を決めないとなあ。日本人男子の名前は苦手です。

50話 マチ子さん、金魚権侵害。

翌日、田澤は学校に来なかった。当然おいしいお弁当もなし。宅配を手配してくれたのなら話はべつだけど、そんな器用な高校生はなかなか存在しない。

わたしは二階の手洗い場で腕まくりし、水槽を洗っていた。一日しか経っていないのに苔の緑色に覆われている。水道の水をはね散らかしながら水槽をこしこしし、底に敷いた砂利もぬめぬめがなくなるまで丁寧にした。

というか、わたしっていつ勉強してるんだろう。

昨日のできごとを思い返す。田澤がなにをやってもうまくできないというのはほんとうにほんとう。いくらおいしいお弁当をこしらえたって、学校に来なきゃなんにもならないじゃないか。

新婚ごっこをしながら食べたビーフストロガノフは、まあおいしかったんだけど。お礼にお皿を洗ってあげたし。そのあと帰ってきたご両親にも挨拶したし（とつてもいい人だった）。そしてお兄さんの部屋からは得体の知れないうめき声が断続的に響き渡っていたし。

考えるのをやめ、金魚二匹に目をやる。ふつうは金魚だけに金魚鉢に移すところだけど、なにしろロシア産なのでガタイがいい。入れる容器もないのでしょうがなくシンクに寝かせていた。

手洗い場にはだれも近寄ってこない。不気味すぎるからだ。

一匹が横たわったままギロリと目を向けてきた。ボリース・アナ
トリーエヴィチだ。

「食事をさせる」

「だからさつきから三百回も言ってるでしょ？ もう少し待って」

「三百回は言っていない。せいぜい五、六回といったところだ」

「だから、これはもののたとえで」

「いかにも西側的な言いまわしね」とナターリヤ・ステパーノヴナ。
「さすが植民地っ子」

「植民地？」

「植民地ー？」ナターシャがかなり悪意のこもった口まねをした。
もとに戻してつづける。「だってそうじゃない。日本はなにからな
にまでアメリカ化べったり。政府しかり、娯楽しかり、教育しかり

」

「ナターシャ」

ボリースがとがめるように言った。相方に目を向け、どこが首だ
かわからないがかぶりを振った。ナターシャは彫りの深い金魚顔を
ハッとさせて口をつぐんだ。そして口笛でも吹きそうな素知らぬ顔
をして、ヒレでシンクをこすりはじめた。

なに、このやりとり。怪しい。わたしは砂利を両手ですくって水
槽に戻しながら考えた。もちろん、おいしいお弁当と引き替えの重

要な情報についてだ。植民地？ アメリカ合衆国が関わっているとしてもいいのだろうか？ ロシアのスパイならそれもあるかも。

わたしはさらに思考の淵へ沈み込む。いつぞやの教育委員会様の話を思い出していた。詳細は思い出せないけど、なんとなく雰囲気だけ。

と、目の端になにか馴染みのあるものが映った。振り返る。アヤたんが廊下の向こう側から夢遊病歩きで近づいてくる。

「どうしたの？」

「トイレに行きまーす」

すれちがいざまそう言つて、ふらふらしながらトイレに消えた。見えなくなるまで背中を見守る。便器に落ちなきやいいけど。

「まだ洗い終わらないのか。いいかげんにしろ」ボリースが体をくねらせて尾ひれをぴしゃりとした。「まったく、ひどい仕打ちだ。こんな扱いには耐えられない」

「まるで拷問よ。食事も与えられず」ナターシャはハッと息をのんだ。「これって拷問じゃない？」

「そうだ。きつとそうだ。われわれから力づくで情報を引き出そうと」

「水槽を洗ってるだけなんだけど」

「これは人権侵害よ！」

「金魚だけだな！」ボリースはのたうって体を反転させた。

「わかってる？ 国際問題に発展するのよ？ アムネスティ・インターナショナルが」

アヤたんがトイレから出てきた。「トイレに行ってきましたー」

薄らぼんやりしたセリフを残し、すれちがう。わたしは急いで声をかけた。

「ねえ、教室に水槽を運ぶの手伝ってくれない？」

「やつぱりだ！ 拷問する気なんだ！」ボリースが他の生徒に向かって叫んだ。「おい、そのジエーブシュカ マドモアゼルなんでもいいや。助けてくれ！」

まるで拷問してほしいみたいな言いぶりだ。そこまで言うならしてみようかと思ったけど、生き物を粗末にするべからずという母の教えが身に染みついているのでそんなことはできないのだった。

「あー」アヤたんが立ち止まった。のろりと振り向く。「いいよ」

アヤたんは相変わらず生気が感じられない。ほんとにどうしやっただろうか。それとも以前のアヤたんが異常でいまのがふつうなのかもしれない。思えばまだ知り合って一ヶ月弱。わたしはアヤたんのことを情報通のレズっ子という以外ほとんどなにも知らない。

「あのさ、はやくしてくれる？ 授業がはじまるから」

あまりに素っ気ない口ぶりに、わたしはドキリとした。こっちはほんとうのアヤたんだとしても、昔のほうが一千五百倍も好きだった。向こう三年間むしろぶりつかれつづけてもいいからもとに戻ってほしい。

水槽に水を入れながら、ロシア金魚どもを見下ろす。わたしの決意に満ちた感じのまなざしに気づいたのか、ボリースがぎくりと身を縮ませた。

「な、なにを」

「水槽に戻してほしかったら、情報を教えて」

「それでは約束が！」ナターシャが必死な様子で呼びかける。「じやあおいしいお弁当は」

「田澤によると、今日はシャシリク井なんだって。ロシアの鉄人のオリジナル創作料理。和と露のコラボレーションってわけ。もうすぐお弁当が届くはず」

「じゃあ　じゃあ、お弁当はどうするつもりだ？　捨てるのか？　せつかくつくったのに？　そんなもったいないことをしたら」

ナターシャは意識を失ったようにぐったりと横たわっている。わたしは心を鬼にして残忍な笑みを浮かべ、告げた。「心配しないでみんなでおいしくいただくから」

ボリースは顔を持ち上げ、背びれをむしられたように目を見開いた。そしてゆっくりと相方となり横たわった。

「わかった。情報を話すよ。だから水槽に　水槽に戻してくれ。
せめて彼女だけでも　」

気づくとアヤたんが手洗い場の縁をつかみ、上体をぐーっと折り
曲げて金魚どもをのぞきこんでいた。縁日に来た小学生みたいに無
邪気な笑みを浮かべている。

「おいしそう」

50話 マチ子さん、金魚権侵害。(後書き)

なんともバカな話です。まあ順調といえば順調。次回作のためにも筋力を衰えさせないよう、書きつづけたと思います。

51話 むりやりバレンタイン・デイ

金魚二匹は生命の灯火が消えかけていた。目のまわりは紫色に腫れていたし唇が切れて血が流れていたし体じゅうに拷問の痕のような火ぶくれができていたんだけど、もちろん痛めつけるようなことをした覚えはない。ただごはんをあげなかったただだ。

わたしは金魚を水槽ごと教室の後ろに置き、しゃがみこんだ。なんの科目だか忘れたけど次の授業まで時間がない。せいぜい二分四十秒といったところだろう。

「はやくして」わたしは催促した。「まともに授業を受けたいの」

「高校生の言葉とは思えないな うっ」ボリースは洗ったばかりのぴかぴかの水槽に横たわりながら、自分で勝手につけた傷を痛がった。「その前に ひつつ教えてくれ」

「なに？」

「なぜ秘密の情報を知りたい？」

「秘密だから」

「それはもつともな答えだ」神妙にうなづく。と、急にかぶりを振った。「そうじゃなくて。聞いてどうするつもりだ？ われわれをこんなひどい目に遭わせて、力づくで聞き出そうとする理由はなんだ？」

「拷問なんかしてないんだけど」

「地獄に 堕ちろ！」

ナターシャが最後の力を振り絞った感じで言った。もういいかげんにしてくれ。

「高校の大いなる秘密だ 知ってどうする？ おまえが学校を改革するのか。ひとりフェースブック革命を起こすつもりか。ん？ なんのために？ そして日本人女子高校生にそんなガッツがあるのか。なにか行動を起こすといっても、せいぜい手づくりチョコで大失敗するのが関の山だろう」

「本命チョコはだれにあげるつもりなの？」 気絶したはずのナターシャが軽い調子で聞いてきた。「やっぱり あの子？」

「あの子って」と言いかけ、わたしはぶんぶん頭を振った。「いいから教えて。関係ないでしょ」

流れて金魚を尋問し、ちっちゃな脳みそにある極秘情報を引き出そうとしているわたしだったけど、実際のところ、こいつらの言うとおりだった。わたしはなにをしようとしているんだろう。わたしになにができる？ もちろん、学校に変人育成教育をやめさせ、ふつうの高等学校に変革し、わたしを含めたヘンテコ能力の持ち主の全変人生徒をまともな人間として世に送り出すようにするのだ。わたしひとりで。

そんなこと、できるはずないじゃないか。手づくりチョコで大失敗すらできないっていうのに。

キンコンカンコン。授業開始のチャイムがスピーカーから聞こえ

てきた。と、だれかがわたしのかたわらにスツとしゃがみこんだ。

「ひとりじゃないよ」アヤたんだ。静かな決意がみなぎるっぽい口調で静かにつづける。「フェースブックでもないけど」

くりくりの目を細め、厳しく金魚を見下ろす。と、背中の方にだれかが立って陰をこしらえた。わたしは振り返った。

「おれもいるぞ」しまじろうだった。「学校みんなを兄ちゃんの二の舞にはさせない。決して」

「お待ちせ！」そこへ田澤が息を切らして駆け込んできた。「弁当持ってきた！ 注文どおりのシャシริก丼を一丁」

わたしはみんなを見まわした。なにこれ。仲間がひとつの目的に向かって大集合しはじめている。なんか都合がよくない？

「そうすべきだと思ったからだ」しまじろうがうなずいた。「おまえをひとりにはさせない。決して」

しばらく交流しないあいだに、しまじろうは「決して」がお気に入りになっていたようだった。

「その代わり、ひとつ頼みがある」

「なに？」わたしは聞いた。

「チョコをくれ」

「どうして？」

「バレンタインだからだ。そしておれはいまのところ、もらえる目処が立っていないのだ。決して」

「おれも」田澤が手を挙げる。「なんかくれよ。安売りの森永ダースでもいいから」

わたしは目玉をまわしながら脳の中で高速演算を行った。「いまって四月でしょ？」

「世の中的にはちがう。今日は二月十三日だ。二千十二年の」

それは初耳だ。

「そしてバレンタインの力は日付をも変えることができるのだ。とにかく、義理でもいい。チョコをくれ。女子にチョコをもらえれば、男はなんだってやるぞ。死さえもいとわない。決して、決してな」

田澤がうんうんうなずく。わたしは瀕死の金魚を見下ろし、そしてとなりで肩をくっつけてくるアヤたんを見た。この感触、昔のアヤたん。暗い顔でうつむき、スカートを押さえながらさらにちょこつとずつ近づいてくる。

チョコだけに。

「どうして 最近ぼんやりした様子でわたしを避けてたように見えたのは、もしかして」

「チョコくれないって、聞いたから」さみしそうにつぶやく。「ほ

かの子にあげるんだって」

「そんなこと　だれに聞いたの？」

「みんな」

「どのみんな？」

「みんな」

これではちがあかない。つまりアヤたんは何者かに、わたしは次のバレンタインで本命チョコをべつの子に送るつもりなんだよーと吹き込まれたのだ。

明日がバレンタインデーってこと自体初耳だけど、とにかくわたしはアヤたん復活のきっかけを逃したくなかった。のぞきこんで言う。

「わかった。あげるから」

アヤたんの瞳がふるつと揺らぎ、まつげがゆっくりと持ち上がった。

「森永ダースを？」

「ううん、ちがう。明治製菓のメルティキッズでも　なんなら手づくりでもいいよ。つくったことないけど」

「それは、本命ってこと？」

「それは」「右脳と左脳がまっぴたつに分かれそうになった。ど
つちの脳を取るべきか。わたしもそろそろ生き方を決める必要があ
るのかもしれない。」「そうだよ」

「ほんと?」

「ほんと」

まっげがさらにぐーっと持ち上がり、アヤたんEYEが全開にな
った。ぱちぱちさせてわたしを真っ正面から見つめ、心の底からう
れしそうになっこりした。

「やったー!」

いきなりマシ・オカバりの甲高い声を上げてバンザイし、わたし
にがばつと抱きついてきた。耳もとでささやく。

「まだ告白はしないよ。それは二年生の夏のできことだもん。だけ
どこのイベントがないとフラグが立たなくて」

「その言い方はやめて」

「わかった。あたしたち生身の人間だもんね。スクリプトで決めら
れた人生を歩んでいるわけじゃないんだ。でも」

「でも?」

「やったー!」

やれやれ。わたしはほっぺたをぐりぐり肩にこすりつけてくるア

ヤタンをそつとひつpegした。チョコをもらえないってだけなのに
どんだけの落ち込みようなんだと思うけど、とにかくもとに戻った
ようだ。

「義理でもいいんだ。明らかにダイソーで買ってきましたみたいな
板チョコでもかまわない。かまわないんだ」

しまじろうはさつきから苦しげにひとりごとをつぶやいている。

田澤は重箱のシャクリク井を開け、金魚どもを指さした。

「弁当、どうやって食わせんの？」

というわけで、わたしは思い知らされた。十五年のあいだ、わたしはバレンタインなんてお菓子メーカーがでっち上げたくだらないイベントだと思い込んでいた。もちろん母も同じ。けれどもそうではなかったらしい。チョコレートの力　まことに偉大だ。

そしてわたしたちはついに、金魚どもから母校の秘密を聞き出した。驚愕の内容だった。

51話 むりやりバレンタイン・デイ（後書き）

数話前のメルティキッスが伏線としてつながってしまいました。これ
れも偉大なる聖バレンタインのおかげか？ いや、お菓子メー
カーのおかげでしょう。

52話 大人をいやがらせる方法 夕食中にアニメを見る

「復讐だ」ボリスが言った。

「復習？」アヤたんが言った。

「そっちの字じゃない。ヴェンジェンスのほう」

「ロシア語だなんていうの？」

ボリスは無視してつづけた。「やつらは子供に復讐したがっている。子供というのは文字どおりの意味じゃない。子供のなものとという意味だ。つまり純真さとか、そんなようなものを憎んで」

「あたしたち純真じゃないよ」アヤたんが遮り、あっさりと言った。

「そうだ。けっこう汚れてるぞ」しまじろつもうなずいた。

「ならばこれではどうだ？ この学区内では来年から千葉テレビが受信できなくなる」

「うつ」田澤が反応した。「つつつつまり、千葉テレビで放映される一連のアニメは来年からもう」

「そうだ。おまえは来年から民放のキー局とNHKに頼るしかなくなるのだ。死んだも同然だろう？ おまえの中のかなにかが弾けただらう？ それが狙いなのだ」

「たしかに」

田澤は肩を落としてうつむいた。もう子供心の半分くらいは死んでしまっているようだった。

だけど。わたしは手を挙げた。

「はい、マチ子さん」と金魚。

「わたし、アニメ見たことないんだけど」答える。「興味もないし」「あたしも。興味があるのはマチ子さんだけ」アヤたんが余計なことをまで言った。

「おれは少年ジャンプを買ったことがない」としまじろう。「借りて読むだけだ。それにおれはもう少年じゃないしな」

ロシア金魚は意外といった顔でわたしたちを見まわした。「そうなの？」

全員うなづく（田澤はうなだれてつつけている）。

「しかしわれわれの情報では」

「そういうことが」

しまじろうが訳知り顔でうなずいた。みんなイラッと来たのか理由をたずねようとしなかったけど、しまじろうは勝手につつけた。

「大人はみんなわかってくれないんだ」

「は？」わたしが聞いた。

「だから、大人は子供心がわかってないんだ。いつの時代もな。中学生高校生は全員が全員アニメやゲームに興味があるとかんちがいしているんだ」

「そう、われわれが伝えたいのはまさにそこなのだ。もし先生方の陰謀を阻止するつもりならば、だが」

「うしろのおまえらー。席に着けー」

新しく赴任した数学の小松原先生が変声期を迎えずに大人になったみたいな甲高い声を響かせた。だけど小松原先生は大学出たての二十三歳だったのでわたしたちは無視することにした。

「どうなんだ？ 情報は活用しなければなんの意味もない。おまえらは二十二世紀が丘高校を変革するつもりはあるのか？」

「えーと」みなが押し黙る中、アヤたんが先陣を切った。真顔でたずねる。「少し待ってもらえない？」

「どのくらいだ」

「千葉テレビが映らなくなるまで！」

と言っていきなり笑顔になり、じつにうれしそうに田澤のすねを蹴り上げた。冗談かい。そしてすでに死んでいる田澤はなんの反応も見せなかった。

「金はどのくらいかる？ うちの家計が厳しいんだ。わかるだろ

う?」

と言っしまじろくに、アヤたんがテンション高めに拳を振り上げる。

「兄を働かせろー! 炭鉱にでも放り込んで」

「つづけてもいいか」ボリスが神妙に言った。「ナターシャが低酸素脳症を起こしかけている。できればちゃっちゃと話して医者に診せたい」

「どうぞ」

「もしおまえらにその気があるのなら、行川と接触しろ。おまえらに必要なアイテムとかガジェットとかを与えてくれる」v

「行川先生?」

「いまはもう先生ではない。ただの受刑者だ」

そう、あの元セクハラ数学教師はひと月ほど前に放火未遂で警察に逮捕・拘留されたんだった。あのときの光景がフラッシュバックする。個人的には現時点でいちばん接触したくない大人だった。

ボリスは血中の酸素濃度が低下しているナターシャをヒレで優しくなでた。

「ガジェット 子供がひと目見ただけでわくわくし、装備したくなるようなやつだ。たまに防御力が下がったり呪われたりとかしたりもするが、連中に対抗するためにがなんでも必要なのだ。な

ぜなら大人がもつとも忌み嫌うのが子供心であり、夕食にアニメを垂れ流すことであり、くだらない魔法のコンパクトであり、そんなもんつけて外を歩くなよ恥ずかしいというライダーの変身ベルトであり」

「なんでなんだよ？」田澤が半泣きしながらいきなり叫んだ。「なんでなんだ！」

「なぜあの男が鍵なのか。やつの行動を見ただろう？まるで抑制の効かない子供だった。教え子の前で授業中にタバコを吸ったり、公然とセクハラしたり。まともな大人はそんなことはしない。昼はじつと堪え忍び、家に帰ってから盗撮系ＡＶの無料動画をかき集めながら溶岩流のごとく欲望を吹き出させる。これが良識ある大人であり、教師なのだ。行川は味方だ。われわれを信じる」

「そうじゃねーよ！　なんで千葉テレビが」

田澤はしくしく泣き出した。そっちかい。みなまでつづけられず、ひとりとぼとぼと席へ戻った。意味不明のつぶやきが聞こえてくる。

「禁書　おれのインスピレーションが　これはゾンビですか」

しまじろうが後を追った。立ち止まり、くるりと振り向く。「やつは知らない。このへんはテレ玉も受信できることを」

相棒の肩をたたきつつ吉報を伝えている。女ふたりは取り残され、顔を見合わせながら答えに窮していた。どうする？　どうする？　どうする？　どう。。

べつに窮する必要もないような気もするけど。

「こらー！ 町田にもうひとり、席に戻れ！ 戻らないと 」「経験が少ない小松原先生は口ごもった。」「つまりその 教師として ぼくがおまえらになにをさせるかというと 」「

「小松原先生は『社会人として覚悟ができていない』という能力を持っているの」

アヤたんが言った。解説を聞くのはなんだか久しぶりだ。

「どうでもいい能力じゃない？」

「うんにゃ。そんなことはない。経験が少ないというのは、裏を返せば突拍子もないものが飛び出してくるってこと。予測不可能のパルプンテ」

「パルプンテ？」

「会っただけならいいんじゃない？ なめなめ」

「イヤだ」わたしは率直に言った。

「べつにいいじゃん。塀の向こうだし。あたしたちもどうせヒマだし、見たいアニメもないしね」アヤたんがわたしに絡みついてきた。「今日の放課後、行ってみよ？ 刑務所ってデートスポットとしてはどうかと思うけど、とりあえずあたしたちの仲はどこでだって進展しまくるわけで 」「

「 わかった」

わたしは金魚とアヤたん両方に答えた。また元気を失われても困るし。留置場でなにか起こらないわけはないんだけど、とにかく万端準備していけばなんとかなる。ならないか、やっぱり。とにかくわたしとしてはまともに授業を受けたい。「行く」

わたしたちが席に戻りかけると、ボリースが声をかけてきた。

「町田マチ子。目を見開け。そして見えないものに集中するのだ」

「

メンターのように厳かにのたまった。わたしは振り返り、雰囲気壊さないよう神妙にうなづく。

「それと先ほどからナターシャの意識がない。救急車を呼んでくれないか。頼む」

52話 大人をいやがらせる方法 夕食中にアニメを見る（後書き）

判決下るのはやすぎですが、気にしないでください。二月十四日に飛んだんだしね！

53話 なめなめ先生の真実

ロシア金魚に教えてもらった住所をもとに、放課後わたしとアヤたんは松戸アルカトラズ刑務所に向かった。ちなみに名前の由来は「ハクをつけたかったから」ということで、アルカトラズとは縁もゆかりもないらしい。その証拠に、刑務所は常磐線松戸駅からバスで二十分のところにあった。

刑務所に来たのははじめてだった。親類に受刑者はいないし、お笑い芸人でもないので慰問にやってきたこともない。映画やなんかで見たとおり、高い塀に囲まれていた。「塀の中」という言いまわしをあらためて実感する。

わたしはチョコレートが山盛りのバッグを抱え直した。差し入れた。

「なめなめ更生したかなー」

アヤたんののんきに言いながら塀を見上げている。単なる好奇心から塀をよじ登ろうとしたところを刑務所の職員にとめられた。

「こらこらこら。どうして塀によじ登って中に入ろうとするんだ」

「そこに塀があるからさ」アヤたんは怒られているのにまだ必死な様子で塀にしがみついている。「塀は乗り越えるためにある」

「なるほど、たしかにそのとおりだ。だがもつと簡単確実に入る方法があるぞ。知りたいか？」

けっこう冗談がつづじるおじさんだ。入り口で事情を説明し、いざ刑務所内へ。思わず娑婆を振り返る。通りをはさんだ向こうに規模は小さいが同じような施設があった。学校でいうところの校庭に大勢の男子が整列している。青少年用の更生施設だろうか。

「ちがうよ。あれは職業訓練学校」職員のおじさんが答えた。「近くにあるとなにかと便利だからさ」

わたしはうなずいた。建物内に入る。めったにない経験なので歩きながら思わず廊下を見まわしたが、脱出ルートを探していると誤解されるかもしれないので自重することにした。アヤたんは壁をペタペタ叩きながらわたしの前を歩き、ダクトの入り口っぽい天井の網を見つけるたびに「あれあれ、あそこから脱獄するんだよ！」などと言っては興奮していた。

職員のおじさんは困った顔で振り返った。

「で、だれに会いに来たの？ わかれた旦那とか？」

「えーと」 「わたしは口ごもった。面会を求めただけで放火の共犯になったりはしないだろうか。」わたしたちの学校のもと教師で

「なめなめ」

おじさんはアヤたんを見た。「なめなめ？」

「行川先生です」わたしがフォローする。「もと、先生」

「行川」 「とつばやき、おじさんはこれ以上は不可能なほど顔を

曇らせた。不安げな顔でわたしを見てから正面に向き直り、ひとり言のように言った。「厄介なことにならなきやいいが」

面会の受付をする。ここの受刑者は人気があるらしく、順番待ちに二十分待たされた。

「町田マチ子さん。三番の受付にどうぞー」

銀行とまちがえそうな軽い調子で名前を呼ばれ、あわててイスから立ち上がる。と、わたしのひとつ前に受付をしたふたり組の男性が振り返り、こちらに顔を向けた。

同時に驚く。

「あー、しまじろうだー」アヤたんが上野動物園のゴリラにでもするようしまじろうを指さした。「そして田澤も」

「どうしたの？」わたしがたずねた。

「入所するの？」アヤたんが同じトーンでつづいた。

「おまえらこそどうして」

お互いに事情を説明し合う。

「そうか。おれも面会に来たんだ。行川先生に」

「もう先生じゃないよ」

「行川受刑者に」アヤたんのツツコミにしまじろうは言い直した。

悩ましげにつづける。「もちろん、金魚の話聞いたからだ。おまえらと同じく。だがおれたちはデートではない」

「いっしょに行こうって言えばいいのに」とわたし。

「それに 個人的にもお世話になっているから」

「個人的？」

「個人的 - ?」

ぜんぜん似てないけどアヤたんがわたしの口まねをした。しまじろうはかるうじてうなずいた。なにかわけありのようだ。

わけありだった。わたしたちは受付に学生証を見せ、申込書に記入し、しまじろうたちといっしょに面会室に向かった。付き添いの係員の後を追う。

しまじろうは話す。

「行川先生は、あんな感じでやさぐれた雰囲気醸し出してはいたが、あれはポーズだったんだ。他の先生に勘づかれないためにな。先生は秘密裏に卒業生を支援していた」

「それは お兄さん？」わたしはたずねた。

「そうだ。変人として世に送り出され、職にも就けず、経済的に恵まれない卒業生 行川先生は密かに救いの手を差し伸べていたんだ。知らなかっただろう？」

「じゃなきゃしまじろう家が生きていけるわけないじゃん」田澤が軽い調子で言った。「犬まで飼ってんのにさ。おまえらには言わないでくれって、こいつから足止めを食ってたんだよ」

「口止めでしょ」

「それがいまじゃ差し入れをされる側ってわけねー」アヤたんが不謹慎なジョークを言った。「板チョコいっぱい持ってきたんだよねー、マチ子さん」

「なんとも言え。おれは先生を信じている。だが、ずっとおかしいと感じていたんだ。そうだろう、先生の安月給で卒業生の全員を経済的に支援するなど、できるはずがない。おれはことあるごとに先生にたずねた。『先生、なぜです？ 教師の安月給でどうしてそこまで？ なにか秘密があるんでしょう？』だが行川先生はなににも答えず、ただ優しげに微笑むだけだった。先生はおれの肩に手を置いて言った。『いいか、島。世の中には知らずにいたほうがいいこともあるんだ』。金魚の話聞いたとき、おれはピンと来たんだ。おれは先生から秘密を聞き出すためにやってきた。そう、きつとなにかの秘密団体に属しているんだ。高校に対してレジスタンス活動を行っていて――」

「ウソくせー」とことん空気の読めないアヤたんがしまじろうの背中をつついた。「支援って、銀行強盗だろーよ、どう考えてもさ――」

「よし、ここだ」

係員が立ち止まった。面会室の扉を開ける。「二十分だぞ」

付き添いの係官が面会室の扉を開けた。大広間だ。鉄格子のはまつた窓から娑婆の夕日が差し込み、白い床をオレンジ色に染めている。わたしたちは一歩、足を踏み入れた。

広間のど真ん中に、イスにぽつんにすわり背中を向ける人影があった。

「面会だぞ、行川」

係官が言う。イスの人物は頭を上げた。そしてゆっくりと振り向き、夕日に照らされた横顔を向けた。

「来たか」

53話 なめなめ先生の真実（後書き）

次回からレジスタンス編（予定）。ちなみに刑務所の描写がぼやけているのは、ちゃんと調べていないからです。

54話 なめなめM・D・とふつつじやない高校生たち

わたしは行川を見て、思わずあとじさった。フラッシュバックに襲われたというのもあるけど、いちばんはその変貌ぶりのせいだった。十歳は老けて見えた。頭は白髪割合が多くなり、ほおはこけ、顔の下半分が首もとまで無精ヒゲに覆われている。

行川は大儀そうに上体を折り曲げるようにし、体をこちらに向けただ。しばらくうつむいていたあと、目玉をぎよろりと持ち上げ、それから薄く微笑んだ。

「待っていたぜ。おまえら」

わたしたちひとりひとりをゆっくりと見まわす。最後にわたしを見た。そのまま二十秒ほど凝視されたけど、以前の視姦するような見つめ方ではなかった。むしろ渋好みなら一瞬で落とされてしまいそうな表情だった。

そして行川はすべて承知という感じでうなずいた。「金魚か」

全員がこくりとする。

「いいだろう。だがそのまえに」行川はサッと頭を持ち上げ、係官に冗談めかした口調で話しかけた。「内々の話があるんだ。悪いがちょっとはずしてくれないか」

「ダメだ」係官はあっさり断った。

「あっそう」行川は引き下がった。わたしたちに向き直る。「とい

うわけだ。おれはあとしばらくここから出られない。あと三年か五年は」

「先生　「しまじろうが一步進み出た。」「おれはお礼を言いに来ました。先生の援助がなかったら、兄はいまごろ死んでいました」

「交通事故でな。そう、泥酔して車を運転しても、必ず検問にひっかかるとはかぎらない。能力があるうと、なかるうと。基本的なことだ。だがおまえらにはわかっていない」

「おれ　おれたちは、いったい何者なんです？　なぜヘンテコなんです？　どうしてそろいもそろって二十二世紀が丘高校に入学し、変人としての教育を受けて　」

勢い込むしまじろうを、行川は手を挙げて制した。しまじろうはおとなしく口をつぐんだ。

あらためてわたしたちを見まわす。

「おまえらはなにをしに来たんだ？　まさか、母校をまともな高校に変革し、まともな教育を受け、ふつうの女の子に戻りたいなんて言いに来たわけではあるまい？」行川は顔をしかめてかぶりを振り、大げさに両手を持ち上げた。「まさかな。そんなことはあり得ない。なぜだか当ててみようか？　おまえらは高校生だからだ。ふつつになりたい高校生なんて、聞いたことがない。おまえらは特別だ。才能がある」

「そうだよ」アヤたんが言った。と、首をひねった。「いや、ちがうか。『そうだよ』ってなにに対してだっけ？　わかんね」

「そうだよでいいんだよ」田澤がつつこんだ。行川を見下ろし、つづける。「つまり、ふつうに戻りたいんですよ。もうたくさんだ。厚生大臣宛に送らなきゃ好きな子にまともにメールすることすらできないなんて」

えっ？ わたしはビクリとした。「それって」

「だから学校を変革するんだ。力を貸してください」田澤は言い切ったあと、自信なさげにしまじろうを見た。「でいいんだっけ？」

「それは本気か？」行川が田澤にぎよる目を向けた。「それともおまえらは、追い詰められた日曜の晩みたいに発作的になにか大きなことがしたくなっただけなのか？」

「おれは本気だ」しまじろうがむつつりと言った。「ほかのみんなはわからんが、少なくともバカになれる能力なんて、なんのメリットもない。ありがたくもなんともない」

「あたしも治りたい」なににも考えていない感じでアヤたんが手を挙げた。

「町田はどうだ？」

「わたしは」

答えようとして、口ごもった。学校を変革する理由、ふつうの女の子に戻る理由。入学してからこれまでにいろんなわけのわからないことがあった。理由なんて、考えるまでもない。だったらどうして即答できないんだろ。ふつうに戻りたいはずなのに。ふつう

てすばらしいはずなのに。

行川はせせら笑うように鼻を鳴らした。

「そうかそうか。答えられんのも無理はない。おまえはいつもそう
だ。なにも見えていないんだ。その能力のとおりにな。自分には
そんな大それたことできるわけないと考えているんだろう？ おま
えは自分をなにもできないふつうの高校一年生だと思い込んでいる。
変革のチャンスはこれまでいくらでも転がっていたのに、自分自身
でそう思い込もうとしている。『わたし、ふつうなの。なんにもで
きな〜い』とな。だからなんだよ、その能力が身についたのは
皮肉なもんだ。そう思わないか、ええ？」

長々としやべったあと、軽く咳き込んだ。わたしは話の半分も聞
いていなかった。いつものとおり。けれども行川の言葉の核心が
頭のどこかにこびりついて離れようとしな。そして例のぼや騒ぎ
を思い出した。あのときわたしは、消火器を見つけられなかった。
見えなかったのは本当だ。けどもし見えていたら？ わたしは行
動を起こし、消化剤を振りまいて問題を解決しただろうか？

いや、たぶんしなかっただろう。だれかがやってくれるだろう
そう考えて、なにもしなかったはずだ。

つまり、なにかが見えないのはそういうことなのか。

見えないのは、見ようとしなから？

「さあ、謎解きはこちらまでだ。そんなのはどうだっていい」あ
と十分だ、と係官が言った。行川は一瞬うつとおしそくに目を向け、
若干駆け足でつづけた。「あの高校を変えれば済むことだ。そうだ

ろっ?」

そのとおりだ。わたしは思った。けどいったいどうやって変革するのだ　わたしが言いかけると、しまじろうが先にたずねた。

「力を貸してください」

「おれの力を?　この哀れな受刑者になにができる?　いったいこのおれになにをしてほしいんだ?　答えてみる」

「でも先生は　」

わたしが勢い込んで言いかけると、今度はアヤたんに遮られた。せつかくその気になっているのに。

「でも先生は、しまじろう家を経済的に援助してるんでしょ?　それどころか卒業生全員をさ」

「組織に属してんですか?」田澤が興味津々にたずねる。「なにかの目的があるんだ。レジスタンス的な。それってたぶん秘密組織とかで　」

行川は答えなかった。ほんの一瞬、係官に目を向ける。

「ひとりで養えるわけじゃないじゃんか」アヤたんがさらにつっこむ。

「先生の月収、いくらくらいだったの?」

行川は表情を隠すように振り向き、鉄格子のはまった窓の外を見やった。こうしているあいだにも娑婆の西日はどんどん薄れ、夜の闇に飲み込まれようとしている。

「 いずれ答えてやろう。知らないほうがいいこともあるんだ。いまはまだ、な」

「 二十五万くらい？ 社会保険と厚生年金を差し引くと手取りはだいたい 」

「 いいだろう。そこまで言うなら力を貸してやる」

いきなり振り向いて言った。係官に聞かれたくないのは秘密組織の存在なのか教師の安月給なのかよくわからなかったけど、行川はなにかを決意したように面を上げ、唇を引き結んだ。そして上体をねじるようにし、大儀そうに立ち上がりかけた。

と、わたしは気づいた。大義そうなんじゃなくて、行川は脚を悪くしているのだ。

イスの背もたれに寄りかかるように立ち上がり、脚をひきずって壁に立てかけた杖を取る。まるでドクター・ハウスだ。「着いてこい。見せたいものがある」

えっちらおっちら扉に向かう。さりげなく大広間の面会室を出て行こうとし、当たり前のように係官にとっ捕まった。

「 終わりだ」係官が厳格な調子で言った。「行川、来い」

行川は必死な様子でわたしたちを見まわした。「いいか、よく聞け。おれはここで刑期を務めながら、おまえらに指令を出そう。まずはおれの仲間に会え。やつは傭兵上がりで、いまはトイザラスの店員をしている。作戦に必要なおもしろガジェットを用意してくれるだろう」

「テレンス・リー？」田澤が言った。

「テレンス・リーはトイザラスの店員じゃないだろう。傭兵でもないし」行川は言った。「とにかくやつのを助力を請え。そして学校を変革するための作戦を実行する」

「どんな作戦？」わたしはたずねた。ようやく遮らずにたずねることができたのでうれしくて意味もなくもう一度たずねた。「どんな作戦なんです？」

「町田マチ子。作戦の成功には、おまえの活躍が必要不可欠だぞ。もう逃げるな。見えない、などと言ってな」

係官は乱暴なデートみたいな感じで行川の腕を取った。かなり乱暴にひきずっていく。と、係官が振り返り、わたしに一瞬目を向けた。ちっちゃなやぶにらみの瞳がきらりと光った。

わたしはぞくりとした。なんだいまの感覚は。

「どんな作戦なんだー」アヤたんが元教師の背中に呼びかける。「よけいなこと言いすぎて時間切れなんて、いつもと同じパターンじゃないかよー」

連行された行川が、まるで夕日のように廊下の角に消えかける。肩越しに振り返り、ひとことだけ言い残した。

「排除するんだ」

ばたんと扉が閉まった。

54話 なめなめM・D・とふつつじやない高校生たち（後書き）

ちよつとまじめすぎるかなあ（そんなことはない）。あと最近ドクター・ハウスを見ているもんで、ヒュー・ローリーが頭から離れずつい……。

55話 ただしものは、みえないもの。

受刑者であり指導者である行川との面会が終わり、わたしたちは約一時間ぶりに娑婆の空気を吸った。もう日が落ちていた。そろそろ六時のニュースがはじまる時間。

鉄格子めいた正門の扉が背後でがちゃんと閉まる。駅に向かって通りを歩き出し、ふと全員が示し合わせたように立ち止まった。

「トイザラス」 田澤が言った。

「おれは行くぞ。自らの手で運命を変えるんだ」

「行きたくないなんて言ってねー。おれが言いたかったのは、つまり」

「トイザラスって、どこなの？」アヤたんが引き継いだ。「北は北海道、南は九州沖縄まで」

アヤたんの言うとおりだった。

「全店舗探せばいいだろう」しまじろうはかたくなだった。完全に行川を心酔している。「いまからかたっぱしに電話をかけるぞ」

「もしもし」アヤたんが冷やかすように電話の真似っこをする。「ちよっと聞きたいんですけどー、そちらに」

無言。

「いますー？」ぎょろりと目を動かし、しまじろうを見た。「だれを電話口に呼び出すんだって話だよ」

アヤたんってまじめになれば意外と賢いのかもしれない。じつはわたしもそれに気づいていた。その仲間っていうのはどこのだれなんだって話。

「それは」

「あー腹減った。カレー食いにいかねえ？」状況が行き詰まりを見せているので田澤はあからさまになかったことにしようとしていた。「おれがつくつてもいいよ。三十二倍激辛のやつ。あ、そうだ。インド風なんて食いたくね？ インドよくね？」

「よくねえ」しまじろうがむつつりと返す。そして拳を握った。「おれは 今回の作戦で先生に恩返しをしたい。命を懸けてもいいと思っている。おまえらだってそうだろう」

正直そうではなかった。だけど。

気づくとしまじろうが尋常じゃない様子でわたしをじっと見つめていた。目を大きく見開き、絶命寸前といった感じだ。

「そうだ、町田なら」

「は？ わたし？」

「おまえは『は？』とか『え？』とか『わたし？』とかしか言えないのか。もつと長いセリフをしゃべったらどうなんだ、え？」しまじろうはわたしの核となるパーソナリティに半ギレしたあと、理由

を説明した。「正確にはおまえというより、おまえの能力だ。それでトイザラスの店員を見つけ出せる」

「でも、どうやって？」アヤたんがわたしの物真似でたずねた。しつこいようだけどまったく似ていない。「ワタシガ？」

しまじろうはうなずき、熱っぽくわたしたちを見まわした。「だけれか、地図を持ってないか？」

アイデアはこうだった。

「町田に地図を トイザラスの店舗一覧を見せるんだ。インターネットとかで」

「いんたーねつと！」

田澤が吹き出した。「さすがはiモード童貞」

しまじろうはぎろりと親友をにらんだ。おまえは真性だろうとまなざしが語っていた。

「いんたーねつと、いんたーねつと！」田澤は脳の回路が小学生レベルにまで落ち込んでいる。いきなり渋い声で言った。「すみません、いんたーねつとがほしいんですが」

「あ、そういうこと」わたしはべつにひらめきもなかったけど、男の怒りが爆発する前にとりあえずそう言ってみた。すると不思議なことにしまじろうの意図したところが理解できた。

「つまり、わたしに見えない店舗が正しいということね」

「それは いや、すまん。そういうことだ」顔を赤黒くして息を吹き出し、怒りを無理やり抑えこむように言った。「じゃあ、さっそく行動開始だな。インターネットを見よう。このへんだとどこで見られる？」

ということで、一行はわたしの家に大集合した。もつと正確に言う、わたしの部屋だ。たしかにインターネットは見放題だし部屋代を取るつもりもないけど、なんでわたしの家に？

「友達、だからじゃない？」アヤたんが思わせぶりな調子でささやいた。

とにかく一気に五人に侵入されたのははじめてだ。六畳一間のわたしの部屋はとたんに息苦しくなった。

「ねーちゃん、これ友達？ 友達できたんだ？ あ、ざーす。なにやってんすか？ いや、なんでもないっす！ ただねーちゃんが男連れてくるのっすげーレアだなーと思って」

ちなみに五人目は弟だった。受験生はヒマなのだ。

わたしは机にすわり、ギャラリを背にノートパソコンを開いた。起動するとういーんと音が鳴り、しまじろうが息をのんだ。はじめて火を見た原始人みたいだ。

トイザらスの店舗案内をクリックし、水色の日本地図を表示させる。

「どう、見えない？」

アヤたんが画面をのぞきこみ、ついでにほつぺたをくつつけてきた。

「いったいどういう仕組みでこんな小さな箱に」しまじろうはまだ困惑している。

わたしは凝視した。日本全国の都道府県を北から順に確認していく。「あ」

「どうした？」田澤が言った。どうでもいいが机の上にケツを乗せないでほしい。「見えたか？」

その逆だった。「千葉県がない」

「よし、クリックしろ」

しまじろうが覚え立ての単語で指示する。わたしはなにもない部分をクリックした。するとページが遷移し、千葉県の店舗一覧が表示された。スクロールしていく。一カ所、妙に不自然な空白があった。マウスを操作してそのあたりにカーソルを持っていき、かちかち左のボタンを押してみる。

「ここらへんになにかがある？」

「柏店か」としまじろう。

「駅からだいぶ遠いぞ」と田澤。

「電話番号は04」「アヤたんが電話番号を読み上げた。」

だよ」

そして全員で言った。「すごい、話が進展している！」

「なんの話すか？」ひとり取り残された弟がきよるきよるして言った。「トイザらスになにかあるんすか？　つかねーちゃん、そろそろ飯だぞ」

さっそく電話をかける。「もしもし？　ちょっと聞きたいんですけど」

「はいなんでしょう？」店員らしいお姉さんが答えた。

「あの　ちょっと待ってください」

アヤたんがさっきからくつついてきて話しづらいつたらない。手のひらで顔面をつかんで無理やりひっぺがした。

「　　どうかしました？」

「いいえ。　あの、そちらに　いえ、とある店員さんを探しているんですけど　　」

「話し下手だな」

田澤がつぶやいた。わたしは携帯電話に手を当てて振り返り、鋭くささやいた。「名前知らない！　なんて聞けばいいの？」

「頭を働かせろ。元傭兵の店員はいますか？　とたずねるんだ」

電話が苦手なわたしはろくに考えもせずつなずき、しまじろくに言われたとおりたずねてみた。

店員のお姉さんが口ごもった。「傭兵、ですか？」

「元、傭兵です」

「よく言った」田澤は完全におもしろがっている。

「傭兵と言われましても」「当たり前すぎるがかなり困った口調だった。「過去にどの戦闘に参加したかがわかりませんと答えようがないのですが」

「戦闘？」まるでトイザラス柏店には元傭兵が複数人いるみたいなお話しぶりだ。わたしはふたたび受話器を耳から離す。「どの戦闘かだって！」

「町田はどう思う？」

すっかりチームリーダー気取りのしまじろうが静かに言った。「おまえが見えない地域だ。おまえにとって戦闘がなさそうな地域とはどこだ？」

「それってどういう」

「なんでもいいから言ってみろ」

わたしは深呼吸し、携帯電話を耳に押し当てた。「戦歴ですか」

「ええ。それとできましたらその戦闘によって国際社会にどのような

な影響を及ぼしたかも付け加えていただけると」

まるで社会のテストだ。わたしは頭の中に白地図を思い浮かべた。そして個人的に戦闘がなさそうな平和な地域を探してみた。

アメリカとアラブ諸国とバルカン半島が一瞬にして消えた。

「えーと」「これ以上ひきのばすと電話を切られてしまいそうだな。わたしは最初にひらめいた地域を言った。「キリバス共和国！」

しばらく応答がなかった。「もしもし？」

「キリバス、ですか？」

「ちがつてました？ ちょっと待ってください、もう一度考えてみますから」

「少々お待ちください」

お姉さんはそう言い、電話を保留にした。ミスチルらしい保留の音楽が延々ループする。

「ねーちゃん、飯だぜ」弟が肩をつついた。「また母に怒られっぞ」

曲は四回ループしたあと、サビの直前で唐突に切れた。男性の声が元気よく応答した。

「お電話代わりました、ジェフリー本間ですが」

55話 ただしものは、みえないもの。（後書き）

なんかキャラクターが勝手に遊んでくれるようになりました。いいことだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9345p/>

マチ子さん、見えない。

2011年8月31日19時37分発行